
剣と鋼と黄金の大地

むみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣と鋼と黄金の大地

【Nコード】

N8706M

【作者名】

むみ

【あらすじ】

聖杯戦争は終わり、衛宮士郎は届かない星に手を伸ばして歩き出す。

しかし、本来ならば届かないその道のりにちょっとしたイレギュラーを混ぜて。
紛れ込んだイレギュラーによって本来の道を大きく逸れて、いや突き抜けて。

大団円のあとの蛇足という恐ろしく無粋な話。

拳句逆行？モノになる予感。

設定とか無茶苦茶ですがノリで読んでももらえると嬉しいなあ、と思う次第です。

ぶろろーぐ（前書き）

F a t e の二次創作でございます。

突っ込みどころ満載、ご都合主義満載、独自解釈・・・というより文章力がないゆえのゴリ押しとか色々でございますが平にご容赦を。ついでにブローグのあとはクロス物にするか逆行物にするかもまだ決めていないグダグダっぷり。

シリアスになるかギャグになるかも決まってません。

きつと文体もコロコロ変わるんだろうなあ、駄目駄目ですね。

ぶろろーぐ

朝日が昇る。

止んでいた風が立ち始める。

永遠とも思える黄金。

その中で、

「最後に、一つだけ伝えないと」

強く、意思の籠もった、それでいて今まで一番穏やかな声で彼女

は言った。

彼女はとても優しく穏かな瞳で、後悔のない声で、

「シロウ 貴方を、愛している」

そんな言葉を、口にした。

そして、

「シロウ、覚えておいてください。」

更に、

「貴方が貴方である限り、私という剣は貴方と共に在ると」

そんなことを口にして

「当然でしょう、シロウ　貴方は、私の鞘なのですから」

最後に口づけをして消えていった。

むかしむかし、せんそうがおきました。

くにとくにとがたたかうせんそうではなく、こじんとこじんでたたかうせんそうがおきました。

たつたななになだけだったから、ほんとうはけんかとかそういいいかたがただしいのかもしれないけれど、

けんかというにはそのなかのだれひとりとしてぶつうではなかったので、やっぱりせんそうでした。

そのせんそうはにしゅうかんほどでおわりました。

そのさんかしゃのなかでいちばんへっぱこなおとこのこがおわらせました。

たたかいのさいご、えいえんともおもえるきんいろのせかいで、

おとこのことさいごまでいっしょだったきしさまのことばで、きれいにおわるだいだんえん。

そのおとこのこはそのときのけしきをことばをじぶんをあいし、じ

ぶんがあいしたたきしさまのことをじぶんがしぬときまで

いえ、じぶんがしんでもわすれないとおもったのでした。

そしておとこのこは、

そのままじぶんのしんじたみちをしぬまでこうかいすることなく、

いびつなほどに

まっすぐに

かけ

ぬけて

しんだ

あとに

そのことを

こうかい

し

つづける

はずでした。

本来ならばそうなる筈だった。

だが、何処からそのお話はおかしくなったのだろうか。

本来ならば衛宮士郎がセイバーに還す筈だった聖剣の鞘を還さなかった為か、

本来ならばその鞘が返還されていなければ勝機がなかった筈のセイバーが、その状態で英雄王を打ち破った為か、

本来ならば最後の言葉と共に霧散するはずだったセイバーを構成していた魔力が衛宮士郎へと流れ込んだ為か、

本来ならばセイバーが消えると共にその力を失う筈の聖剣の鞘が、その瞬間をもって衛宮士郎を完全な所有者とし、力を失わなかった為か、

聖杯戦争が終結して数年後、

しょうねんはいつまでたってもしにませんでした。

衛宮士郎という青年の刻は止まった。

ぶろろーぐ（後書き）

うひゃーやってしまった。

もう後戻りは出来ないのがんばります。

そしてごめんなさい。

駄文でございますがご容赦を。

これ以上言い訳も見苦しいので以上で。

ぶろろーぐ 2

とんでもないことをしてしまった。

セイバー、いやアルトリア・ペンドラゴンは夢の中で愕然と呟いた。

遠坂凜のうつかりどころではない、とんでもないうつかりをやらかした。

「すまないなベディヴィエール。今度の眠りは、少し、永く」

そんな寝言を吐いて眠りについた自分を思いっきりぶん殴ってやりたい。

彼女は夢の続きを見ながら歯噛みした。

彼女は夢の続きを見ていた。

己が最期に願ったとおりの夢の続きを。

しかし

その夢は彼女に衝撃を与えた。

あの青年、衛宮士郎が自分と同じように身体の刻が止まってしまっていたのだから。

原因ははっきりしている、

あらゆる物理干渉や魔法すらも遮断し、傷や病、老化をも癒す結界

宝具「全て遠き理想郷」
アヴァロン

あれが何らかの原因で…恐らく自分だろう、そのせいで完全に本来の機能を取り戻している。

アルトリアは自身の迂闊さを呪った。

あれがシロウの身体の中にあることは知っていたのに、何故そのままにってしまったのかと。

自分が居なければ完全に機能することはありえなかったとはいえ、現にこうして機能しているのだ。

だが、後悔しても遅すぎる、自分には何も出来ない。

唯一救いがあるとすれば、シロウが自身の異常に気付きアヴァロンを身体から取り除けば元に戻るということだろう。

気が付くまでの何年かの身体の成長はその後にとり戻せる。

そう考えたアルトリアはシロウがその数年後、「勝利すべき黄金の剣」を投影した姿を見て絶句した。
カリバーン

何故なら、投影した選定の剣は『真作』だったのだ。

彼の世界である固有結界「無限の剣製」アンリミテッドブレイドワークスその剣の丘に刺さっていた

真作である「勝利すべき黄金の剣」カリバーンを抜いた。

これが意味することは、一つ。

彼はこの瞬間、完全に人では無くなった。

何故、贗作しか存在しない筈のあの世界に真作、それもよりにもよってあの剣が、しかも何故王でもないシロウに抜けるのか、

などと今更考えても仕方がない。

存在した、抜いてしまった、そしてその効果が発揮されてしまったのが他ならぬ自分であるからこそ理解できた。

アルトリアは愕然とした。

何も考えられなかった。

呆然としている間にも目の前で夢は続いていく。

アルトリアは立ち直れなかった。

自失から立ち直ろうとする度に再びその膝を折られる光景が延々と流れていった。

『正義の味方』

全てを救う『正義の味方』

それを目指して走り出した、そして走り抜けるシロウの姿を見続けることになったからだ。

何も得るもの無く、理解も求めず、ただ全ての救いを求めて、一人でも多く人を救い続けるその姿。

どうしても全てを救う事が出来ないと、九を救うために一の犠牲が必要ならばその一は自分を置いてほかに無い。

自分以外の犠牲など認めはしないその生き方。

いや、自身を犠牲などとも考えずに自身をすり減らし駆け続ける。

『 体は、剣で出来ている。』

違う

『 シロウ、貴方は私の鞘なのですから 』

そうだ

『 この体は、鞘で 』

そうだ、

『 の 鞘で 』

いくら傷つこうとも、鞘の力で回復し、年老いることも無い。

だが、心はそうではない。

しかし、

衛宮士郎は、止まらない。

「この体は、鞘で」

本来ならば死を迎えて止まる筈のその身体は既に人にあらず。

故に、衛宮士郎は止まらない。

「アイツの、鞘で」

本来ならば、限界を迎え、世界と契約し、その力を以ってしても限界を向かえ膝を突いたであろうその時も、今の彼には訪れない。

衛宮士郎は

「アイツの鞘で、出来ている」

止まらない

最早彼女は何も考えることが出来ずにその光景を眺めていることしか出来なかった。

ぶろろーぐ 2 (後書き)

・・・へんじがないただのしかばねのようだ

ぶろろーぐ 3

一体いつからこうなったのか、もう殆ど憶えていない。

憶えているのは自分が『エミヤ』という名だという事と、『正義の味方』という在り方、そしてあの黄金の朝焼けの誰かの姿とその言葉

ただただ長い時をその綺麗な物を目指して歩いてきた。

一体何年経ったのか

共に在った人々はどうの昔に朽ち果てて

それでもひたすら歩き続けて

目指して目指して

血塗れになりながらもそれを目指して

磨り減りながらもずっと目指して

届かない星の輝きに手を伸ばし続けて

ずっとずっとずっと歩き続けた。

色々なことがあった。

でももう思い出すことが出来ない。

精々ここ数十年ばかりのことぐらいだが、機械のように同じ事を繰り返してきたのでイマイチ記憶に残っていない。

なんだ、結局何も覚えていないのと同じではないかと思わず苦笑する。

ふむ、まだ笑うことは出来るらしい。

ふと、目が覚めた。

どれほど歩いてきただろう。

荒れ果てた大地ばかり選んでいたのに、

深い森を抜けて、懐かしい草原に立っていた。

ここが何処かもわからない。

あれからどれほど経ったのか、それからどれほどの工程があったのか。

「
ふう」

肩から荷物を下ろして一息つく。

ああ、この歩みは何処までも続くと思っていたけれど

旅は一先ずここで終わりらしい。

視界は澄み切って広い。

心は穏かに、一歩踏み出すことにもう思い出せもしないあの頃に戻っていく。

果ての無い青空を見て、いつかの約束を思い出す。

あれは幼い故の幻、強がりのような願いだった。

同じ空を見て、同じものを感じたから、追いつけていればいつかきつかなう。

そう故郷の街で思ったのだ。

そうして、彼女の夢も目覚めを迎えた。

空を見上げたまま、望みを待ち続ける。

「

」

風の向きが変わったことに気付いて、溢れそうになる涙を堪えた。

彼女は祈るように、訪れたものを待ち続ける。

最初はとんでもないことをしてしまった、と嘆いた。

彼の人生を私のせいで歪めてしまった、とただ呆然とその夢を見ていた。

だが、見続けるうちにそれは違うと気が付いた。

きっと彼はあのようなものが無くても、あんな力が無くてもきっと道を曲げなかっただろう。

きつと踏み外さずに真っ直ぐに歩き続けてしまう。

ただそれが悲しかった。

人間らしさを仕舞い込んで、同じ事を繰り返すだけの機械になって。

その想いに、痛みにも、誰も気が付かない。

それでも、私は貴方の強さを知っているから。

だから私がすることは、後悔でも謝罪でもない。

息は軽く上がっていた。

この身体がそんな風になるなんて、もう長いこと忘れていた。

まるで半人前だったあの頃に戻ったみたいだ。

まあ、経験を積んだからといって、一人前でもなかったな。

いや、積み過ぎて色んな物を埋没させてしまっているから半人前より性質が悪いか。

そう思うと笑ってしまう。

思えば、どれだけ空に願っただろう

会いたかった。

叶うのならもう一度、その在り方を腕に抱いて、焦がれていたものを確かめたかった。

・・・知らず鼓動は早まっていく。

それでもここからは動かずに。

だって、歩き続けた彼の役割を台無しにするのは忍びない。

本当はすぐに駆け寄って行きたいけれど、ここはあの時と同じように、彼の言葉を待ってしよう。

ああ

言葉でしか憶えていなかったものが鮮明に蘇る。

大事に仕舞っていたものが、もう一度動き出す。

ブリキの心臓に、懐かしい血が通う。

黄金の大地。

失われて久しい彼女の郷に、ようやく心が追いついた。

湧き上がる思いは山のようにあつて、けれど出てくる言葉は一つだけ。

どれだけ会いたかったか、どれだけ待たせてしまったかはもう意味の無いことだ。

結局、俺は生き方を変えることは出来なかった。

変えるつもりもなかった。

けれど、

だからこそ、その歩いた道の末に出会えたものがあつた。

その先に尊いものが残つたんだ。

大事なものが取り出される。

奥に奥に仕舞い込んでいて見つけられるか不安だったけど、取り出せた。

こんな顔をするのは本当にいつ以来だろう。

上手くできているか、変な顔になっていないか不安もあったがきつと大丈夫。

俺はきつとあのころのように笑えている。

だから、

「ただいま。セイバー」

口から出た言葉も、本当にあの頃のまま。

まるで、ここからあの日の続きが始まるように

「
」

地を踏む足は軽く。

少女は崩れるように微笑んで、

「はい おかえりなさい、シロウ」

夢はこうして終わりを迎える。

ぶろろーぐ 3 (後書き)

へんじがないただのなまごみのようだ

こうしてせいねんとしょうじょはさいかいし、すえながくしあわせにくらしましたとき。

めでたし、めでたし。

しかし、残念なことにこのお話には大変長い蛇足がある。

本編よりも長い長い蛇足が。

当然である、彼らは老いず、死なないのだから。

再会を果たした二人は、その郷で長い時を過ごしました。

世界の理から隔絶したその場所で、二人きりでとてもとても長い時を穏やかに。

磨り減り磨耗した青年は磨り減ったものは戻らなかったけれど、

かけがえの無い大切なものを腕に抱いて新しいものを積み上げていきました。

長い長い時間の中で少しずつ少しずつ積み上げて、

磨耗した膨大な過去よりも沢山のものを新しく得た青年だけど、

それでも残ったものがある。

だから青年は少女と共に、時には郷の外に出て、時代の流れに驚きつつも世界を回り、

悲劇に会えばそれを救うために戦いました。

旅から戻り、

郷で長い時を再び過ごし、

そしてまた少しの旅に出て、

一人で旅したあの時よりは沢山の人は救えなかったけれど、

あの時よりも沢山の笑顔を貰いながら、

少女と共に長い長い時を生きました。

でも、あまりに長い時を生き過ぎたのか、ついに星の終わりがやってきました。

ああ、随分と長生きしたものだ。

二人は笑いあいました。

星の終わりはその星に棲む生命の終わり。

二人はそれなら仕方が無いと、自分たちだけズルをするのは悪いから。

そう言って、自分達も一緒に終わりにしよう。

そう思いました。

ですが、二人の想像以上にヒトは強いいきものでした。

人の文明技術は星の死さえも乗り越えました。

亜麗百種

人が生み出した新たな霊長類。

二人は戸惑いました。

本来ならば星が終われば星の命も全て終わる。

星は人によって齎される自身の滅びを、共に滅ぶことで「いいこと」として赦すのだ。

星の命が終わっても、星を殺した人が生きていくことは正しいのか、と。

二人は悩みました。

暫しの時間が経ち、二人は気が付きました。

『約束された勝利の剣』
エクスカリバー

人々の「こうであって欲しい」という願いを結晶化し、星が鍛えた究極の幻想。

彼女が目覚めを迎えたあの時、湖の婦人に還されたはずのそれは何故か彼女の手の中であつた。

その剣が未だ輝きを失っていないことに。

だから二人は決めました。

その輝きが失われない限り、それを信じよう、と。

そして暫しの時が流れました。

終わりを迎えた星の上で、人と新たなヒトである亜麗百種は生き残りました。

しかし、『六人姉妹』が率いる亜麗百種が叛旗を翻し、人と世界の覇権をかけた大戦が始まり、再び人は滅びの危機に立たされました。

人と新たなヒトである亜麗百種の戦争に、二人は迷わず飛び込んでいきました。

その争いを止めるために。

そこからは戦いの日々でした。

たった二人で戦いを止める為に、悲劇を回避するために。

既にこの世界で失われた『魔術』という力を以って。

戦って

戦って

戦って

最初は誰にも理解されず、双方から怨嗟の声を浴びせられながらも、

二人は争いを止める為に駆け続けました。

そうするうちに、少しずつわかってくれる人が出てきて、

少しずつ仲間が出来て、

それは少しずつ増えていきました。

けれど始ってしまった戦いはそう簡単には終わりません。

そうしている間に、能力で劣る人類は次第に追い詰められていきま
した。

滅びに近づく人類の悲嘆と怨嗟の声、亜麗百種の侮蔑と嘲笑の聲が
二人に降り注ぎます。

けれども二人は諦めません。

けれど、人類はどんどんと追い詰められていきます。

そして追い詰められた人類は、人間種という新たな進化と騎士を生
み出します。

戦いは人類種と騎士、それに対する亜麗百種という新たな戦いへと
発展していきました。

戦いは一方的な展開から、血で血を洗う更に凄惨なものへと進んで
行きました。

それでも二人は諦めません。

そして、戦いが一方的なものではなくると共に、二人の力もあつて戦争は膠着し始めました。

その頃には二人の周りにはその考えに賛同する仲間と呼べるものはかなり増えてきました。

そしてそれが第三勢力とも呼べる規模になるほど大きくなった時、戦線は完全に膠着しました。

膠着状態に陥れば、厭戦気分は高まり二人に賛同する人は更に多くなります。

もしかしたら、このまま戦いは終わるのではないか、

多くの人が薄々とそんな思いを抱いたとき、それは宙から現れました。

アリストテレス

突如飛来した8体の怪物。

その無差別攻撃によって、全ての陣営は壊滅的な被害を受けた。

そうして大戦は誰も望まぬ形で終結を迎え、新しい戦いへと移る。

この星の全ての生命体とアリストテレスとの戦いへと。

それから戦いの連続でした。

二人は今までの戦いで得た仲間と、それから戦いで得た仲間と共

に絶望的な戦場を駆け抜けました。

多くの犠牲を払い、アリストテレスを打倒し、

停戦しても未だいがみ合う人間種と亜麗百種との争いを収め。

また一つ、アリストテレスを斬り伏せ、

人間種と亜麗百種の争いを収め。

アリストテレスを撃退し、

人間種と亜麗百種の争いを収め。

また一つ、アリストテレスを撃滅し。

そして、

最後に一人残った純粋な人間である一人の青年、

彼の犠牲によって、

彼の最期の一撃で、

十字架のアリストテレスは焼け落ちて、

地球上生命体とアリストテレス、その最後の戦いの火蓋は切って落とされました。

決戦の地は、

無限に続く、剣の荒野

ぶろろーぐ 4 (後書き)

へんじがないただのほねのようだ

ぶろろーぐ 5

固有結界・無限の剣製

二人とその仲間たちが決戦の地として選んだのは、青年の世界、剣の荒野でした。

残り全てのアリストテレスと彼等の仲間達、この戦いで全て終わらせる。

たとえ自分達が全滅しようとも、一体たりとも逃がしはしない。

そして、以前倒したアリストテレスのような周りを巻き込んだ消滅もさせない。

そのための、この地。

故に青年、エミヤシロウは己が限界を超えた範囲に結界を展開し、戦いが終わるまで生き延びてここを維持しなければなりません。

仲間達が彼に望んだのはその一点、

何をおいても、誰が斃れようとも生き残り、奴らを逃がさないため、他の人々を巻き込まないために　　。

故にエミヤシロウは齒を食いしばります。

彼は最初から限界です。

だって、アリストテレスの巨体一体を結界に飲み込むだけで彼の限界に近いのに。

いくらここに居る仲間達以外の全世界の総力をあげて

残り全てを可能な限り同じ場所に押し込めたといっても、それにし

たって広すぎました。

しかし、それがどうだというのでしょうか。

彼につなぐために会った事すらない大勢の誰かが命を削ってここまでもってきたのです。

彼を信じて今も仲間達と愛する少女が戦っているのです。

この程度の限界を超えられずして、何が『正義の味方』でしょう。

ビシリ

今まで彼の無謀に力を貸してきた鞘が軋みをあげます。

けれど彼は止まりません。

まだ決着は付いていないのですから。

目の前で一人、また一人仲間が斃れていきます。

ビシリ

止まらない頭痛、気が狂いそうな痛みを歯を食いしばって堪えます。

結界に巻き込んだ範囲に加えて、時間も彼の限界を超えていきます。

世界からの修正が彼の世界を押しつぶそうと軋みをあげます。

ミシリ

けれどそれがどうしたというのでしょうか。

目の前には一体一体が星そのものと言っていい力を持つ異形ども。

世界の前に膝を屈する程度で

きるはずもない。

目の前の存在を打倒することなどで

べちゃり

ぼとぼと

彼の周りは血塗れです。

彼が流した自分の血で。

だけどそれがどうしたというのでしょうか。

一人、また一人と消えていく仲間達を目に焼き付けながら青年は踏み止まります。

目の前で自分を護るために剣を振るう彼女の背中を見ながら歯を食いしばります。

目が霞み、意識が混濁しそうになりながらも、彼は決して折れませぬ。

ぎしり

鞘が軋みをあげる。

みしり

頭の中が歪む。

べちゃり

穴という穴から血が流れでる。

ぎりり

歯を食いしばる

歯を食いしばる

崩れそうになる脚に力を込める。

心が折れそうになっても、身体がまだやれると立ち上がる。

身体が折れても心がまだやれると奮い立つ。

心も身体も折れてしまっても

まだ何かが

何かがまだだと

そう叫ぶ。

ならばまだやれるはずだ。

難しい筈はない。

不可能な事でもない。

もとよりこの身は、ただそれだけに特化した魔術回路

！

そして、少女を除いた全ての仲間が斃れ付し、目の前には1体のアリストテレスが残りました。

倒されたほかの全てのアリストテレスを捕食して、更に信じられない大きさになった蜘蛛が一匹。

彼の中の鞘はいつの間にか砕け散り、

彼を護っていた少女の剣もそれに続くように折れて消えてしまいました。

それでも二人の目は死んでいません。

決して諦めるものかと眼前の敵を見据えます。

最早お互いに支えあって立っているのがやつとでも、目の前の敵を睨み付けます。

蜘蛛の脚が振り上げられます。

もう二人には、それを避ける力も残ってはいません。

けれど二人は諦めません。

最後まで、決して諦めるものかと、目を逸らさずに敵を見ます。

蜘蛛の脚が振り下ろされます。

どんなに諦めなくても、どうしようもないものはどうしようもありません。

銃声が響きました。

振り下ろされる筈だった蜘蛛の脚が弾け飛びます。

何かわからない悲鳴のような轟音を上げて蜘蛛が仰け反ります。

二人は驚いて音がした背後を見て、更に驚きます。

そこには、黒い銃を持った青年が立っていました。

ここには居る筈のない青年が立っていました。

居る筈がないのです。

だって、彼はこの最期の戦いに参加していないのですから。

彼は、その前の戦いで死んだのですから。

二人の驚きは当然だよな、とその最後の人類だった青年は笑って

でも、俺だけじゃないよ。

そう言いました。

その瞬間、二人の横を巨大な斬撃が走り抜け、蜘蛛の脚を叩き斬りました。

その瞬間、巨大な閃光が蜘蛛を数キロに渡って吹き飛ばしました。

そこには騎士がいました。

文字通り巨大な、巨大すぎる剣を振りぬいた騎士が。

以前の戦いで、一体のアリストテレスと相打った騎士がいました。

そこには魔女がいました。

以前に彼が助け、その後は彼に付いて来た姉妹の末妹の魔女がいました。

つい先ほど、彼の前で一体のアリストテレスを道連れに息絶えた魔女がいました。

驚きで声も出ない二人に、騎士の方はつまらなそうに、魔女の方は楽しそうにこう言います。

周りを見る。

自分達だけじゃない。

その言葉と同時に、二人のまわりに蜃気楼のような影が立ち現れました。

ゆらり、ゆらりとどんどんと数を増やしながら、次第に色と厚みを帯びていきます。

そして続々と実体化するそれは、二人と共に戦いそして斃れていた仲間達でした。

それは如何なる奇跡だったのでしょうか。

魔女は可笑しくて仕方がないといった風に語ります。

限界を超えた範囲で時間で張り続けた彼のこの世界は、ついに世界に修正を諦め完全に拒絶されるという結果を齎しました。

それだけならば、ただその空間ごと世界から切り離されて消えるだけだったこの場所ですが二つの物によってそれは起こりませんでした。

二人の目の前で砕けて消えたかに見えた剣と鞘、それは消えたのではなくこの世界に同化したのでした。

《「アウアロン全て遠き理想郷」

「この世界における最強の守り」と形容され、最早防御というよりは遮断の領域。

あらゆる物理干涉・魔術は勿論の事、五つの魔法ですら例外ではなく、

並行世界からのトランスライナー、多次元からの交信をもシャットアウトし、時間からも遮断する。》

《「約束された勝利の剣」
エクスカリバー

人々の「こうであって欲しい」という想念が星の内部で結晶・精製された神造兵装であり、

最強の幻想。
ラスト・ファンタズム

ひたすらに尊く、神話にも人ならざる業にもよらず、ただ思いだけで鍛え上げられた結晶。》

これが同化することによって、世界から切り離されたこの剣の荒野は一人の青年の心象風景ではなく一つの完全な『世界』となったのです。

いつの間にか景色は荒野ではなく、二人が別れそして再会した黄金の大地。

そう、これはエミヤシロウとセイバーの世界。

そして、ここにいる全てのものが同じく見た世界。

二人の時間に比べればほんの一時、だが共に歩んで、共に戦って、同じ空を見て、同じものを感じたのです。

決して届かぬ、けれど美しいその幻想を、彼らは確かに見たのでした。

仲間達の前に、剣が現れます。

共に戦う中で、彼らが使用した贗作たち。

皆が一様にその剣を、槍を、それぞれの武器を引き抜きます。

今までは、ただ借り受けて使用するだけだった贗作たちはこの瞬間

彼らという持ち手を得て真作と成る。

ここに、彼らと『エミヤシロウ』という『世界』との『契約』は完了しました。

そこまで語って魔女は、

まあ、こうなったら目の前のアレは元の世界に戻れないし、目的は達成されたも同然なのだけれど。

そう言って目の前で破壊された脚を再生しこちらに向かってくる蜘蛛を見た後周りの皆を見渡しました。

そうすると皆は一樣ににやりと皮肉げな笑いを浮べて魔女の言葉を引き継ぎます。

ああ、別に放って置いても、このままやられてしまってもかまわないのだけれど

別に、アレを斃してしまってもかまわないんだろう？

青年は大声を出して笑い出しました。

こんなに声を出して笑ったのはいつ以来でしょう。

同時に涙が溢れてきます。

隣で支えあう少女も崩れるように微笑んで彼を見つめています。

その瞳にはやはり涙が溢れていました。

青年は隣にいる少女と再会した時と同じぐらいの思いが胸に溢れているのを感じました。

嬉しかった。

あれ以上の喜びなどある筈もないと思っていたのに、またこんなことがおこるなんて。

青年は身体に力が漲ってくるのがわかります。

皆はそんな二人をにやにや笑いながら見つめながら、

早くしないと置いていくぞ、さっさと付いて来いよ。

と言って眼前の敵に向かって歩き出しました。

青年は、はっ、と一息吐いて少女と共に駆け出します。

そして同時に嬉しそうに、でもどこか皮肉げに叫びます。

テメエらの方こそ

付いて来やがれ、と。

ぶろろーぐ 5 (後書き)

・ ・ ・ ぶろろーぐだけでどれだけひっぱるんでしょうね

ぶろろーぐ 6

こうして、戦いは終わりました。

青年は微笑を浮かべて周りにいる仲間達を見渡します。

長い長い、本当に気が遠くなるほど長い時間得ることがなかった、
本当の意味で共に歩む仲間達を。

そして、彼の隣に寄り添うように立つ愛しい少女。

ああ、ほんとうに長生きっしてしてみるもんだなあと噛み締めるように
呟いて、隣にいる少女に微笑みます。

そうですねと少女も同じように微笑んで、二人で静かに見つめ合います。

ごほん、と咳払いが聞こえました。

二人が振り向くとそこには魔女が面白くないような面白いような微妙な面持ちで立っています。

まったく、二人の世界に入るのは良いけれど既にここは『皆』の世界よ、と魔女はやれやれと呟きます。

周りの皆はにやにやしながら見えています。

二人はばつが悪くなってむうとかあうとか唸りながら視線を泳がせます。

そんな二人にかまわずに、魔女はこう切り出します。

なんかその甲斐性なしのびっくりぎみつく（固有結界+2）のせいで世界から弾き出されたけれどどうするの？と。

青年は思わず、なんだよそのびっくりぎみつくって、

というか+2って一つはセイバーの剣だから俺のじゃないぞ、とか言っでしまいました。

全員からつつこむところはそこじゃねえだろ、と言われ隣の少女も相変わらずですねシロウ、と呆れ気味です。

魔女はため息をついて素敵なつつこみありがとう、このへっぽことかいい笑顔で言ってくれます。

青年は毎度のようにむう、と唸って黙ってしまいます。

周りの皆はやれやれと苦笑して、魔女は再びため息をつきます。

隣の少女にまで一緒にため息をつくので更に居心地が悪くなります。

で、世界から弾き出されたって事だけどどういことなんだ。

青年はこのままではまずいと思ったので話題を変えようとそう言います。

それを聞いて魔女は更にため息をついて、なんでちゃんと話を聞いているのに最初にそっちがでないのよ、と溢します。

続いて、ほんとエミヤクンはある意味大物よね〜と諦めたように呟きます。

そして、あゝやめやめ馬鹿らしくなってきたと手をひらひらと振って投げやりに言います。

まったく、真面目に説明してやろうとした私が馬鹿だったわ。

アンタみたいなぼやんとしたのにはさっさと現状に叩き込んだ方がわかりやすいわね。

今からどっかに向かって『堕ちる』から、その子だけは離すんじゃないわよ。

私達はもうアンタという『世界』に居るから離れることなんてないけれど、その子だけは別。

離れたら、再会は苦勞するわよ。

そんなことを言った瞬間、青年の周りは真っ暗になりました。

足元がいきなりなくなって真っ逆さま、いえ周りが真っ暗なんで逆

さなのかどうかわかりません。

わけがわかりません。

でも、青年は隣にいた少女だけは状況を認識するよりも早く抱き寄せていました。

魔女にあんなことを言われなくてもきつとそうしていました。

そして二人は抱き合ったまま何処かへ堕ちて行きました。

ぶろろーぐ 6（後書き）

私の心^{ハート}に刺し穿つ死棘^{ゲイ・ボルク}の槍。

意味のわからない読み辛い改行と突っ込みどころ満載の設定を自分で自覚しているので指摘が胸に突き刺さりますわ。

でも、こんな駄文にコメント頂けるっていうのは嬉しい限り、改行はこの引つ張りたくったプロローグまでですのでご容赦を。

・・・うん、きっと改行の癖は治せるよね。

トンでも設定は・・・設定は・・・あゝあゝ赦して、わかっているの、でもでも・・・。

よよよ、と泣き崩れてみる真似をしてみつつ、あとがきで逃げ道作るのに忙しいなあ見苦しいとか醒めた気分のワタクシめ。

言い訳しつつも頑張ります。

第一話（前書き）

むう、これ第一話って言っているのか今更ながら微妙な気分です。
ぶろろーぐとも線引きがはつきりしていない気がひしひしと・・・

第一話

第1話

こうして俺とセイバーは暗闇の中を堕ちていく。
いや、上下の感覚がないから堕ちるっていうより流れるって言った方がいいのか。

普通ならこんなことになれば不安なんだろうけど、そうだったものは全く沸いてこなかった。

腕の中にセイバーの温もりを感じる。

俺の『世界』の中に仲間達の存在を感じる。

これで不安を感じるなんてこと、あるはずがない。

ああ、ほんとうに俺には過ぎたものばかりだ。

なんて事を考えながら流れていく。

いつの間にか真っ暗闇で何も無かった空間に沢山の光が見える。

暗闇に浮ぶ淡い光、大小様々な光の合間を流れていく。

光一つ一つとすれ違ったびに声が聞こえた。

それは何かを求め呼ぶ声だったり

それは決意を叫ぶ声だったり

それは何かを呪う声だったり

それは救いを求める声だったり

それらの声に思わず手を伸ばしてしまいそうになる。

けれど、何かが違つとまだだと言っている。

今はまだ先に行くところがあるとなんとなく、ほんとうになんとかそう思う。

そうしていくつもの光とすれ違っていると、頭上にまた一つ光が見えた。

ああ、これか。

なんとなくだがそんな気がする。

俺達はその光に向かって堕ちていく。

そして、光に触れたその瞬間

なんかありえないぐらい強引に、何かに巻き込まれるかのように引きずり込まれた。

「うつ、うおおおおおおお？！」

え、何、え、え？とか考えがまとまらないままにずずずとかびちんばちんとか擬音がしそうな感じで引きずられていく。

釣り上げられる魚というのはこんな感じなのだろうか、とかどうでもいいことが頭をよぎる。

瞬間、『フィッシュ』とかいう言葉と赤い布を幻視した。

そしてすっぱ抜けるような感覚と共に俺達は何処かに放り出された。

「なっ
」

と思ったら、空の上に居た。
遙か下には街と思しき明かりが見える。

「うっ
」

当然それ以外は何もないわけで

「うおおおおおおおい!？」

落下する。

慌ててセイバーを抱き寄せる。

ってか、さっきから何も言わないなと思ったら寝てたのねセイバー。
ううん、何事ですかシロウとか俺の腕の中でもぞりと動く。

ああ、可愛いなあちくしょう

何でこんな状況で寝てられるのかいやひょっとしてひょっとしなく
ても俺の腕の中だから安心しきってるとかああなんてことだ可愛い
よセイバー！

はっ

俺ってこんなキャラだったか、って違う違うそうじゃなくて、そん

な馬鹿なことを考えている状況じゃないだろう。

ぶんぶん頭を振って邪念を追い払う。

でもセイバーを抱きしめる腕には力を込める。

もう地面は目の前だ。

山の頂にあるあれは寺だろうか、その門らしき物をぶち抜いて俺達は地面に激突した。

「いたたた・・・」

無事着地には成功？したようだ。

セイバーを傷つけないようにそちらにはかり気を使ったから俺自身の護りはおざなりだったけど、まあこの程度でどうにかなるほど俺はやわじゃあない。

もぞり、と腕の中の彼女が動く。

うん、当然と言えば当然だがセイバーには傷一つない。

「ううん、シロウ・・・もう食べれません。」

・・・いい加減起きようよセイバー、そしてこれ以上は色々な幻想が壊れますから程々にして欲しい。
でも、可愛いなあ。

はっ

いかんいかん、和んでる場合じゃなかった。

壊してしまった門を修理しないと　　ってそれも違うだろ、現状を把握することだ。

その時、視線を感じた。

と言うか、さつきからずつと感じていたが別の^{セイバー}ことで頭が一杯だったから意識を向けてなかった。

と言うわけで改めてそこにいる誰かに顔を向ける。

紫の魔女が居ました。

うん、逃げ出したい。

俺は昔からこの手の魔女っぽいのは色々な意味で相性が悪い。

俺の中の『世界』でそれはどういう意味かしら？とか聞こえたけど聞こえない。

お前もその原因の一つだろうがとか言いたいけど言わない。

とにかくエミヤシロウにとって魔女というのは天敵だ。

敵だろうが味方だろうが関わりとロクな事がないのだ。

ああ、早く逃げないとまたぞろ酷い目に会ってしまう。

しかし、魔女からは逃げられない。

いや、逃げれるのだけれど現状を把握するためにはこの目の前の存在以外に説明を求めることができない。

どうやらこの手の生き物と係わり合いにならざる終えない運命にあるのが俺らしい。

「貴方　　何者」

まあ、いきなり上空から落下してきて門をぶち抜けは何者だとか言いたくなるよなあ。

「答えなさい、貴方いえ貴方達は一体何？」

しかし、目の前であからさまに警戒してますって空気を纏ってるこの魔女、何処かで見たことがある気がするんだが・・・うーん。

「ちょっと貴方、聞いているの?！」

まずったな、警戒しているところに更に神経を逆なでしてしまったみたいだ。

「あ、ああ悪い、ちょっと考え事をしてた。

なんか会った事があるような気がして・・・魔女には縁があるものでひよつとしたらと」

って、言い訳したら更に不機嫌になってしまわれましたよ。

フードで口元しか見えないけどわかるぞ、あれは間違いなく怒っている。

「ふうん、人の呼び掛けを無視して挙句魔女呼ばわりとはいいい度胸ね」

やばい、俺の経験がそのままではまずいと言っている。

この手の人種を怒らせるという経験において間違いなくエミヤシロウは他の上に行く。

でもその経験は相手を怒らせないという方向では全く役立たずなのであった、まる。

くそう、地雷を踏んでから鳴る警報機なんて何の意味があるんだよ俺の馬鹿

「そこまでにして頂けませんかメイガス」

まさに一触即発、今にも何かしらの術式をぶっ放さんばかりの怒気を放っている魔女に対して冷や汗だらだら俺に齎される救いの言葉。

セイバー、いいタイミングで起きてくれた。

でも、最初から起きていてくれたら俺が冷や汗かくこともなかったのではないだろうか。

「全く、私が入るまでもないと思って様子を見ていれば・・・シロウ、本当に貴方という人は何故もっとマシなことが言えないのですか」

むう、どうやらある程度のところから目は覚めていたらしい。

セイバーは俺の腕の中から出て立ち上がり、魔女と向かい合った。あれ？さっきまで今にもこっちを吹き飛ばさんばかりの威圧を放ってたのになんかそれが霧散しているぞあの魔女。

「彼はこういう人ですので先ほどの無礼は許して欲しい。
尤も、イレギュラーな召喚をされて何者かと問われても困ると言
えば困るのですが」

「 貴方はちゃんと話が通じそうね。
それに、召喚された、と言うことはやっぱり貴方達は」

「ええ、貴方のサーヴァントなのでしょう・・・恐らくは」

「恐らく？ああ、確かに貴方達とはパスが繋がっていないわ。
参ったわね・・・問題が出ないように万全を図ったつもりだった
けれどやはりサーヴァントがサーヴァントを呼び出すというのは一
筋縄ではいかなかったようね」

むう、俺を置いて話が進んでいく。
しかし、ここで何か言おうものならまた酷い目に会うのは間違いな
いから黙ってしよう。
うーん、でもサーヴァント・・・聞き覚えがあるんだが、思い出せ
ない。

「ふむ、やはり貴方はサーヴァントですか、しかし『キャスター』
ここは話をするには不向きかと思うのですが」

「あら？何故私が『キャスター』だと思うのかしら」

「はあ、その出で立ちとその魔力で『キャスター』でないならなんだというのですか？ここをこのままにしておくのも問題でしょうし、早く門を直して落ち着ける場所に案内して欲しいものです」

「・・・そうね、我ながら詰まらない事を言っただわね、忘れて頂戴」

どうやら一段落ついた様なので立ち上がる。
というか、何故正座していたんだろうか俺は。

「
」

俺には聞き取れない詠唱が聞こえた。

誰かさんが似たようなことをするんで詠唱だとわかったがやっぱすごいな、俺たちがぶち破った門が時間を巻き戻すように元通りだ。

「それじゃあ場所を移しましょうか、付いて来なさい。

それとっておくけれど、ここは私の工房だからくれぐれもおかしな行動はしないようにね」

「言われるまでもありません、シロウも ああ、わかってないかもしれないので言っておきます。

くれぐれもおかしなことはしないように、まあ注意したところでや
ってしまふ時はやってしまふのがシロウですが」

ちよつと待つて欲しい。

俺はそんなに信用がないのか？

「はい、全く」

言葉にしていけないのに考えを読まれた上に即答だった。
くそう、悲しくなんてないぞ。

そんな俺たちの様子を魔女は呆れたように見ている、って魔女はま
ずいんだったなえつと・・・

「
キャスター」

む、また顔に出ていたのか、魔・・・キャスターにそう言われてし
まった。

「はあ、大体貴方達がどういう人間かはわかったわ」

キャスターはやれやれと言った感じでそんなことを言って、続けて
俺を見据えて、

「先程私を『魔女』と呼んだのは許しましょう。他意がないないというのは判ったわ。でも

次はないわよ、坊や」

さて、場所は移ってお寺

柳洞寺というらしい、の境内に案内さ

れたわけだが・・・

何故俺は正座させられているのだろうか。

おかしいな、言われたとおり変なことしないように気をつけて、境内のものにも殆ど手を触れていないのに。
やっぱりあれだろうか、セイバーとキャスターの会話の途中でうまく発言してしまったせいだろうか。

「えっと、聖杯戦争？だっけ、なんか聞き覚えあるんだけど思い出せない」

なんて言ったら二人から珍獣を見るような目で見られた後で現状をどう認識してるか聞かれたわけだが、

「えっと、いきなり空からフリーフォールかまして門をぶち破って落ちたらキャスターが居て、なんでも俺たちがサーヴァント？とかいうのだって話まではわかった。」

なんて言ったらこの様ですよ。
一体、何が悪かったのだろうか。

「全てです」

「全てよ、このぼんこつ」

ぐぐ、ぼんこつつてなんなくそう。

二人はため息をついてぶつぶつなんか言ってるし。

「はあ、イレギュラーな召喚で2体、パスなし、令呪はあるけれど効力がどれほどか疑問、「なあ、ぼんこつつてのは流石に」黙りなさいぼんこつ、尚且つ片方は『知識』が与えられていないから聖杯戦争が何かすらわかっていない。どうしろっていうのかしらこのぼんこつ」

あれ、なんだか、周りが曇ってきたな、おかしいなあ。

「で、貴方は現状の把握は出来ているのよね」

「概ね、ただし不備があるかもしれませんが貴方の口からも改めて説明を頂けると助かる。その、なんといいですか、そこで頂垂れているシロウに現状を認識してもらう事も含めて」

二人で俺を見てまたため息をつく。

あーあーあーもうすきにしてくださいぼんこつですよおれは。

「拗ねないでくださいシロウ、今からキャスターが説明をしてくれますからちゃんと聞いてください」

「あのね、私まだ了解してないのだけれど・・・はあ、まあいいわ」

もうどうでもいいや、みたいな投げやりな感じでキャスターは手をひらひらさせる。

くそう、何故俺が関わる魔女はどいつもこいつも俺の扱いがこうも適当「シロウですからね」なんだ。

・・・泣いてなんかいないぞ。

こうしてキャスターから聖杯戦争のあれこれを説明されたわけだが、ここにきてようやく漠然とだが思い出してきた。

「なあ、セイバー・・・ひょっとしてこれってさ」

「ようやく気が付きましたかシロウ、そうです。これは、『私と貴方が初めて出会った』聖杯戦争です」

そうか、しかしこんな大切なこと忘れているなんてほんとどうかしてるよな。

「仕方ありませんよシロウ、あれから本当に長い時間が経ったのですから・・・。私も聖杯からの『知識』がなかったら思い出すのは手間がかかったと思います。それに思い出したといっても殆ど記憶には残っていません」

そうだよな、どのくらいかさっぱりだけど兎に角遙か昔の事だからなあ、何百年？何千年？前ってんだからほんと長生きしたものだ。

「ちょっと待ちなさい貴方達」

そうして二人でなんかしみじみと感慨深げに浸っていたらキャスターが慌てて話し掛けてきた。

「今のはどういうことかしら？」「私と貴方が初めてであった」聖杯戦争？貴方達まさか・・・」

凄いな、今のだけですぐわかるものなのか、傍から聞いてたら意味不明もいいところだと思ふのに。

「そうですキャスター、私達はこの聖杯戦争の参加者『だった』者所謂未来の英霊・・・いえ、英霊ですらありません。そうですね、貴女の説明を受けたあとは私達の説明をするのが筋でしょう。シロウ、構いませんね？」

セイバーが真っ直ぐこちらを向いて聞いてくる。

俺は頷いて、そして二人でキャスターの方へ向き直った。

さて、信じてもらえるかどうかはわからないけれど、『未来』の話を始めますか。

第一話（後書き）

どうしてこうなった。

「・フィツシュ」云々のくだり辺りまで書いてる時にはあかいあくまに召喚されてフリーフォール、何故か目の前にアーチャーまでいてアーチャー呆然、そして墜落っていうつもりだったのに何故か書き始めたら柳洞寺に落ちて目の前キヤスターですよ。馬鹿なの？分割思考？分割思考なの？分裂症なの？支離滅裂なの？死ぬの？

まあ、書いてるうちにこっちのが楽しそうなのでこっちで行きます。ウェーイ、ほんと見切り発車ですよ大概にしろよダメエとか罵倒されますか？やめて、いじめないで、か弱い小動物なの（よよよ）

・・きもっ

第二話

「信じられない」

随分長い話になってしまったが、聞き終えたキャスターの言葉は予想通りと言え予想通りだった。
まあ当然の反応だよな、全てを馬鹿正直に話したわけではないがそれにしたって荒唐無稽もいいところだ。

「やっぱり無茶苦茶だよなあ、実際こうして説明してて俺自身どうかとおもうよ」

「そうですね、私もそう思います」

むしろすんなり信じる方がどうかしてるよな、と二人で顔を見合わせて苦笑する。
しかし、

「ああ、そうじゃないのよ」

そんな俺たちを見てキャスターはそんなことを言った。

「この時代から星の終焉まで、いえ終焉を超えて生き残った存在？ 未来、いえ平行世界の未来かしら、の存在？ 拳句その世界から持て余されて放逐？ 何がどうなったらそういう結果になるか意味がわからないわねこの化け物」

続けざまに喋っているうちに何か色々和我慢ならないことがあるのかほとんど語気が荒くなって勢いがついていく。
たとえるならなんか、こう、がーっといった感じ。

「で、そんな英霊ですらない、というか英霊どころの話じゃないわね・・・ああ、もう考えが纏まらないわ。そんな生きたままの存在を私は召喚したと」

「ええ、そういうことになるかと・・・信じられないのもわかりますが」

自分達以外の人間の口から聞くとつくづくありえない話だと実感がわくなあ・・・自分達のことなのに。

「だから、そうじゃないのよ」

だがキャスターはそんな俺たちにそうではないと重ねて言う。

「貴方達は気が付いてないようだけれど、もうね、在り得ないのよ色々と・・・魔力とかそれ以前の存在の規模というか格というのが貴方達は異質すぎる。会った時に何者かと問うたのはね、本当に何者かわからなかったからなのよ。サーヴァントの召喚を行って現れたんだからサーヴァント以外に在り得ないにもかかわらず、この私にそんな間抜けなことを言わせるほどに貴方達は異常だったのよ」

じつ、とこちらを睨み付けるように話し続ける。

「まあ、それで警戒して話しかけながら催眠や洗脳、それに解析などを仕掛けてみたけれど全て無効化、拳句に魔女呼ばわり、たいした狸だと思ったら素でそんなだって言うんですもの 人を何処まで馬鹿にしているのかしら」

ぐ、全然気が付かなかった。

いや、ひよつとしたら気が付く前に無効化されていたのかも・・・俺の中に居る誰かさんならばそういうことも出来そうだし。

むう、余計な借りを作ってしまったかもしれないな、あとでとんでもない見返りを要求されそうだ。

「で、そんなありえない存在が在り得ないことを言っても私としては『そういうもののなか』ぐらいにしか考えられないの。そもそも、

未来だとか並行世界と言ったけれど本当はよく似てるけれど完全な異世界だか異次元だかからやってきたんじゃないの貴方達、そっちの方がよほど納得できるわ。・・・はあ、こんな考えがこの私から出るなんてほんとうに在り得ない」

額に手を当てて嘆息するキャスター、その様子はもう勘弁して欲しいといわんばかりで今にも頭を抱えて唸りだしそうだし、しかし、ということは

「キャスター、それでは私たちの話を信じるといいますか」

俺と同じ事を考えたのだろう、セイバーが信じられないといった様子でそう問いかける。

キャスターは額に当てていた手を下ろしもう一度大きく息を吐くと俺たちを方を向いて

「ええ、信じるわ ええ、信じますとも」

そんな、嬉しいことを言ってくれた。

俺達は予想外のことにきょとんとしてしまっ、そのあとお互いを見て思わず微笑んでしまった。

思わず魔女でもいいひとはいるもんだなあ、とか思ってしまった。

俺の中でエミヤクン後で覚えておきなさいよとか聞こえたが今は嬉しいことがあったので気にしない。

「感謝しますキャスター、まさか信じてもらえるとは思わなかった。そして結果として貴女という人の器量を小さく見てしまった私たちを許して欲しい」

「ああ、そうだな・・・ありがとう、キャスター」

「ふん 別に感謝される謂われはないわ。貴方達ほどではないにしろ色々あって嘘をついている人間というものには鋭いつもりよ、その私が貴方達は嘘を言っていないと判断したの。私は私の判断を信じただけであって貴方達を信じたわけではないのですから」

俺たちの感謝の言葉に鼻を鳴らしてそっぽを向くキャスター。

あれはひょっとしなくても照れてるのだろうか、思わず顔が緩むのがわかる。

隣でふふつとセイバーの苦笑する声が聞こえる。

ああ、なんだか穏やかな雰囲気だ。

だからだろう

「あ、そういえば」

思わず気が緩んで

「だったらキャスターは何が『信じられない』って言ったんだ？」

余計なことを言ってしまったのは。

「　　。」

瞬間、空気が変わった。

またか、遅すぎる警報が頭の中に鳴り響く。

またですかシロウ、みたいな顔をして呆れているんだろうとセイバーの方を見る。

・・・どうやら今回はセイバーも予想外らしい、意外そうな顔をしている。

もしかしたら俺が尋ねなくても同じ事をセイバーも尋ねたのかもしれない。

「そうね、そういう話だったわね。話が逸れて和やかな雰囲気のまま終わってしまうところだったわ」

困惑する俺たちを前にゆっくりと語りだすキャスター。

「ええ、確かに信じがたい内容の話でした。けれど、貴方達が嘘を言っていないと判ったから信じられないけれど信じることに・・・いえ、信じざるおえなかった。ここまででは話したわね」

その口調は穏やかで、しかしじりじりと後ろに下がりがたくなる威圧感のようなものが滲み出ている。

「それで信じることにして、信じられないことに気が付いたの」

馬鹿よね、前半ぐらいからすぐに気が付きそうなもののに、なんて自嘲気味に笑う口元がぎこちなく引き攣っている。
まずい、非常によろしくない、しかし打開策は浮ばない。

「そう、長くて、ある意味壮大なお話だったわ。荒唐無稽な御伽噺みたいな、そう

恐ろしくスケールの大きな惚気話を聞かされていることに、
終わってから気が付いたの」

絶句した。

「「
なあっ?!」」

二人して思わず叫ぶ、ちょっと待って欲しい何処をどう聞いたらそうなってしまうのか。

「あら、だってそうじゃない。自分に愛を語って消えていった愛しい人の事を思い続けて旅をして、そして遂にはその人のところに辿り着き、その温もりを腕に抱いて再び歩き出す。オルペウスも裸足で逃げ出すわ」

そういえばこの国の神話にも似た話があったわね、イザナギとイザナミだったかしら?とか呟くキャスターの周りに凄い密度の魔力が集まっているのがわかる。

洒落になってないぞこれ、冷や汗を流しながらも動けない。

「ねえ、信じられないでしょう、この、私が、最後まで大真面目に惚気話を聞かされていたなんて 一体何の冗談なのかしら?」

セイバーは既に退避を完了したようで、離れたところで何をやっているのですかシロウ！とか言っているが俺は動けない。そう、『動けない』のだ・・・くそう、何が後で覚えてなさいよだ全然後じゃないじゃないか

「そして目の前でちらちらちらと目配せして通じ合っちゃって・・・ああ、もうやってらんないわ」

「なんでさ」

瞬間、俺は閃光と共に吹き飛んだのでした。

「・・・理不尽だ。」

前門の魔女後門の魔女、前言撤回だ、やっぱり俺と魔女とは須らく相性が悪い。

で、目が醒めたら何故か門番をやることになっていた。

第二話（後書き）

・・・キャスターこんなキャラだったかなあ・・・いや違いますよね、うゝん。

ワタクシの書く魔女は全部遠坂嬢っぽくなる呪いにでもかかっているのでしょうか？

第三話

あの晩、キャスターに吹き飛ばされて綺麗に伸びている俺を放置してセイバーとキャスターで今後についての話し合いがもたれたらしい。

三食昼寝つきという好条件を獲得しましたシロウ、とか胸を張るセイバーは可愛かったが何か違うと思うんだ。

そう、セイバーは言葉どおりの三食昼寝つきかもしれないが、俺の場合は

夜通し起きて門を護らなくてはいけないから昼に寝ざるおえない

って意味なんだから・・・。

セイバーは夜はキャスターの傍につくという布陣だ。

昼間は基本自由にしていい、というか柳洞寺からは離れておいた方がいいということだった。

確かに昼間に仕掛けてくる奴は基本いないだろうし、霊体化できない俺達がずっとあそこに居ると言うのもおかしいから当然か。

しかし、おかしいと言えば今の状況もおかしなものだ。

聖杯戦争にサーヴァントとして参加することになるとは、しかも俺達にとっては過去の、自身が参加した聖杯戦争に、しかも当時敵と

して見えたキャスターのサーヴァントとして、だもんな。

もう本当に薄っすらと極々わずかにしか覚えていないが、俺とキャスターは確かに敵として見えた。

何が理由だったかは知らないが、確かにその時の俺はキャスターを看過し得ない敵として見ていたのはなんとなく覚えている。

本来なら俺がこの立場にいるのはおかしいのかもしれないけれど・
・あの願いを聞いたらなあ。

「さてキャスター、シロウも起きたことですし本題に入りましょう。」

あの晩、目を覚ました俺に雇用条件？を伝えたセイバーはキャスターにそう言った。

本題？と首を傾げる俺にセイバーは先ほどの条件はあくまでキャスターに従った場合の条件であってそれを承諾するかどうかは俺が目覚めますまで保留、ということだったらしい。

しかし、本題とは何だろうか、大変遺憾だが既に俺が門番としてこき使われる事は決定しているらしいし、きっと俺が何を言ったところで待遇は改善されない気がするのだが。

「シロウ、そうではありません。私達はキャスターに肝心なことを聞いていない」

む、肝心なこと、報酬とかだろうか・・・ん、報酬といえば、成る程。

「聖杯に望む願い、か」

確かに肝心なことを聞いていなかった。

聖杯にキャスターが望む願い、それによつては俺達は彼女に組することは出来ない。

「そうです、私たちは聖杯に懸ける願いなどありません。そのことは既に私からキャスターには説明し、理解を得られたと思っています。ですから」

次はキャスターの願いを聞くことになる、と。

俺達の視線を受けたキャスターはとても静かにゆつくりと口を開いた。

「そうね、あまり面白い話でもないのだけれど、話を聞かされるばかりというのもなんですから話してあげる。二度と同じ話をするつもりはないわ、しっかり聞きなさい」

まずはキャスターの生前の話を少し、残りはその後召喚されて現在に至るまでの話だった。

ギリシャ神話における裏切りの魔女メディア、国を裏切り、家族を裏切り、魔女と蔑まれてまで求めたただ一つの愛に裏切られた女の話。

そして、サーヴァントとして召喚されてもマスターを裏切り、消えかかっていた雨の日の話。

現世に召喚されてまで結局裏切りの末消えていくだけだった結末を覆した葛木宗一郎という男と出会った話を。

「成る程、では貴女の願いはそのソウイチロウと添い遂げることなのですね」

やっぱりそうなのか、周りから鈍感だとか愚鈍だとか言われる俺にもわかるくらいその人の話になると感情が籠ってたものな。

「……ええ、私はあの人と共に在りたい。さっきまでは漠然とあの人に聖杯を、とか考えていたけれど誰かさん達の惚気に毒されたのかしらね」

「素直に自分の気持ちに正直になった、とは言えないですね」

可笑しそうにセイバーが笑う。

「私としてはこれが精一杯ね、と言うよりもこんなことを人に話して聞かせる時点でほんとうにありえないわね。我ながらなんてささやで、つまらない願いなのかしら、と思うわ」

全くどうかしてるわね、なんて言いながら苦笑するキャスターの表情は穏やかだ。

やれやれ、人に散々惚気だのなんだの言っておきながらそっちも大概じゃないか。

「それで、そのソウイチロウにはもう想いを伝えたのですか？」

「なっ　　む、無理よ。まだあの人にはこんなこと言えないわ」

「む、そうなのですか・・・私としては早い方がいいと思うのですが」

なんだろう、男の俺が入って行き辛い会話になってきたな。
こうしては？いいえ無理よ、ではこういうのは？そんな駄目よ、み

たいな会話を繰り広げる二人を見ながら俺は所在無さ気に突っ立っていたのであった。

「しかし、結局想いを告げるのは聖杯を手に入れてそれを相手に渡す時とは・・・」

聖杯って渡せるような物として出てくるんだろうか？

それ以前に立場が逆だろうに、普通告白は男からだと思うんだけどなあプレゼント（指輪）も男からだと思うのだが。

というか聖杯を指輪代わりに見立てるのは酷く物騒というか無粋にも程があるなあ。

それ以前に、聖杯って確かろくでもないものだったような気がするんだが・・・まあ、キャスターならそこらへんは何とかできるだろう、神代の魔女なのだから。

いざとなったら俺とセイバーでなんとかすればいい。

・・・何とかできるように頑張ろう。

しかし指輪ねえ、街の人間から生命力ごっそり巻き上げて作る指輪とかぞつとしないものがあるな、俺が貰う立場なら是非遠慮したいところだ。

まあ、貰う立場じゃないけどその方法は遠慮してもらったのだが・

・流石に昏倒とかするまでやるのは見過ごせないからな、ちょっと疲れる程度にでもらっている。

能率が凄く下がると文句を言われたがここは譲れない。

ほんとうは何もしないに越したことはないのだが、魔力を貯蔵してサーヴァントという薪をくべなくても聖杯を満たすに足りる魔力を用意するという方針は悪くないからなあ。

こちらからは争わずに事が済むならそれに越したことはない。

まあ、その方法で何とかなるのは精々サーヴァント数体分らしいから結局何人かは倒さなくてはいけないらしいが、受肉だけなら聖杯を完全にする必要もないらしいし本当に数体でいいらしい。

嵩張るけど酷く燃費のいいサーヴァントで一席埋めたから聖杯にも多少ゆとりがあるのかなんとか・・・嵩張るってなんだよ、悪かったな霊体化できないぽんこつで。

思考が横に逸れたな、しかし出来れば皆が望みを叶えられれば最高なんだけどな・・・きつとロクでもない願いを持っている奴もいるだろうしそういうわけにはいかないか。

さて、色々と考え事をしているうちに大分時間がだったようだ。

草木も眠る丑三つ時、というやつか　やれやれ、門番を始めて数日しか経っていないってのに早速お客か。

「よう、いい夜だな」

目の前には青い甲冑に身を包んだ男、その腕には真紅の魔槍

ああ、俺はこの男を知っている。

その槍を知っている。

当然だ、この目の前の男は、その槍は エミヤシロウを唯一殺したことのあるモノだ。

「ああ、いい夜だな『ランサー』」

ああ、月の綺麗ないい夜だ。

こんなにつきがきれいだから

「 長い夜に、なりそうだ」

第三話（後書き）

うーん、アサシン（小次郎）が戦った順番ってランサー、バーサーカー、ライダー、それでセイバーの順でしたっけ？ ルートによってはギルガメッシュもか・・・バーサーカーやライダーの方がランサーより先だったりするのかしら、というかこの頃はまだランサーのマスターは・・・とか考え出すときりがないので深く考えずに行った方がいいのかしらとか考える今日この頃です。

第四話

踏み込む脚が石畳を跳ね上げる。

交わした剣戟によって巻き起こった風圧が木々を揺らす。

俺とランサーの打ち合いの余波によって柳洞寺の門は酷い有様だ。

「はあああっ！」

「・・・ちっ！」

既に20合、今の一撃でランサーが後ろに押し戻される。

俺の右手にはこの時代にまだ存在しない無名の『魔剣』、そして左手には中華剣。

だが次の瞬間には右腕の魔剣は変質し左手に持つ剣と同じような中華剣になり、白と黒の二刀一対となる。

「なんだその卦体な戦い方は、というかその宝具は何だ？さっきからころころころと形を変えやがってやり辛いつたらありゃしねえ」

ランサーが忌々しげに吐き捨てる。

そう、先ほどから俺はこの双剣の形を一合一合変化させ、剣に、刀に、槍に、盾に、と打ち合っている。

これがこの俺、エミヤシロウの新しい力、新しい戦い方だ。

ジン　宇宙塵、第五架空要素、真エーテルとも呼ばれる終焉を迎

えた星に溢れ出した未知の粒子。

人類にとっては死を齎す脅威であり、時に新たな変化を齎したあらゆる有害、計測不能のモノの総称。

それを乗り越えた新種である亜麗百種、人間種、騎士達の戦いはジンの凄まじいエネルギー変換効率によって今までにありえないような規模になった。

その中を戦い抜くために、守り抜くために俺が生み出した『魔剣・プレアドクス剣製』。

ジンの存在しないこの世界においては変換効率がかなり落ちるがそれでもこれだけ戦えれば十分だ。

能力は投影と基本変わらないが、変化させる時間がほんの刹那だが投影よりも早く、強度も投影より上だったりする。

そして、コイツは動力を周りから食らうていくので非常に燃費がいい。

ありとあらゆる物を変換源として食らいながら削り取っていく、魔力だろうがなんだろうがお構いなしだ。

尤も、足りない分は俺自身から魔力なりなんなりで出してやらなくてはならないので全く懐が痛まないというわけではないが……。

とにかくコイツは周り全てを食らう魔剣であり、当然その斬撃を受ける相手もただではすまない。

「えげつねえ宝具だなオイ、打ち合ってるだけで俺の魔力まで食っていくってーのは反則だろ。」

しかもそれだけじゃなく周りのモンすべて喰って力に変換してやがる……禍々しいにもほどがあんだろソレ」

「確かに、エグイよなあ……俺も正直どうかと思う。でも、中々に効果的だろう？そっちが喰われる魔力も馬鹿にならないだろ？打

ち合ってるだけで消耗するんだ、その身に受ければもっと効くぞ。
どうする？さつきから本気を出していないところから見ても精々様
子見って所だったんだろ、ここらで引いても」

「馬鹿いうな、折角楽しくなってきたのにこんなところで終わら
せるわけねえだろうが。それに・・・この身に受ければ、だと？戯
け、届かせると思ってたのか？」

そう言うと言サーはさっきのそれを上回る刺突を繰り出してくる。
俺はそれを双剣のまま受ける。

形状変化を行う刹那が惜しいと思わせるほどの刺突、俺は防ぐ事だ
けに、後ろに下がらないことだけに専念する。

ちい、魔剣が『食事』する範囲に入ってこないか・・・やっぱり一
筋縄ではいかないな。

魔力を稼ぐチャンスだと思ったんだが。

「エミヤシロウ、門番として貴方がするべきことは二つ。一つは当
然この門から境内に入ろうとする狼藉者を撃退すること。そして
もう一つはね、倒せなくても良いからサーヴァントとそのマスターに

「なるだけ魔力を使用させること」

門番初日、門前に立った俺にキャスターはそんなことを言った。
何故そんなことを、と聞いたら

「貴方達が街から絞る生命力を減らせなんていうからその埋め合わせをしておうと思っっているの」

なんて言っただ雑把に説明してくれたのだが、いや細かく説明されても俺にはわからないんだよ多分。

で、その説明によると門の周辺で戦闘をしてそこで消費されて霧散した魔力を吸収するとかいうことらしい。

つまり、戦闘で発生するエネルギーを収集するらしい。

火力とか風力とかその手の発電みたいな仕組みだなあ、とか言ったら数瞬の沈黙の後にそうね、と短く言われた。

あれはきつとまた俺が変なことを言うだろうと思って、でも的を得たから沈黙したに違いない。

そう思いたい。

とにかく、サーヴァント同士の戦いとなればかなりの魔力が収集できるだろうから励みなさい、などと嬉しくないことを言われて送り出されたのであった。

というわけで俺は自身の心情と実益もかねて相手が根負けするまで

防戦する方針にしたのであった。

しかし、肝が冷える。

首筋に冷やりとしたものが走る。

ちりちりと肌が焼け付く、空気がびりびりと震える。

数多の死線を越えてきたとはいえやはり心臓に悪い。

目の前を奔る赤い槍はエミヤシロウにとっては自身の『死』の象徴だ。

もう思い出せないほど昔、エミヤシロウの心臓を草でも刈り取るかのように抉った

やめた。

気が付いた、思い出した、何をやっているのだろう俺は。

もう再開して数十合、何故こんなにだらだらと守っているのだ

エミヤシロウ

オマエの戦い方は守り勝つ戦いであって、守りに『逃げる』戦いではないだろうが。

そんな戦い方では守ることすら出来はしない。

全く、未熟だった頃の記憶の断片をあの槍を見て思いだして逃げに入るなんて、あの頃と比べたらこんなに打ち合えて十分に善戦しているなどと思ってしまうなんて、貴様は馬鹿か。

一体どれだけの年月を生きたと思っている。

一体どれだけの戦いを経たと思っている。

一体どれだけのものを得たと思っている。

彼女と共に、今も自身の中に抱く仲間と共に、どれだけの化け物どもを打ち倒したと思っている。

それを、あの槍兵と魔槍を見ただけであっさりと過去に引き戻されやがって。

ガチリ、と齒車が噛み合う音がする。

ざわり、と俺の中から声がする。

全く、あの最後の戦いで気が抜けたとか言い訳にもなりはしない。

一際高い音が響く。

防戦一方だった俺の反撃にランサーが後退する。

「へえ」

打ち合ううちに徐々に興が削がれたといった風に変化していったランサーの容貌が喜悦に変わる。

情けない、そんな顔をされるほど先程までは及び腰だったというわけか。

恥ずかしい限りだが、それもここまでだ。

「なんだよ、途中から期待したよりつまらなそうだと思ったんだが 期待以上じゃねえか」

ああ、本当につまらないものを見せたものだ。

過去の未熟な自分と先程までの自分、その無様、今から返上させてもらおうか。

「全く、出し惜しみが過ぎるってもんだ。はつきり判るぜ、さっきまで誤魔化してやがったな」

「ああ、悪いな、ちょっとノスタルジックな気分になっていたみたいだ」

「ハッ 愉快なのは良いが、緊張感が足りてねえぞボウズ！」

今までで一番強い殺気が叩きつけられる。
しかし、

「誰がボウズだ！俺はそんな歳じゃねえ ！」

そんなもの、叩き返してくれる！

こうして互いの戦意が最高潮に達し、今まさに激突せんとしたその時

「ちっ
」

突如ランサーの殺気が霧散した。

「むっ
」

肩透かしを食らった俺の戦意も霧散する。

互いに沈黙したまま向かい合う。

「最高にいいとこだったのよ……うちの腰抜けが『戻って来い』だと抜かしやがった」

ランサーは溜息と共にそう吐き捨てる。

「わりいな、この勝負預けておく」

そう言うところりと俺に背を向けて階段を下りだした。

「ま、どうせオマエはずっとここにいるんだろ？近いうちにまた来るぜ。ま、そんなときや俺も令呪の縛りなく全力が出せるわけだ。悪いことばかりでもねえ」

最後にそう言って消えていった。

不本意な命令を受けても気持ちさをさらりと切り替え悠然と去っていくその背中を、俺はただ眺めているだけだった。非常に釈然としない気分だけが残った。

その後、サーヴァント同士で戦ったにも関わらず、俺の『魔剣』が食い散らかしたせいで実入りが少なかったとキャスターに小言を言われる俺であった。実に納得がいかない。

第四話（後書き）

戦闘描写もクソも無い。

拳句唐突に終わるし・・・むう。

魔剣・剣製（笑）
ブレイブドクス

第五話

「ふう・・・なんていえばいいのかしら、随分とムラのある戦い方をするのね」

「・・・そう、ですね」

シロウとランサー、二人の戦いを遠見の水晶で見ていたキャスターとセイバーは呟いた。

セイバーとしてはシロウ一人に戦わせて自分は後ろで高みの見物などしたくはなかったのだが、万が一キャスターに何かあっても困るそれに危なくなればキャスターの空間転移ですぐに加勢に行くことも出来る、ということまでこうしてシロウの戦いを見ていたのだが。

「長い年月を戦い抜いてきたにしては随分と、その、ねえ・・・。本人の言うようにノスタルジック？な気分とやらのせいかしら？」

というか、何がノスタルジックよ、本当に緊張感が足りてないわと呟くキャスターにセイバーは苦笑するしかない。

「郷愁、ですか・・・それもあるのかもしれません。それにランサーはシロウにとって因縁浅からぬ相手であるのは確かですから。で

すが」

それだけでアレが説明できるとも思えない。

遠い遠い過去、もう薄れてろくに思い出せもしない故郷、そこで自分の命を奪った相手との対峙、ジンの存在しないこちらでの初戦、確かに色々と思うところはあるだろうがそれだけとも思えない。

最初は様子見とこちらでの初戦ゆえ、慣らし運転のようなものだろうと思っていた。

幸い、ランサーも偵察にやってきたような節が見受けられるし丁度良いともいえた。

しかし、途中から違和感があつた。

普段よりも消極的、というよりいつもの彼ならば必ず反撃を入れ攻勢に移るだろうタイミングでも守りに徹している。

積み重ねたものは伊達ではない、彼が何を考えていようと最適のタイミングで既に身体が動いているはずなのだ。

攻撃の機会を見過ごしてまで彼が防御に徹することに拘るのであれば話は別だが……。

そうだとするならこれもシロウに何か考えがあるのだろうと思っていたのだが。

その後、数十合を打ち合ったシロウにセイバーははっきりと違和感を覚えた。

やはり消極的なのだ。

事前にキャスターに指示された魔力収集の為かとも考えたが、やはりおかしい。

エミヤシロウの戦い方はその積み重ねられた経験による『眼』で可能性を引き寄せ、その可能性に全てを叩き込む戦いだ。

手数で押してこじ開ける、守りに徹してその一瞬を引き寄せる、そ

の他様々な手管を尽くして最善を引き寄せ、そこに自身が持てる全てを苛烈なまでに叩きつけるのだ。
セイバーが直感によって其れを成すように彼は経験によって其れを成す。

例えば時間をかけて魔力を収集する方針にしたとしても、獲れるとあらば獲りに行くのがエミヤシロウだ。

それなのにその瞬間を全て見過ごして、ただ打ち合いを続けるだけとはどういうことだろう。

ランサーも、最初こそ期待をするような表情であったが、打ち合う度に徐々に肩透かしを食らったような表情に変わり、ついには興が削がれたような面持ちに変わりつつあった。

それでもその槍捌きに一つの曇りがない、シロウも本来ならばそうであるはずなのだが……。

変化は唐突に。

突然の変貌だった。

突如、今まで防戦一方だったシロウが反撃に転じたのだ。

怒気と共に凄まじい力が奔り一撃でランサーを大きく後退させる。

今の一撃のための布石だったのか？そう考えたが、すぐにそれは違うということが判った。

シロウがその場から動かなかったからだ。

何故この機会に追撃し畳み掛けかないのか、今までの消極的な戦いもその為の布石であるというならまだ辛うじて納得がいっただろうに後退したランサーは先程とは一転して顔に喜悦を浮べ、対するシロウはその表情は苦々しい。

まるで先程までの自身を恥じるような、悔いるようなそんな顔。

ぎちり、と歯を食いしばる音が聞こえたような気がした。

シロウから怒気と共に力が溢れ出す。

ざわり、とシロウの中の何かが蠢くのがわかる。

怒気と共に膨らんでいくシロウの力、それに対しランサーは望む所とばかりに殺気を叩きつける。

そして二人が今にも再び切り結ばんとしたその時、

突如ランサーの殺気が霧散した。

肩透かしを食ったようにシロウの怒気も薄れ、そして霧散してしま
う。

こうして戦いは非常に呆気なく終了した。

振り返ってみてもやはりおかしい所ばかりが目立つ。

ランサーの戦い方は元々が彼がムラつけのある人物なのだろう、見ていれば判るのでその点に疑問はない。

問題はシロウだ。

セイバーはシロウがあのような戦い方をするとところを見たことが

無いとは言わないが、流石に何の理由も脈絡も無くあのような状態になったところなど知らない。

ランサーとのやり取りで特に何かがあつたわけでも無いようなのに、消極的かと思えばいきなり怒りをあらわに力を漲らせるなど絶対にありえない。

それも策のうちであつたのならいいが、そうでもないらしい。

「あくまで可能性の話なのだけれど・・・」

思考に埋没するセイバーにキャスターが声をかけた。

キャスターは私なりの仮説であつて可能性としてはなんとも言えな

い、と前置きした上で『世界の修正力』と口にした。

エミヤシロウが以前の説明どおり『世界』であるとするなら、『この世界』がそのような異界を放置しておくのがそもそもありえない。もとよりそれで『元々いた世界』から排除されたと言うのであれば、『この世界』も同じように彼を排除しようと　そもそも侵入自体させないはずなのだが

「そんなものを私が引き釣り込んだ、というわけね」

コレばかりは全く原理がわからないわね、と呟いた後にひよつとしてこれって私も共犯ってことで修正されたりするのかしら？まあ、私がいなくても何か別の方法で侵入しそうな気もするわね、と嘆息した。

「では、今回シロウの様子がおかしかったのは『世界の修正力』だと？」

「そうかもしれない、っただけよ」

世界に侵入したエミヤシロウという異界、この世界はそれを自身の身ごと切り離す外科手術ではなく、その他の方法による所謂ホルモン治療や薬物治療みたいなもので取り除こうとしているのかもしれない、と。

「というか、普通はそれなのよね・・・英霊や守護者がそういう役割なのだし」

それを侵食された固有結果ごと切り離すなんて普通やらない、何処までやればそんな対応になるのかしら、つくづく化け物ねとも。話は続く。

搦め手できたのかもしれない、とキャスターは言う。

元いた世界で修正力に逆らい続けたエミヤシロウに正攻法は通じない、そんなことはこの世界が知るかどうかはともかくとしてそれ故に搦め手、エミヤシロウの過去というもののからの揺さ振りをかけてきたのかもしれない、と。

修正力が偶然やって来たのに乗ったのかは知らないが、ランサーというエミヤシロウにとっての明確な『死』の記憶、そこから彼の心象世界に揺さ振りをかけてきたのではないか。

途中まではそれが上手く作用しエミヤシロウの動きを鈍らせたが、

それは彼の怒りによる力の発揮によって中断した。

あれは不甲斐ない自身への怒りのように見えたが、何かそれにしては不自然なようにも見えた。

あれはエミヤシロウの心象世界への揺さ振りに対する反発だったのではないか、本人は純粹に不甲斐ない自分に怒りを覚えたとは思っていないかもしれないが・・・それにより干渉を撥ね返し、その後これもまた偶然なのかそうでないのかは不明だがランサーはマスターの命によって去り、戦いは終了した、と。

「・・・・・・・・」

キャスターが語り終え、辺りは沈黙に包まれた。
暫し後、はあとという溜息がキャスターの口から漏れる。

「たればばかりで話にならないわ、考えるだけ無駄ね」

「あれだけ長々と語っておいてそれですか・・・」

キャスターの投げやりな結論にセイバーからも思わず溜息が漏れる。
そんなセイバーに、

「可能性の話、と言ったでしょう。それに、どちらにしたって私の
やることは変わらない。聖杯を手に入れて私の願いを叶えるだけよ」

静かに、だが確りと確かめるようにそう口にして、

「それとも、怖気づいたのかしら？」

続けてからかうようにそう言った。

「ほう　良くぞ言いましたキャスター。確かに、不確かなことを
気に病んでいても仕方が無い。我々は我々の成すべき事を成すだけ
だ。」

そんなキャスターにセイバーも負けじとそう答え

「それはともかく」

「ええ、あそこで呆けている坊やには今の話はしないでおきましようか」

「不確かなことを話しても余計混乱させるだけですしね・・・」

遠見の水晶に映る釈然としない表情で突っ立っている青年を見て溜息をつくのであった。

第五話（後書き）

職場で合間合間にメモ帳に書いてから更に続きを繋げてみたのですが、なんかやっぱリペンで書くのとキーボードで書くのでは大分違うんですね。とか当たり前のことを思った今日この頃。

第六話

ランサーの襲撃から一夜明け、俺は柳洞寺のある円蔵山の山頂に立っていた。

もう覚えていないが懐かしいと感じる街並みを眺めながら、昨夜のことについて考える。

何故あんな無様を晒してしまったのか、序盤はまだ様子見たかったからまだいいがその後が頂けない。

そもそも何故『魔剣』のみで戦おうとしたのだろうか、相手に手札を見せたくなかった？それもあるが・・・

『何をうじうじと悩んでいるのかしらエミヤクン』

「む・・・昨日から反応が無いと思ったらいきなりだな」

俺の中から突如聞こえた魔女の声に思わず声を出してしまう。

声を出さなくても自身の中だから聞こえるだろうに、これでは独り言だ。

仕組みはわからないが念話のような感覚でいいのだろう。

『まあ、そんなところね。でも『私には』ある程度は筒抜けだからそつわざわざ意識を集中する必要はないわよ』

にんまり、とか擬音が聞こえそうな声音で嫌な事を言われた。
なんてこった、殆ど筒抜けだということだろうか・・・まあ、俺の
中に居る時点でプライバシーとかそんなもの皆無だろうしコイツに
なら別にいいか。

散々酷い目にあわされたりからかわれたりへっばこ言われたりした
が、なんだかんだでエミヤシロウはコイツみたいな奴は好きだし。

『。。。』

ん、どうしたのだろう息を呑むような音が・・・

『なんでもないわ、相変わらずだなあとか思っただけよ』

はあ、とか溜息が聞こえたんだが何でもないのか？

『なんでもないわ、ええ何でもありませんとも。それと、何時もの
ごとく脱線しているわよこの建築限界支障物』

建築限界支障物 文字通り電車の線路とかの建築限界（列車に当た
る範囲）を支障する支障物のことである。

判りやすく言うと置石とかだろうか？

つまりアレか、俺は話を脱線させる支障物だと申すか

『言いて妙だと思わない？話題という列車を脱線させた拳句に自身が吹っ飛ばされたり粉碎されたりする所が特に　そしていい加減に話を元に戻しなさいこのぼやんクリーチャー』

なんなのだろうか、俺は何か言うたびに酷い呼び名を付けられる運命にあるのか？なんだよぼやんクリーチャーって

『ええい、黙りなさいこの世界びっくり人間ショー』怪奇！身体から剣が生える男』の分際で、大体ねえ　　』

この後、『永遠の17歳（笑）』だの『ピーターパン症候群』だの『新婚数千年のバカップル』だの散々罵倒され続けたのであった。

『　　不毛な時間だったわ』

ぜえぜえ、とか荒い息遣いが聞こえる。
そんな風になるなら是非とも途中でやめて欲しかった。

『あら、まだ言われ足りないのかしら』

ごめんなさい。

情けない限りだがもう俺のS A N値は限界なのだ。正気度

『ふう、じゃいいわ。丁度いい息抜きになったでしょ、ウジウジした気分も吹き飛んだところで本題に入りましょうか』

む、確かにさっきまで押し掛かるような息苦しさが軽くなった気がする。

参ったな、そんな所まで計算に入れていたのか・・・まったく、本当にコイツにはいろんな意味で頭が上がらないな。

『気にしないでいいわよ、元々『私達』のせいでもあるのだから』

む、どういうことだろう？

ここからは余計なことを言わず説明を聞いておくべきか。

なんでも、俺の『世界』はまだひどく不安定なものらしい。
というより、普通に『世界』を内包するなんて、ましてその『世界』と契約したモノを大量に抱え込むなんて一つの存在には分不相応に

も程がある。

で、現在それを安定させるべく中の連中で色々とやってくれているらしいのだが、というか主にコイツが、というかコイツしかそういう真似はできないらしいが・・・その関係でこうして話せるのもコイツだけ、ということらしい。

それで、その不安定な『世界』は俺の精神を圧迫しているらしい。

固有結界、俺の心象世界である剣の荒野

エミヤシロウの『世界』、その先にある俺と仲間達の理想の大地^{ネガイ}

つまりは、エミヤシロウの心象世界には現在大量の居候が押し付けてきた状態で家主である俺はいっぱいいっぱいであるということらしい。

なんだそれ、情緒不安定ってことか。

『いや、でも大したものよエミヤクン、普通、というか普通じゃなくても無理だから。全然そうは見えないけどやっぱり何千年だか生きてきた器ってのは大したものね』

普段は全然凄そうに見えないのにね、などと続けて言われる。

相変わらず全然褒められてる気がしない。

で、そういうわけなので固有結界は暫くは使用しないように、との事だった。

投影は仲間達が『世界』の契約時に『持っていかなかった』物だけなら現在でも可能らしい。

なんでも、それらの剣たちは既に彼等という持ち手を得た真作で無限の剣製側じゃなくて『世界』側に近いものだからもしかしたら影

響がどーたらとか・・・。

って、それって俺がメインで使用するものばかりなんだけど、オマエが持ってた破戒^{ル・ブレイカー}すべき全ての符とかもかなり重要だし。

『そこらへんは『魔剣』で補って頂戴、アレの変化なら使える筈よ。実際昨夜使ってたじゃない、きっと無意識に理解していたのではないかしら？だから『魔剣』のみで戦った。そう考えられないかしら』

なるほど、昨夜の戦いで『魔剣』のみで戦おうとしたのはそういうことなのか。

そして、エミヤシロウらしからぬあの醜態は・・・

『そういうことになるらしら、戦闘で気が高ぶって変な方向に意識が流れたのかもしれないわ。次からはそうならないように気をつけるのね』

ああ、流石にあんな無様なのはもう御免だ。

うん、ありがとう、助かったよ。

『いえいえ、どういたしまして。さて、それじゃ私はまた地味な作業に戻るとするから何かあったらまた呼びなさい。』

と言ってもこっちから全部見ているから勝手に来るのだけどね、と最後に呟いて声が聞こえなくなる。

ほんと、コイツ一人とっても俺には過ぎたものばかりだ。
さて、これだけしてもらっていつまでも考え込んでいては申し訳ない。

前向きに今ある手持ちでどう戦うか考えるとしよう。

・・・結局考え事なんだなあ、俺。

『ま、それだけが理由じゃないのだけれど』

魔女は呟く。

『あの時、私達の世界を揺さぶってきたあの力、あれが世界の修正』

力というものかしら？』

『まあ、どっちにしてもあのへっぽこには話さない方がいいわね』

『もし本当に世界の修正力だったりしたら意識させて露骨に反発なんてされたらまた放り出されかねないし・・・別にいいのだけれど』

『でも、あのキャスターの願いを叶えてあげようっていうのに途中で放り出されたら嫌だろうしね』

『ま、精々頑張りますか』

第六話（後書き）

うがががあ、話すすまなーいorz
それと、寝不足でアレになってきたのでペース落として一話辺りの
文章量増やすか検討中デス

第七話

ランサーの襲撃から二日が経った。

俺は魔女の助言を参考に『魔剣』と投影可能な武装でどう戦っていくかを考えていた。

もちろんセイバーとキャスターには俺の現状を話してある。

俺の話を聞いた二人はなんか微妙な表情、なんというか半分納得でもう半分はなんだか釈然としないようなとでもいうのだろうか、そんな表情だったのが気になったが・・・。

とにかく、それで今後の俺の戦い方についてある程度の目算はつき、あとは実戦で問題点を見つけていくことになった。

・・・流石に魔剣使ってセイバーと模擬戦とかはしたくない、それに理由があつてできない。

で、些か不安が残るが門番は継続、ということになった・・・というよりも俺がそう希望した。

元より俺の戦い方は自身が今持ちうるもの全てで勝利を手繰り寄せる戦い方だ、無いならないで今あるもので戦ってみせる。

とか思つて何時もどおり夜の門前に立っていたのだが・・・ちよつと早まったかもしれない、と思わなくも無い。

いや、だって、なあ、強化した視力で階段をずしん、ずしんと歩いてくる巨体が見えるんだもの。

くそ、ランサーの次がいきなりコレか、ランサーがエミヤシロウの

『死』のイメージだとするならば、今ゆっくりと階段を上がつてきているあの巨人は『破壊』と『畏怖』の象徴といったところだろうか。

これは何かを試すとかそんな悠長なことを言っていられる相手ではないな。

「バーサーカーにばかり目が行くのはわかるけど、こちらも向いてもらえないかしら」

立ち止まったバーサーカーの足元から声がする。

ああ、気が付いていたけれど、直視すると色々と感情が溢れ出しそうだったから、少し心の準備が必要だったんだ。

バーサーカーから視線を外しその足元、というのはあんまりか・・・少し視線を下げ腰辺りに目を向ける。

そこには、妖精のような顔立ちに酷く冷たい、そう雪のように冷たい表情でこちらを睨む少女がいた。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

驚いた、はつきりと名前を覚えている。

いや、はつきりと名前を思い出せた、と言っべきだろう。

同時に、言葉に出来ない感情が胸にこみ上げてくる。

「改めましてこんばんわ、そしていきなりだけど　あなた何者？」

けれど、向こうは俺の事情なんて知るわけもない。

「・・・サーヴァントだ、他に何にみえるんだ？」

感情を必死に抑えて何とか言葉にする。

駄目だな、予め正体を問われた時の為に用意していた言葉が出てこない。

「サーヴァント、ね・・・クラスは何かしら？そして、その姿は何？」

視線を鋭くしてこちらを見上げるイリヤ、険しい表情なのはなるほど、俺が外見も中身もありえないサーヴァントだからか。

今で確信した、この世界、この時代の衛宮士郎はやっぱり俺と同じ姿なんだろうな・・・。

やっぱり俺はあの時から全く変化してないのか、いくらセイバーの鞘の力があつたとはいえ少ぐらい外見が変化してるんじゃないかって思っただけだなあ。

「答えなさい、この私に底が見えないその在り方、そして・・・
お兄ちゃん』と同じ姿、あなた一体なに？」

重ねて問われる。

よし、落ち着いてきた。

「サーヴァント、『イミテーター』。故あってキャスターによって呼び出されたサーヴァントだ。この姿は、クラス名から察してくれないか？」

予めセイバーやキャスターと打ち合わせていた通りに名乗りを上げる。

流石にエミヤシロウです、などと言う訳にもいかないしな、というよりそっちの方が信じてもらえなさそうだ。

「『イミテーター』？模倣者、偽造者、ね。ふうん、イレギュラーなクラスなんだ。だから私にもよくわからないし、模倣者だからお兄ちゃんの姿を真似してるんだ」

「ああ、そういうことになるかな？俺は元々自分と言うものが無い模倣者だからな、誰かの殻を被らないと存在できないんだ。まあ、何故この姿なのかは俺にもさっぱりなんだけど。まあサーヴァントがサーヴァントを呼び出すなんていうイレギュラーのせいかな」

「ルール違反をしたからペナルティでそうなった、と・・・まあ、アインツベルンも前々回に呼べもしない神霊を呼ぼうとしてただの人間を引いちゃった、なんてワケのわからないことしているからありえないとは言わないわ、でも」

そう言いながらイリヤスフィールは、いやイリヤはつまらない様な

ものを見る目で俺を見る。
そして

「
嘘ね」

はつきりと言い切った。

バレバレか、色々と無茶があるものな。

しかし、煙に巻くぐらいは出来ると思ったけど断言されてしまうと
は、こんな嘘では誰も騙せないのか、それともイリヤだからここま
ではつきり言えるのだろうか。

「全て嘘かはわからないし、色々と考えられることもあるし興味も
あるけど」

言葉と共に今まで沈黙していたバーサーカーが一步前に出る。
まあ、こうして来た以上話だけで帰ってくれるわけもないか。
『魔剣』を取り出す。

「でも、嘘つきは嫌いな」

本当はこの子と戦いたくなんて無いが、今はそれを言うべき時では
ない。

「やっちゃえ、バーサーカー」

話をするにもなんにしても、この場を凌がなければどうしようもない。

「――！！！！！！」

「っあああ―！！」

左手にバーサーカーと同じ得物に変化させた『魔剣』。
バーサーカーの斬撃を真っ向から迎え撃つ。

一撃で辺り一面の階段が、石畳が捲れ跳ね上がる。

二撃、跳ね上げる石畳や衝突で吹き荒れる魔力を喰い力を上乗せし押し込む。

三撃、バーサーカーが吼える、二撃目で押し込んだ俺が逆に押し込まれる。

「
— I a m t h e b o n e 《我が骨子は》
」

四撃、更に勢いを増すバーサーカーの斬撃に俺の体勢が崩れる。

「
— o f m y s w o r d . 《捻れ狂う》
」

五撃、体勢を崩した俺は後方に吹き飛ばされると同時に

「
つ
フリーズアウト
停止解凍、全投影連続層写……………！！！！
」

自身の中に待機させてあつた剣郡を放つ。

「
————！！！！
」

迎え撃つバーサーカーの姿を最後まで見ることなく、俺は門をぶち破って境内に転がり込む。

左手の斧剣は既に弓に、そして右手には今まで顕現させていなかったもう片方の魔剣を

「カラドボルグ
“偽・螺旋剣”」

装填し、

「――！！！！」

門を飛び越える巨体に向けて撃ち放つ！

だが、例え空中に在ったとしても、例え放った剣郡の何割かが身体に突き刺さったままで動きが鈍っているとしても、アレがまともに食らってくれる保証など何処にもない。

故に、

ブローケンファンタズム
「壊れた幻想」

その突き刺さった剣たちを纏めて爆破する。

「――！！！！」

カラドボルグ
それによって魔剣を迎え撃たんとしていたバーサーカーの体勢が崩れる。

しかし、

「――！！！！！」

それでも崩れた体勢のまま、無理やり軌道を変えた強引過ぎる斬撃を振り下ろし、轟音と共に叩き落した。

叩きつけられた魔剣が石畳に突き刺さり境内が凄まじい衝撃に震える。
カラトボルグ

衝撃で吹き飛び巻き上げられる砂利と土で視界が遮られる。

土煙が晴れ視界の先には体の各部が破損し、しかしそれが急速に再生しつつあるバーサーカーがこちらを見据えている。

距離にして大よそ30m、間には魔剣が叩きつけられ出来たクレータ―。
カラトボルグ

「参ったな、今ので『一度』は獲らせてもらおうと思ったんだけど」

しかし、あいつ等がごっそり持っていたあとの残りの剣じゃ目の前のアレの相手は荷が勝ちすぎか・・・何本かあの身に届いただけでも良しとすべきか。

「すごいね、バーサーカーが殺されちゃったところだった」

楽しそうなイリヤの声がする。

「いや、これだけやったのに全部力技でなんとかされちゃったよ。そっちのバーサーカーこそ凄いな」

「当然でしょ、私のバーサーカーは最強だもの」

当然と言う割には声が嬉しそうに弾む。

「でも、『一度は』かあ・・・ふうん、『知ってる』のねバーサーカーがどういう身体なのか」

しかし、次の瞬間には探るような声音に変わっていた。
ほんと、無邪気だったり冷酷になったりころころ変わるなあ。

「ああ、一度殺したぐらいじゃ死なないって事ぐらいは知っているつもりだ」

「ほんとに興味深いサーヴァント、殺すのが惜しいわ」

む、本当にそう思ってるんだか疑わしいが、

「だったら、今日はこのぐらいに見逃してくれないか？」

そうして欲しいのだが、俺はイリヤと争いたくなんて無いんだから。そう言つと少し考えるような間が空いて、次に

「だめ、つて言うところだけど・・・そうね、気が変わったからいいよ」

そんなことを言っていた。

「へ？」

予想外な答えに思わずぼかん、としてしまう。
そんな俺がおかしいのかくすくすと笑い声が聞こえる。

「うん、今日は見逃してあげてもいいよ　バーサーカーを一回でも殺せたら、ね」

「――！！！！！」

弛緩した空気が一気に先程までのものに引き戻される。

くそ、そういうことですか、やっぱり甘くない。

けど、それならこっちにとって都合が良い。

バーサーカーが俺に向かって突っ込んでくる。

30mなんてアレにとっては一瞬だ。

俺も先程と同じ魔剣魔剣を両手で握り、バーサーカーに向かって走る。

丁度中間地点、クレーターの中心部で俺達は激突

しなかった。

突然だが、俺の中の仲間達が持っていていき、現状使用不可能な武装の中に『偽・螺旋剣』カラドボルグは入っていない。

元々、これは弓で撃ち放つために独自の改造を行ったものだからだ。ならば、何故魔剣を変化して撃ち放ったのか、魔剣は投影品ではないゆえ替えが効かない、だから本来ならば矢として放つならば投影した物の方が良いにきまっている。

だから、さっきバーサーカーに投影した偽・螺旋剣カラドボルグを放てば、迎撃される直前に壊れた幻想で爆破すれば、一度とならず殺せたかもしれない。

だが、俺の魔剣にはそれとは違う使い道がある。

「え」

イリヤの啞然とした声

当然だろう、突如としてクレーターの中心部から、『何か』が『生えて』きて、バーサーカーを下から串刺しにしたのだから。

そう、クレーターの中心部、叩き落とされ地面に突き刺さって埋もれていたもう一本の『魔剣』
それが形を変え、バーサーカーを刺し貫いたのだ。

これで一度

「っあああああ！」

俺は止まらず、そのまま魔剣^{斧剣}を動きの止まったバーサーカーの胸板にぶち込む。

二度目

そして、手に持つ魔剣^{斧剣}と地面からバーサーカーを貫いた魔剣が接触する。

瞬間

「混ぜれ」

ぐにやり、と二つが触れ合った点を中心に溶け合い一つになる。
俺は融合する魔剣^{斧剣}に引っ張られ両腕ごとバーサーカーの中にめり込

む。

次の瞬間、

「離れる」

再び魔剣を二つに分ける。

弓と矢に。

俺を引き剥がそうと動くバーサーカーの右手が、硬直する。
びちびちびち、ぶちぶちぶちっと言う音と共にバーサーカーの中で
再び形になっていく弓と矢。

番えた状態で変化したその矢、そのみを

「ね、じれろおおおおお！」

両腕に全力で強化をかけ力の限り引き絞る。
みちちちちちと厭な音をさせて、そして

これで

「はじ けろおおおおおー！」

三度！

手を離す。

どうん、ずばあん、と鈍い音と甲高い音をほぼ同時に響かせバーサーカーの背中を破裂させ矢であった剣が、そして弓も弾き出される。そして同時に俺はバーサーカーの脇をすり抜け魔剣を回収し、

「――！！！！！」

「ああああああっ！」

振り向きざまに斬撃を叩き込む。

お互い振り向きざま、しかもあつちはまだ再生しきっていない状態だと言っのに俺が力負けして吹き飛ぶ。

死後の硬直が短すぎるだろ、しかも再生速度も速い上に再生しきってないってのにこれだけの力が出せるのか。

事前に生き返ることを知っていなかったら、一度殺した時点で油断してやられるかそうでなくても深手を負うだろう。

知ってても今みたいに危ないってのに、全くとんでもない奴だな。

このままやりあったら流石に厳しいかもしれない。

だが、

「ふう、条件はクリアーできたよな？」

今日はここまでだ。

「。。。」

俺の背後で息を飲む声が聞こえる。

そう、すれ違って吹き飛ばされた俺はバーサーカーの後方に居たイリヤの近くまで吹き飛ばされたのであった。

「全て計算づく、というわけ？」

「偶然だよ、全く冷や冷やしたよ」

背中越しに言葉を交わす。

「よく言うわ、それでこれからどうするの？この位置ならバーサーカーが辿り着く前に私を殺せるけど」

確かに、それは可能なんだけど、

「それで突っ込んできたバーカーカーに俺がやられて共倒れ、って
いうのは頂けないな」

間違はなくそうなる、離れたと言ってもアレには一息の距離だし、その時間を後方に居るイリヤに対して使えば俺はやられる。

ま、イリヤ自身がなんの抵抗もせずやられてくれるんならそうでもないが、俺にとってはささやかでも何かされればその僅かな手間、その刹那が俺の命運をわけらるだろう。

そんなのは御免蒙る。

それに、

「バーサーカーを一度でも殺せば引いてくれるんじゃないのか？」

俺自身イリヤを傷つけるつもりはないわけで、

「だったら今夜はここまで だろ？」

「ほんと、へんなの」

背後のイリヤから敵意が消える。

目の前で今にも飛び掛らんとしていたバーサーカーから滲み出る殺気が、狂気が納まると同時に俺も構えを解く。

バーサーカーがこちらに向かってゆっくりと歩いてくる。

俺もそちらに向かって歩く。

すれ違う。

。

狂化され思考が無いはずのコイツから 何か、言われたような気がした。

一瞬呆けて、振り返る。

そこには既に肩にイリヤを乗せ感情の無い瞳でこちらを見る奴の姿があった。

「最初といい今といい、バーサーカーばかり見て、レディーに対して随分な態度ね」

「む、悪い」

睨まれて思わず謝罪が口から出る。

「……ほんと、意味わからない。バーサーカーを一度とならず殺したその力、なのに口を開くと普通、ほんとうに韜晦するわけもなく普通だなんて」

ほんとへんてこね、なんて言いながら俺をじっと見つめるイリヤに俺は苦笑するしかない。

「まあ、いいわ。今日のところは約束したし帰ってあげる。殺された以上にバーサーカーの魔力を沢山その剣に取られちゃったし、私も少し疲れちゃった」

バーサーカーを殺せて、それに魔力までごっそり持っていくなんてどういう理屈？とか続けながら、

「もう！突っ込む所が多すぎてわけわかんない」

うーむ、なにもの、とかわけわかんない、とかじんしられない、とか言われすぎて俺も意味わかんなくなってきたそうだ。

「深く考えずに在りのままを受け止めればいいと思うぞ」

というわけでこういう時の俺の決め台詞？を言ってみる。
今までこういう問答をしてきた相手に対して自然と出る言葉、その反応はというと

「。。」

大抵がこういう白々しいものを見るような視線なのであった。
あの『魔女』とかキヤスターとかその他諸々にもこういう顔された
なあ。

はあ、という溜息が聞こえる。

俺との会話で相手から溜息が聞こえないことなんて殆ど無い、とい
うのはどういうことなのだろうか。

「もういい、帰る」

そついうとイリヤの乗るバーサーカーが踵を返し門に向かって去っ
て行く。

「ああ、またな」

その背に声をかけて見送る。

「……いいの？そんなこと言って。次に会う時は殺されるのに」

「ああ、それは困るな。俺はイリヤとは戦いたくない」

バーサーカーの足が止まる。

「戦いたくないなんて、それに『イリヤ』？ 馴れ馴れしいわね。あなた嫌い、ほんと厭なサーヴァント」

むう、つい名前で呼んでしまった。確かに馴れ馴れしいか、嫌われてしまったな・・・でも、

「む、俺は好きだぞ、イリヤみたいな子。だから戦いたくない」

睨んでくるイリヤを真っ直ぐに見てそう偽り無く口にした。

「え。」

その言葉にイリヤはびっくりしたように少し身を引いて目を見開き固まった。

そして、暫くころころと表情を変えて最後にむすっ、としてほほを膨らませてまた睨んできた。

なんでさ、俺なにか変なこと言っただろうか、言っただろうなきつと。

むー、っと睨んでくるイリヤを見ながらそんなことを考える。

そんな俺をじーっと睨んでいたイリヤだったが、

「もついい、今度こそほんとに帰る」

ぷいつ、と顔を逸らして今度こそほんとうに帰っていく。

でも、去っていきながらもちらっ、ちらっ、とこちらを見ているのはなんなのだろう。

ああ、そうか、

「じゃーなー、気をつけて帰れよー」

遠ざかっていく二人にぶんぶんと手を振る。

・・・なんか露骨にがっかりしたような顔になったぞ今、ふんつてそっぽを向いてそのまま去っていつてしまった。

バーサーカーの歩みがいきなり粗くなつてどしん、どしん、とかいつてるし・・・何か間違ったか？

その後、キャスターに門を突破されたこと、境内を滅茶苦茶にしたこと、二人をそのまま帰してしまったこと、その他諸々のお小言を頂いたのだった。

最後に、

「このロリコン」

とか言われたんだが、なんでだ？

第七話（後書き）

うがががががぁ・・・うぎぎぎぎぎい・・・我が駄文ながら進みの遅さにイライラします。

いちいちまどろっこしいんだよ文章がぁ！と自分に突っ込みを入れながら、でも進まない、もっとすむーずに展開できないものか・・・。

ああ、自分で何言っているかわからなくなってきたー。

あ、前回言っておりました文章量云々は時間軸が f a t e 本編の時間軸にのってからにしようかと思ってます。

第八話

イリヤとバーサーカーの襲撃から一夜明け、俺は柳洞寺のある円蔵山の山頂に立っていた。

もう覚えていないが懐かしいと感じる街並みを眺めながら、昨夜のことについて考える。

なんか、数日前も同じことしてなかったか俺。

街並みをぼんやりと眺めながら色々考える。

昨日のバーサーカーとの戦闘でわかったこと、そして・・・ふと、背後に気配を感じて声をかける。

「セイバーか」

「はい」

振り返るまでも無い、俺はそのまま街並みを眺め続ける。

セイバーは俺の隣に立ち、同じように街を見渡す。

「懐かしいですね」

「ああ、覚えてないけど懐かしい」

「考え事ですか？」

「ああ、少し」

「イリヤスフィールのことですか」

「・・・ああ」

バレバレか、当然だよな。

俺がセイバーに隠し事が出来るわけがないし隠すつもりも無い。

「それで、答えは出ましたか？」

やれやれ、具体的に何考えているかもわかってるか、参ってしまう。
ふふっ、と隣で微笑んでいるのがわかる。

むう、じゃあここで意表をついてやるとしよう。

「うん、こっちの俺に任せる」

「は？随分とまあ投げやりな答えですねそれは・・・しかし、まあ我々はキャスターについているわけですからあからさまに何かができるわけではないですしね」

「いや、やれることはするぞ。夜は基本ここの護りで何もできないけど、他の連中が関係の無い人たちを巻き込もうとするならそれを止める」

「はいはい、関係者も含め全部放って置かないし、置けない、ですねわかります」

む、なんなのだろうか、俺の言っていることとわかりますとかいいながら話すセイバーの話の内容が噛み合っていないのだが、

「噛み合っていますよ、シロウがそういいつつも私が言うとおりになる。がちりと噛み合いすぎて我ながら怖いぐらいです」

自信満々にそう言われてしまうと、その、なんだ、困るというか、立つ瀬が無いというか、そうなってしまいそうな気がするんだが・

・。

「気がする、ではなくそうなるのですよシロウ。貴方はそういう人なのですから。尤も、キヤスターの側につくと決めた以上は彼女を疎かにはしないでしようが、それ以外で許す範囲であれば貴方は迷うことなくそれを行う」

だって、シロウは人の不幸を見過ごせない人なのですから、などと嬉しそうに言うセイバーに俺は苦笑するしかない。

「やれやれ、俺ってそんなに欲張りで我侭かな？」

「ええ、この上なく。いいではありませんか、そんなシロウだから私は貴方と共に在るのですし、貴方の中の『彼ら』もそうなのですから」

それとも、ご不満ですか？と微笑むセイバー。

ずるいな、そんな聞き方されて何か言えるわけ無いじゃないか。

そんな俺の様子がおかしいのか、セイバーは重ねて笑う。

「シロウ、貴方はなんだかんだと考え込んでも、結局その時になればそんな逡巡など振り切って駆けてしまう人なのです。あなた自身それはわかっているでしょう？」

むう、それはそうなのだが・・・

「全く、どうしたというのです。遙か昔の貴方ならいざ知らず、今の貴方はそうではないでしょう。まさか、ランサーに語ったように本当にノスタルジックな気分とやらになったたでもいのですか？」

うわ、勘弁してくれ・・・あの時はほんとどうかしてたんだ。
じやなきや流石にあんな恥ずかしい単語が出てくるわけが無いじゃないか。

思わず言い訳などしようと口を開こうとしたその時、

『ほんと、ほんと、ここのところ毎度毎度つじうじ悩んじやってどーしたのかしらね』

俺の中から声が　またいきなりだなオマエは。

「む、『審判』いきなりですね。というかシロウの中から声を出すとはまた卦体な・・・」

って、セイバー聞こえるの？

『はい、セイバー久しぶり、ってこの場合は言つのかしら？この

度外部出力機能が追加されたからお知らせに来たの』

新要素追加でますます理解不能のわんだほーくりーちゃーよエミヤクン、などと抜かすこの魔女を誰か黙らせてくれないだろうか、というか黙ってください、俺の中から別の人間、しかも女性の声がすると怪奇現象以外の何者でもない。

「全く、色々と言いたいことがありますが・・・『審判』、そんなことを言うためにこのタイミングで出てきたわけではないのでしょう?。」

セイバーがやれやれ、と呟く。

その程度の反応でいいのか?コレ、かなり不気味だと思うんだけど・・・。

『ほんと、セイバーは誰かさんと違って話の腰を折らないでくれるから助かるわね』

悪かったな、どうせ俺は本筋とは関係ないものにばかり目が行く男だよ。

『さて、まあ本当はセイバーが言おうとしていた事と変わらないから、わざわざ私が出るなんて無粋かなとは思ったのよ。だけど、セイバーってば優しいから少し私からも、と思っただけ』

む、凄く厭な予感がするので遠慮したいのだが……。

『さて、エミヤクン……私は、『私達』は貴方の昔なんて知らない。だから、私達が知っている範囲で言わせて貰うわね』

やれやれ、こんなことまで言ってあげないといけないのかしら、とかぼやきながら魔女は、

『貴方は、少なからず『大戦』の時に、私達の争いを止めようとした貴方はそんなじゃなかったでしょう。シャッキリなさいな』

そう言うのだった。

『大戦』、人類と亜麗百種という新たなヒトとの戦い。
その中でお前は何をしたのか思い出せ、とそんなことを

『只管に闇雲に争いの中突っ込んできたじゃない』

「そうですね、がむしゃらでしたね。それこそ、何か逡巡しているような所は見受けられませんでした」

『最初こそ私もね、いきなり割って入ってきて戦いを止めようとするなんて無駄なことを、とか思っただのよ』

「ええ、そうですね。とにかく最初は『偽善者』だの『何がしたいんだ』だの『どっちの味方だ』だの散々に言われましたね」

俺を無視して話が弾む二人、

『それが変わったのはいつだったかしら』

「そうですね、途中から我々も大分感情的になっていましたから」

そくだ、今までに無いくらい凄惨で、どうしようもない泥沼だったからだろうか、俺も長い時間生きて大分緩んでたからだろうか、

『そうそう、叫びだしたのよねー戦場のど真ん中で自分の想いを^{リッウ}』

うわ、やめてくれ、あの時はどうかしていたのだ。

「あれは貴方を騎士の刃から救ったときだったでしょうか」

『そうね、確か助けてもらったのに『私を助けるなんて馬鹿みたい、ほんと貴方がしたいの』とか言ったら』

そう、確かそういわれて頭にきて言ってしまったのだ。
こう、なんていうかぶちつときてしまったのだ。

『ふふ・・・そしたら、「馬鹿で何が悪い、俺は皆が幸せな未来が欲しいんだ」だもの。あれ程啞然とした事はないわ』

うわあ、やめてくれ、恥ずかしさで死んでしまいそうだ。
そう、あんまりにも頭に來たから言ってしまったのだ、叫んでしまったのだ、俺の想いを^{リソウ}恥ずかしげも無く声高に・・・。

「ほんとつにあの時の勢いは凄まじかったですね。「もう頭にきた、こうなったら全員ぶちのめして話を聞いてもらうからな!」とか、あまりの突き抜け方に流石の私も啞然としました」

あーあーあーあー、聞きたくない、聞きたくないぞ。

『その後は凄かったわよね、何処だろうと戦いに割り込んできてが

「と叫びながら吹き飛ばしていくんだもの。今までのイメージが吹っ飛んでいったわ」

「ええ、私も驚きました。人に理解を求めず己が道を行くその在り方を何とかして欲しいと願い、長い年月をかけて僅かずつ変化があったと思っていたらアレでしたから」

ああ、本当にどうかしてたんだ。

本来なら自身の内に確かにあって他に言っただけ聞かせるようなモノじゃないのに、それを声高に叫ぶなんてほんとうにどうかしてたんだ。

「それは違うでしょう。シロウ、貴方のそれは確かに己が内^想に秘め邁進するその在り様は尊いものだ。しかし理解してもらおうとしない在り方は悲しすぎます。大体、貴方は私と再会した時点でそれを貫き通したのです。だから王の責務を果たし終えた私と共にその肩の荷を少し降ろして身軽になればよかったものを・・・」

「そうよ、行動でわかるけどやっぱりちゃんと言葉にしないとね。そのお陰で劇的に変わったでしょ」

ああ、変わったさ・・・それまで『偽善者』とか言われ怨讐だの悲嘆だの嘲笑だの侮蔑だのばかりだった声が、いつの間にか少なくなっていくって、入れ替わりに

『ああ、また馬鹿が来た。ってなったのよねー』

「凄まじかったですね、アレは・・・」またぞろ馬鹿が来たぞ叩き出せ」だの「何をしにきやがったこの馬鹿が」だの「お呼びじゃねえんだよこの馬鹿が」などと、子供の喧嘩かと」

『そうそう、またそれにムキになって叫ぶんだもの傑作だったわ』

そうなのだ、今まで溜め込んでいたものをぶちまけるかのように意地になって叫んだのだ。

馬鹿で何が悪い、この想い^{シンウ}に間違いなんてあるものか、と。

『ま、一番傑作なのはその馬鹿馬鹿罵倒していた連中が揃いも揃って気が付いたら共に居たってことよね』

私も含めてね、と魔女が楽しそうに笑う。

『ほんと、たいした感染力よねエミヤ菌。潜伏期間・・・熟成期間かしら？云千年の威力を見た、といった所かしら』

「ほんとうに長すぎる熟成期間でした」

うんうん、と二人して感慨深げに頷きやがって……俺はもう穴を掘って埋まりたい気分だよ。

『全く、まだそんなこと言ってるのエミヤクン』

仕方ないわねーとか呟いて、

『そんな貴方に伝言、皆の意見を代表して貴方を一番馬鹿呼ばわりした騎士様からよ』

次はなんだ、伝言じゃなくてトドメだろう。

『其の様はなんだ馬鹿め。貴様は馬鹿なのだから馬鹿らしく馬鹿なまま馬鹿をやればいいだけだろうが馬鹿め。貴様のような馬鹿がいくら考えたところで行き着く先は馬鹿以外ないのだから下らんことを考える前に馬鹿をやる作業に戻ってその馬鹿を貫いたらどうだこの馬鹿が。我等がなんの為に貴様のような馬鹿と共に在ると思っているのだ』

俺達がお前の馬鹿をカチに^{理想}してやるためだろうが！

ばさっとしていると置いていくぞ馬鹿め』

効いた、ホントにトドメだ。

一体伝言に何回馬鹿を入れれば気が済むんだあのヤロウ、くそ

馬鹿はお前等だ、覚えてろよ

「ふふふ・・・全く、あの騎士らしいですね」

『全くよね、伝えるこっちが馬鹿が何回入ってるのかで混乱しそうだったわ』

ま、伝えることは伝えたし今日のところはもう戻るわね、なんて言
って魔女の声は消えていった。

俺はその間ずっと空を睨んで歯を食いしばっていた。

くそ、くそ、くそ、太陽が眩しくて視界が滲むし、歯を食いしばっ
ても口元が緩むのが押さえきれない。

なんだってんだちくしょうめ、どいつもこいつも馬鹿ばかりだ。

そんな俺がおかしくてたまらないって感じで見ているセイバーを隣
に、暫く俺は空を見上げていた。

がちん、と歯車が動き出す音がする。

その晩、俺は何か胸騒ぎがして門の上に立ち街を眺めていた。

何かが来る、そんな予感がある。

午前一時が過ぎた　　来た。

地表から数百メートル、突如赤い外套の男が現れ堕ちていく。

顔は見えなかったが間違いない。

サーヴァント　アーチャー。

キャスターが言うには今まで召喚されているのは五騎、よってこれ
で残りは一騎、セイバーのみ。

俺にとっての運命の夜まであと僅か。

第八話（後書き）

休みを使って何をやっているか私。

色々突っ込みどころ満載、今更なので構わずぼちっとなー。

さて、おいでませアーチャー、おいでませ本編の時間軸、次からは諸々の事情により更新ペースが遅くなるやもしれませぬ。

文章量増やす云々ですが、お盆時期はワタクシの職場は繁忙期なので休みなどないのであった、まる。

以上、お察しください。

幕間？

夢を見た。

運命と出会う夢、出会いと別れのみ鮮烈な、その他は継ぎ接ぎだらけの磨耗した夢。

夢を見た。

その出会いと別れから星に手を伸ばして歩き出した青年、その姿を遠くから見ただけの夢。

夢を見た。

夢を見た。

夢を見た。

その道をただひたすらに歩き続けるその姿を、見ることしか出来ない夢。

夢を見た。

夢を見た。

夢を見た。

夢でしかその青年の姿を見ることが出来なかった彼女が、夢から醒

める夢。

結局最後まで、道を違える事が出来なかったその青年が、彼女の郷に辿り着く夢。

夢を見た。

夢を見た。

夢を見た。

夢を見た。

長い長い御伽噺のエピローグ、再び出会った二人の幸せな夢。

夢を見た。

夢を見た。

夢を

「　　っ　　い　　い　　っ　　加減にしなさいよ・・・・・・・・!!」

キャスターは怨嗟の唸り声と共に目覚めた。

「はあ、あ」

今朝の夢を思い出して私は溜息をついた。

時間は既に午後3時過ぎ、私は自身の工房で最近の日課となっている作業を行っているのだが、

「む、どうしたのですキャスター溜息などついて。まさか昨夜の戦いの事で何か気にかかることでも？」

そんな私に魔方陣の中心に座り瞑想を行っているセイバーから声がかかる。

「いえ、そうじゃないわ。バーサーカーに境内に侵入されたのも、戦いであそこまで破壊されたのも別に大した痛手ではないわ」

あんたの夢を見たせいよ、などと言ってしまいたいが言ってもならない。

セイバーは私の言葉を聞くとそうですか、とだけ言っただけで目を瞑り再び沈黙する。

私も自身の作業へと戻るとしよう。

私のここ最近の日課、目の前の少女という『炉』から生み出される莫大なエネルギーを魔力に変換して蓄えるという作業に。

セイバー、実質的にはこの聖杯戦争では未だセイバーのサーヴァントは召喚されたことになっていない。

目の前のこの少女は私がイレギュラーで召喚した二人の『生身』のサーヴァントのうちの一人だ。

もう一人は現在この山の頂で黄昏ているらしいがどうでもいい。

いや、どうでもいいというにはアレは、あの坊やは規格外に過ぎるが、今は置いておく。

それよりも目の前のセイバーだ。

ここ何日も見ているが、全く以って出鱈目もいいところだ。

人の身ながら竜種の因子を持って生まれたとの事だが・・・魔力の総量が私の遙か上に行く。

この魔術師のサーヴァントである私を超える魔力、それもただそこで息をしているだけで魔力を生み出し、その魔力が自身の総量を超えて溢れ出している。

しかも、生成しているのが魔力だけではない。

なんでも、もう一人の坊やが持つ『魔剣』とは違う力が新たに備わったお陰だという話だったが・・・。

とにかく、目の前の少女はそこに在るだけで様々なモノを取り込み有象無象のエネルギーを生み出す生きた『炉』なのだ。

その気になれば周りの物全てをエネルギーに変換する器官、そしてそれを出力することの出来る端子、これで本来の出力ではないとは・

・ ・ 一体彼女達の言う『世界』とやらはどんな化物の巣窟だったのだろうか。

とにかく、私が今やっているのは彼女という核融合炉から放出されるエネルギーを魔力に変換し蓄える作業だ。

ここ最近では街からの魔力の収奪は殆ど行っていない。

行っている手間が勿体無い。

そんなことをするのなら、目の前の『炉』から流れ出るエネルギーを制御し、蓄えた方がよほど効率が良い。

尤も、その『炉』を効率よく稼働させるための燃料として多少は汲み上げているのだが、以前と比べれば天と地の差だ。

以前ならば昏倒する人間なども出ただろう、実際ガス漏れとして処理されているがそうになっていた。

しかし、今は精々が疲れやすい、程度になっている筈だ。

私は別に、この二人に説得されたからでも情に絆されたからでもなく、魔術師として効率を優先してこの手法を取っているのだ。

しかし、最近ではそれ以外の理由でこれで良かったと思う自分が居る。

「我ながら、随分と甘いわね」

一人呟く。

いや、むしろ先日までが少し度が過ぎていたのだろうか？

様々な考えが浮んでは消える。

作業の手は滞りなく、私は召喚されてからの日々を思い返していた。

私は魔女という呼ばれ方を好まない。

私を知る人間が聞けば笑うか眉を顰めるだろう。

私自身そうだ。

しかし、私は魔女などと呼ばれたくてあのようなことをしてきたわけではない。

ただ、幸せになりたかっただけなのに。

だが、いつしかそれに見切りをつけ、周りが望むような魔女に成り果てて、しかし諦めきれなかったのだろう。

この聖杯戦争にサーヴァントとして召喚されたのだ。

しかし、召喚した男は実に下らない男だった。

数日で見切りをつけ、令呪を様々な手で使い切らせ最後には破戒^ルすべき全ての荷によって契約を破棄し、殺す 筈だった。

それは僅かばかりの抵抗だったのかもしれない。

裏切りの魔女などと呼ばれ裏切った相手を殺め続けた自身に対するささやかな抵抗。

腕こそ使い物にならなくなったが、記憶を弄り聖杯戦争の間は何も出来ないようにしただけでその男を放置し、飛び出した。

だが、すぐにそれは後悔へと変わった。

マスターだった男は保険のつもりだったのだろう、私へ供給する魔力を最低限に絞っていた。

すぐに魔力がつき、返り血を浴びた姿のまま雨の中で動けなくなっ

た。

おかしかった。

何がささやかな抵抗だ、結局裏切りという結果で幕を閉じるのではないか。

おかしかった。

まさにそれにふさわしい返り血に汚れたこの姿が、雨にさらされ動けず今にも消えそうな惨めなこの身が。

そうして、何も成せぬまま結局は裏切りの魔女という何時もどおりの結末のまま消えていくはずだった。

しかし、私は出会ったのだ。

出会った瞬間は覚えていない。

気が付くと私は寺社の中に寝かされていた。

目の前には私をここまで運んだと思しき男が居た。

迷惑ならば事情は聞かぬ、忘れるというならば忘れよう、そう言った男に私は契約を願い出た。

藁にも縋るとはああいう思いなのだろう、事情も知らぬ出会ったばかりの男にそのような事を言うなど・・・。

何処からどう見ても一般人である男が、行き倒れていた所を助けた怪しい女にいきなり契約だのマスターだの聖杯戦争だの言われて、はいそうですかなどと納得するはずがない。

だが、その男は私の言う事を否定も疑問も何も言わずに全てを受け入れ、聖杯を捧げるといった私の言葉に

「……対価はいらん。だが、助力を必要とされるのであれば応じよう。」

と、そんな事と『葛木宗一郎』という名だけを口にしたのだ。

そして、私はあの人と契りを交わした。
宗一郎

契約を終え、柳洞寺という最高の霊地を拠点として手に入れた私だったが、それから戸惑うばかりだった。

新たなマスターであるあの方は、本当に何の見返りも望まなかったのだ。

助力が必要ならば言うといい、とだけ私に言うと、あの方はそのまま日常を廻し続けたのだ。

私は戸惑った。

見返りなど求めない、などと言いつつもきつと何かしら望みがあるはずだと、そしてそれがまた私を失望させるのだらうと。

きつと上手くごまかしているだけだと、この男も今までの下らない男達のように私を利用し捨てていくのだと。

今は都合よく動いているから放置しているが、そのような考えが見えればすぐにその意識を刈り取り傀儡にしておうと。

だが、あの方は何も望まなかった。

私がおかをして欲しいと言えば、その通りにしてくれたがそれ以外では私に対して本当に何もしてこなかった。

ただただ変わらない日常を廻し続ける。

機械の様に変わらずに、黙々と、それ以外望むものがないかのよう
に廻し続ける。

私は、どうしたらいいのかわからなくなった。

何のことはない、私は、そうであって欲しいと願いながらも裏切られ、そして裏切るという前提でしかものを見ることが出来なくなっていたのだから。

笑ってしまう、そうであればどんなにいいかなどと思いながら、そうだった時どうするかという考えは、私の中に一つも存在しなかったのだ。

戸惑う私を尻目に、あの人は変わらず日常を廻し続ける。

その背中を見ながら、私は自分の願いがわからなくなった。

私の戸惑いは焦りに変わっていった。

いつの間にか、あの人に何かを望んで欲しいと思うようになった。

私は始めて自分の意思で、人に何かをしてあげたいと、そう思うようになった。

しかし、あの人は私が望むことを叶えようとするだけ、私はあの人の望みを叶えたい。

自身の願望がなく、サーヴァントの願いを叶えようとするマスターとマスターの望みを叶えたいと願うサーヴァント。

その齟齬に私は歯噛みした。

本当に望みはないのかと問うてあの人に本当に何も無いことを恐れ、自身の望みもわからなくなっていた私は、考え抜いた末に

本来のサーヴァントとしての役目どおり聖杯を手に入れることとしたのだ。

今は望みがなくても、目の前に万能の願望器たる聖杯が現れればきつと、きつとあの人も何か望みを

そんなことは決してないと、そんな事を理解しながらも私はそう考えること以外できなかった。

それから私は、柳桐寺を自分の神殿とし、街中の人々から生命力を吸い上げはじめた。

今までは復讐など以外では決して自身の意思で人々を害したことなくあったのに。

そんな一線をたやすく踏み越え、それでも死者を出さないようにしたのは、やはりそれでも踏み越えられない最後の一線があったのだろうか。

それでも死なないというだけだ。

街中で起こる原因不明の昏倒による事故、それでも私は走った、聖杯を手に入れるという終局へ。

そう、手に入れてしまえば終わってしまう。

破綻へと向かっている、そうわかっているのに、そうするしかない、としか考えられずに・・・。

そうして街中から力を集め、遂にはサーヴァントの身でありながらサーヴァントの召喚というルール違反にまで手を出した。

そのルール違反のツケは、とんでもないカタチで降って来た。

そう、文字通り降って来たのだ。

途轍もない存在感を、力を誇示しながら、私の目の前にその二人は上空から降って来た。

とんでもないものと呼んでしまった。

それからは混乱する思考の中、二人のうちの外見は16〜17歳程の青年と会話をしながら目の前の存在をどうするのか必死に模索した。

まるで現状を把握していないのほほんとした態度とは裏腹にこちらの術式を全て適当に無効化しているその力。

戦慄し、そしてその緊張感のなさに侮られているという苛立ちが混じり冷静な判断が出来なくなった。

そして『魔女』と呼ばれ遂に限界に達した私は、もう一人の少女の声で我に返った。

目を奪われた。

美しい少女だった。

兎に角美しかった。

その姿もだが在り様が、清楚で、自信と気品に満ち溢れ、眩いばかりの光を放つまるで御伽噺のような少女。

まるで自分とは正反对で、酷く惨めで、酷く妬ましく、そして眩しかった。

お陰で、先程までの怒りは消え去って、けれどそれとは別にやはり冷静ではいらなかった。

そのせいだろう、何の策も弄さずに自身の工房に二人を招き入れてしまったのは。

そして、目の前の二人が予想通り私のサーヴァントであること、セイバー 厳密にはセイバーのクラスではないようだが、とエミヤ シロウという名前、そして未来の平行世界であろう場所からやって来た英霊ですらない、生身存在であることを告げられた。

続けて、彼女達が辿って来た道程を、これからあるかもしれない『未来』の話が聞かされた。

信じられなかった。

長く、そして壮大な、そして御伽噺のような話だった。

信じられなかった。

全て聞き終えて、気付いてしまった。

壮大な惚気を延々と聞かされていたということに。

そしてあまりの妬ましさに、今持ち得る最大出力を叩き込んだ。

そう、妬ましかったのだ。

そう、私は

目の前の二人が心底羨ましいと思ってしまったのだ。

私は自身の願いに気付かされてしまった。

私もあの人とそうありたいと、永遠などは望まないけれど、あの人と共に在りたいと。

そう願っているのだと、目の前の二人に気付かされた、気付いてしまった。

なんということだろう。

既に私の願いは、叶っていたのだ。

ふう、と一息ついて私は思考の海から浮かび上がる。
そう、あれから私は目の前の少女と、現在は山の頂で黄昏ているらしい阿呆と正式に契約を結んだのだった。

しかし、それだけで私が、この私が一緒に頑張りましょう、などというような素直な女なわけがない。

二人の言うことが全て真実だという保障もなく、当然私は様々な状況を想定して手を打った・・・打っていた・・・のだが、

「そこであの夢、だものね。いやんなっちゃうわ」

そう、あの話をセイバーの記憶を夢に見た。

全く以って腹立たしく長い夢だ。

長い長い旅路の果ての大団円、その甘ったるい続きを延々見せ付けられ、蛇足もいい所だと思ったら更なる蛇足が始まり、拳句その蛇足を更なる大団円にした拳句に今に至るだなんて・・・。

「ほんと、荒唐無稽もここまで来ると言葉もないわね」

しかし、その夢でまた私は気付かされてしまった。

結局、私は心温まる結末を、幸せな結末を望みながら、その思考は悲観的な方へと、絶望的な方向へとしか向かなくなっているということに。

幸せを望みながら、その幸せにどうしようもない胡散臭さを感じて、結局は悲劇に突き落とされて「やっぱりね」などと言いながらその物語に決着をつけてしまう。

そして「幸せな物語」に憧れながらもそれに見切りをつけて、青白い馬に乗って病原菌を撒き散らす側に回ったのが私だったのだ。でも、結局諦め切れなくてここにいるのではなかったか。

結局のところ私は、運命とやらに流され、振り回されるままに『魔女』などと言われてしまったのではなかったか。

物語というものは、放って置けば総じて悪い方向に流れていく。理に適った展開などというものを積み上げていけば、結局その流れから抜け出すことは出来ない。

それを覆すには、条理を捻じ曲げ、黒を白だと言い張ってでも宇宙を、世界をひっくり返す程の力が、思いが必要とされるのではないだろうか。

この夢のように。

だったら、私はなんだ。

このままの私では、私のシナリオはまた理に適った展開を積み上げた悲劇の物語でしかないのではないか。

「ああ、やっぱりね」と呟いて、あの人を私自身を悲劇の淵へ叩き込んで決着をつけてしまうのではないか。

冗談ではない。

理に適っていなくてもいい。

荒唐無稽でも構わない。

私は、幸せな結末が見たいのだ。

目の前で、こんな荒唐無稽で腹立たしいハッピーエンドを続けるお馬鹿が二人いるのだ。

力技で、世界に逆らってまで人間讃歌を謳い上げ、馬鹿をとことん貫いたお馬鹿が居るのだ。

こんな連中に惚気られっぱなしで、それを眩しそうに眺めながら奈落の底など業腹ものだ。

引き摺られようがようが、便乗だろつが構うものか。
運命だろつがなんだろつがくそくらえだ。

「私は、ぜつつつたいに、幸せを掴んでやるわ……!!」

そうだ、バッドエンドなどもう沢山だ。

私らしからぬ？知ったことが。

例えば穴倉を決め込んで戦いすらせずに成果を得ようとも、それがどうしたというのだ。

そう、

それがどうした。

「ふう、今日はここまでで宜しいでしょうかキヤス　ター？な、何かなんとも形容しがたい凄まじい念を放っていますけどどうしたのです」

セイバーが何か言っているが、今の私は何もない空間を睨みつけながら自身の覚悟を想いを燃え上がらせる事に夢中なのであった。

幕間？（後書き）

やっつと f a t e 本編の時間軸ですよーとか思ったのに何書いているのでしょうか私は。そしていい加減に感想に返事を書きなさいこのヘタレ、ひひいごめんなさい恐れ多くて返答できなかったのです。というわけで今までのあまりにも今更なんで返事しませんが次からちゃんと感想に返信しますので平にご容赦を・・・。

あ、文章量も次から増やす予定なのでご容赦を。（更新にかかる時間もその分増えますがご容赦を）

第九話

二月一日

アーチャーの召喚を確認した後、朝を迎えるまでの間、俺はずっとあの赤い背中を思い出していた。

『ならば、せめてイメージしろ。現実では敵わない相手ならば、想像の中で勝て。』

自身が勝てないのなら、勝てるモノを幻想しろ。

所詮。おまえに出来る事など、それぐらいしかないのだから』

思い出す。

いや、これは思い出すまでもなく俺の中に残った言葉だ。

あの背中とあの言葉、もう殆ど覚えていない聖杯戦争の記憶の中でも確かにエミヤシロウの中に残ったその情景。

忘れるな、と。

アイツの言っていることは、決して忘れてはならない事だと、誰より俺自身が思っていたのだ。

殆ど言葉を交わすことなく、何者かもわからなかった。

だが、今度はわかるかもしれない。

あれ程の距離で一目見ただけで自分にとってアイツは無視できない何かを持っていると、そんな予感がある。

そこで思い出す。

『誰が何をしようと、救われぬ者というのは確固として存在する。

人間に出来ることなどあまりにも少ない。

それでも

』

「・・・それでも。一度も振り返らず、その理想を追っていけるか、
か」

ほんの数度しか交わしていない言葉全てが無視できない重要なものだった。

いや、ほんと、気に食わないところも含めてつくづく全てが無視できない奴だったな。

本当に、何者だったのだろうか。

『　　いいか。お前は戦うものではなく、生み出す者に過ぎん。

余分なことなど考えるな。お前に出来ることは一つだけだろう。ならば、その一つを極めてみる。

忘れるな。イメージするものは常に最強の自分自身だ。外敵などいらぬ。

お前にとって戦う相手とは、自身のイメージに他ならない。』

いつか見た、遠い背中を思い出す。

さて、今の俺はアイツにどう見えるのだろうか。

審査委員の採点を待つ競技者というのはこっぴどい気持ちなのだろうか。

しかし、なんだかアイツの顔色を伺っているみたいな表現で癪に障るな。

だが、確かにアイツは俺を、エミヤシロウという男を形作った根元にある存在の一つであることは間違いない。

というわけで、あれから俺が積み上げて来たもの、得て来たものを胸を張って見せ付けるとしよう。

まあ、敵としてまみえる事が無いのが一番理想なんだろうけれど・

・さてどうなることやら。

なんて事を考えていたのは朝方まで、現在俺はこっちに来て初めて円蔵山の外へ出ているのであった。

今までは様々な理由があって昼間であっても外出を控えていたのだ

が、ようやくキャスターから許可が下りたのだ。

何故許可が下りなかったかと言うとだ・・・いやあ、人外の異形が飛び交い数十キロ級の化物が襲来する日常からいきなりここに来た俺達は・・・その、なんというか、はつきり言って常識がまるでなかったのであった。

呼び出された数日後に「ちよつと街の様子を見てくる」等と言って護身用として普通に魔剣を顕現させて出て行こうとした俺を慌てて引き止めるキャスター神話の登場人物という実にシニールな光景が展開されたのは内緒だ。

どうもセイバーの方は聖杯から現代の知識とやらを汲み上げることが出来たとか何とかである程度は弁えて行動できるらしい、とのことだが俺にはさっぱりなのであった。

まあ、それ以外にもよくよく考えるとここにはこの時代、この世界の『エミヤシロウ』が居る訳で、何も対策をせずにくろつきまわるのはいただけない。

と言った訳で、その為の対策の時間が必要だったので今日まで外出ができなかったのである。

その対策というと、もちろんこの世界での常識に関する事と、俺という存在を目立たなくする為の細工を少々、とのことらしい。

自分では全然わからないのだが、俺は居るだけで『非常に目立つ』らしい。

それこそ見た目に全く関係なく存在感が異常だとかなんだとか・・・。

異常だとか言われるのが日常であり平常なエミヤシロウの証明みたいなものだからそんなこと言われても、とか思っただけで凄く悲しくなったが。

なんでも、存在感が異常すぎて一般人にすら感じ取れるらしい。

例えるとそこに居るだけで何十人、何百人もの人間がそこに居る様に感じられ、俺に見られるとそれだけで大勢の観衆に注目された舞台の上に居るような緊張感があるとか。

そら目立つわ。

一般人でそれだったら、そして普通に生きててそれであつたら殺氣、とまで行かないでも怒氣とか放つて睨んだらどうなってしまうのやら、考えただけで頭が痛くなった。

「頭が痛いのはこっちよ。ここまで行ったら魔眼の域よ、この化物」

はあ、化物に化物なんていうのはなんて不毛なのかしら、馬鹿に馬鹿って言っぐらい不毛よ、などと言つた拳句に更に溜息をついたキヤスターを思い出しながら溜息をつく。

溜息をつくと幸せが逃げるというが、逃げた幸せは誰か別の人の所に行くのだろうか、それだったら別にいいよな等としようもない事を考えて現実逃避をしてしまう俺だった。

で、そんなこんなで文句を言いつつもキヤスターはそれを何とかするためにわざわざ道具をこさえてくれた。

流石は神域の魔術師、道具作成スキルAは伊達ではないのだった。と言う訳で俺はその道具、眼鏡にネックレスにリストバンドっぽい腕輪に指輪になにやら様々な読めない文字が縫いこんであるベルトに足にも腕同様のバンドをして

多いわ。

なんなのだろうがこの多さ、拳句服にも、そして靴にまで何か仕込んでほしいし、一体何事なのだろうか・・・いや俺のせいなんけどさ・・・。

ともかく、この物々しい礼装どものお陰で、ようやく俺も一般人並・

・・・の・・・存在感・・・で、魔術師にもそうそう気取られることも・・・ない、らし、い・・・。

悲しくなんて無いぞ。

とにかく、とにかくこれで心置きなく故郷の街を見て回ることが出来るわけで、俺は心弾ませて街を隅から隅まで散策していたのだが

なんなのだろうが、人気の無い場所できなり足元に絡み付いたこの鎖らしきものは。

瞬間、『フィッシュ』とかいう言葉と赤い布を幻視して、俺は釣り上げられて宙を舞った。

この幻視二度目だぞ。

そして俺は顔面から地面と濃厚な接触をぶちかましたのだった。

うがああ、眼鏡が、眼鏡は無事だがってか傷一つ歪み一つないっつ

「かあんだけ派手に釣り上げられたのにズレてすらいないってのは
どういうことだ呪いの装備かいやいやそんなことはいいんだがつま
り顔面から突っ込んで傷一つ無い眼鏡は俺の顔にめり込むわけであ
るからめり込んだわけ、」

「目があ、眼があああああ！！」

「ざまあないわね、というキャスターの呟きが聞こえた気がした。
おのれ、3分すらも待ってやらないぞ今すぐ文句を、ああああ兎に
角眼が目尻が、めりめりつとか言ったぞちくしょうなんだってんだ。
未だかつて無い感覚の痛みを味わいつつのだ打ち回る俺だった。
そんな俺に、」

「ふん、徒ならぬ気配を感じてこの我自ら赴き、さらに手ずから呼
び寄せてやったというのに……なんだその貧相な面とその様は、
まるで塵コニだな」

「蔑むようなそんな声が掛けられる。
なんだってんだよちくしょう、きつとこのタイミングで声がかかる
って事はコイツが下手人だな。」

「この我を前にして思わず頭を下げ頭を地に擦り付け平伏するのは弁
えた態度だと褒めてやろう。だが 面を上げる戯け、いつまでそ
うしているつもりだ。」

ほんとになんなんだよ全く・・・痛みを堪えて顔を上げるとそこには、

「ふん、ようやく面を上げたか　やはり貧相な面だな、我とした事が見誤ったか？」

腕を組みこちらをつまらなさ気に見下す金髪に真紅の眼、身長は180ぐらいだろうか、黒いライダースーツの男が居た。
なんだろう、何処かで会ったことがあるような気がするんだが・・・
この手の唯我独尊オレ様系っぽいのは心当たりが多すぎてわからないぞ。

「えーっと・・・どちらさまでしょうか？」

と言う訳で聞いてみる。

「貴様にそのような問いかけを行う資格があるとも思つか？まず
は私の質疑に応じるのが筋であろうが」

睨まれた、そしてにべも無かった。

駄目だ、経験上こういうのにはこっちから何か言っても意味が無い気がする。

というわけであっちに勝手に喋ってもらうが吉と見た。

黙り込んだ俺の態度を肯定と見たのか目の前の金髪・・・なんか金ぴかって気がする黒装束だが・・・というわけでその金ぴかはようやくか、この我に時間を浪費させるとは度し難い阿呆だなどかなんとか言いながら、

「貴様、何者だ」

そんな言葉を、ってまたか、またなのか、どいつもコイツも人を捕まえてそれしか言うことは無いのか、ないんだろうなきつと。というわけで、思わず

「深く考えずに見たまま、在りのままを受け止めればいいと思うぞ」

やつちまった。

いきなり初っ端から思わず言ってしまった。

この手の輩に一番やつてはならないだろう事を、きつと呆れるか、いやきつと激怒するな。

とか思っていたら、

「ふむ、確かにこの我の眼に間違いなどあるはずも無い。貴様自身が語る言葉など比ぶべくも無く、我が見、そして判断した事は絶対である。褒めてやろう、確かに貴様の言う事は尤もだ」

なんだかよくわからない解釈をされた拳句に褒められてしまった。

うむ、と何やら先程までの刺々しさが若干和らいで少し機嫌よさ気である。

むしろ俺のほうかなにものだと問いたくなって来たぞ、ひょっとしてこいつ結構な大人物なのではなからうか。

そんな俺の眼差しなど意に介した様子も無く、うむうむとか一人納得していた金ぴかだったが再び俺に視線を戻す。

「確かに私の判断に間違いはない、が故に解せん。この我を以ってしても図りきれない器、いや 底は浅い、そして容も歪なほど真っ直ぐで恐ろしくわかり易い。それだけならば我にとって見るべき価値も無いつまらんものだ。だがその広さ、地平線と言うべきか水平線というべきか、とにかくその全容が我にも見えん。挙句にその中に何を飼っている？器もそうだが中身も異様だ、おぞましい程に混沌としている。故に問うている 小僧、貴様何者だ」

この我にこの様な問いを受けることなぞ滅多にあるものではない、光栄に思うが良い、などと言うその赤い双眸に私の知らぬものなど認めぬ、と殺気とも好奇心とも取れる壮絶な彩が宿り俺を射抜く。その視線、全てを見通し、暴くような、貪欲でそれでいて真摯な

ほんとうによくわからない、今まで受けた事の無いものだ。

普通は訝しげというかおっかなびくりというか、胡散臭げというか、とにかく否定しにかかると言うか突き放すような、距離を置くような聞き方しかされなかったのだが・・・目の前のコイツは興味津々、全てを暴いてくれる、貴様が何を言おうと我が判断してくれよう、真贋は自身が決めるといった感じだ。

凄いな、なんなんだろうこの男は。

こいつになら恐らく何を言っても「理解できない」などという言葉は出てこない、そんな気がする。

同時に、嘘も通じはしないだろうな・・・こいつは間違いなく物事の真贋を見極める事が出来る、と何故だかそう確信できる。
いやはや、ほんとうにコイツは大物だぞ、俺も俄然興味が沸いて来た。
だから、

「ああ　俺は」

俺の話す荒唐無稽な真実とやらを聞いてコイツがどんな顔をするのか見てみたくなった。

「俺達は」

さて、随分と長い話になってしまった。

こっちに来てから自分からベラベラと喋る事が多くなったもんだ。しかし、まさか最初から最後まで話す事になるうとは・・・あまりの荒唐無稽さに目の前のコイツは我慢ならなくなるかも、とか思っていたのだが。

途中途中でちらちらと様子を伺う俺に「何をしている、さっさと続きを話せ」などと言って興味津々といった感じで催促してくるものだからついつい全部話して・・・って今更ながら話してよかったのだろうか？

コイツが何者かとかさっぱりわかってないというのに・・・。
で、その話を全部聞き終えた正体不明の金ぴかかというと、

「クク…フハハハハ！！なんだそれは、星の終焉だと？しかもそれでなお、その死した星にしがみつき生を謳歌するだど！？最早人間ですらなくなり、化け物となりながら神も精霊も死に果てたであろうその大地で　なんだその生き汚さは！おぞましいにも程があるう、貴様この我を笑い死にさせるつもりか！」

何がツボに入っただのかわからないが腹を抱えて哄笑していた。

なんだらう、普通ならこんな話で大笑いとかされれば腹も立つものなんだが・・・不思議とそんな厭な感じがしない。

目の前のこの男は、そんな俺たちの生き汚さを心底罵りながら、嫌

悪しながら、嘲りながら、そして滅んでしまった星を悼みながら、それでも　そこまでやったのならむしろ天晴れと、そう言っている気がしたから。

で、一頻りそんな俺たちの生き汚さを笑い続けた後、コイツは再び俺を見据え、

「しかも、そのおぞましさもさることながら『正義の味方』だと？『誰も傷つかない世界』だと？おかしい事を言うものだ」

その瞳に強く嘲りの彩を宿しながら語りだした。

誰も傷つかず幸福を保つ世界などない。

人間はとは犠牲がなくては生を謳歌できぬ獣であり、平等という奇麗事は、闇を直視できぬ弱者の戯言にすぎない。

お前の理想とやらは、醜さを覆い隠すだけの言い訳にすぎない。

そう言いながらその瞳に殺意が漲る。

そんな偽善、そんな妄言など吐き気がする、と言わんばかりだ。しかし、

「だが、それでも貴様は　」

その視線がそれ以外のものを混ぜて鋭さを増す。

その言葉に、その視線に俺は真っ直ぐに向かい合って、

「 ああ、その理想を張り通す」

胸を張って、これまでもそしてこれからもそうするだけだと、そう言い切った。

「 ふん、成る程な」

胸を張ってそう言い切った俺の眼をじっと見据えていたその男はそ

う言つとにやり、と口の端を歪める。

「いや、実に興味深い　いや、度し難いと言つべきか？人の身どころか何者ですら成し得ぬ理想、最後には抱いた貴様自身を焼き尽くしたであろうソレを、本来ならば迎えたであろうその終局を超えてその内に抱き続けるとはな」

先程までの殺気やらなんやはいつの間にか引つ込んで、今度はひたすらに禍々しい笑みだ。

禍々しいんだが、寒気すらするんだが、なんだか凄く持ち上げられている気分になるのは何故だろう。

「いや、分不相応な宝具モノを貰っちゃまってさ。きっとそのお陰だろ」

無性に否定したくなつたのでそう言ってみたのだが、

「戯け、如何に比類なき宝具を所有したところでそれだけでそのよザマうな様になるとでも思つたか」

即否定されてしまった。

「あらゆる物理干渉や魔法すらも遮断し、傷や病、老化をも癒す結界宝具だと？ふん、だからと言って貴様の魂が朽ちれば如何な宝具

とて補いきれるものではない。いいか

人というものはな年齢を重ねるから老いるのではない。理想をなくした時老いるのだ。

貴様がその姿であるのは確かにその類い稀なる宝具によるものが大きかったやも知れん。だがな、それだけではないだろうよ。如何に比類なき力を持つとが所詮は物でしかない。魂は、理想は、時と共に磨耗し擦り切れていくものだ。不変など、永遠など存在しない。いつかはその根本すら揺らぎ、それに引きずられる形で肉体というものも老いて行くのだ。それが無いということは即ち、貴様は磨耗し、擦り切れて尚もその根本が揺らぐことなく、いやむしろその長い時をもつてして想いを昇華させたのであろうよ。」

その果てがその内に飼う有象無象というわけか、共に理想を追う^も朋友とはな、と呟くヤツの眼差しは今度は何か色々な者が混ざりすぎてよくわからない。

が、途轍もなく背中が痒いぞ、これ馬鹿にしているように見えて信じられないぐらい褒めちぎられていないか俺、化物とか呆れられたり罵倒されたりする事こそ幾度と無く、それこそほんとうに数え切れないほどあったが、こんなこと言われたのは初めてだよ。

そんなこんなでどういふ反応をすればいいのか困っている俺に、目の前のコイツはうんうんと頷きながら、

「うむ、合点がいったぞ　比類なき馬鹿というものだな、馬鹿という名の宝具かもしれん。」

そんな事を言いやがった。

ぶち壊した。

返せ、俺のなんか色々と沸きあがったまだ形になってなかったけど尊かったかもしれない想いを返しやがれちくしょう。

「何を言つか、これ以上の確な言もあるまい。貴様は最初は具にもつかない理想^{モウソウ}を追いかける愚者であつたが、長い時をかけてそれを叫び上げる馬鹿へと昇華したのだ。いやはや、その馬鹿に他の諸共を巻き込み束ね、拳句に世界から叩き出されるほどの馬鹿か、これは滑稽だ。ここまで来ると眼障りを通り越して痛快だぞ」

俺の抗議を全く意に介さずにククツと笑うとその相貌が再び禍々しいものになる。

そして、

「本来ならば我は我が庭たるこの世界を愛でるだけで満たされている。貴様の居た在り得たかも知れん未来の世界などに興味は無い。故にそこから来た貴様なぞ我の世界に紛れ込んだ異物として処断するのが正当な処置だ。だがな、光栄に思うが良い、興味が沸いた。故に我が見極めてやろう。その在り様、果たしてここでも貫けるのか いや、実に愉しみだ」

精々我を愉しませろよ『正義^{ヒミヤツロウ}の味方』とやら、と言うと踵を返し去ってゆく。

唐突に話し掛けてきて唐突に去るなあ、とか思いながらもその悠然とした背中をぼさつと見送る事しか出来なかった。

そして気が付く、アイツ俺の名前を呼んだな・・・貴様とか小僧とか言っておきながら最後に名前を口にするとは、人のこと名前で呼ぶ以前に覚える事すらしそうにない奴だけに、何かその行為に特別な意味があるような気がした。

そこでもう一つ気が付いたんだが、

「結局、誰だよアイツ」

散々人に喋らせておいてあの野郎、自分の名前すら言わなかったな。長々と喋っていたせいで既に日が落ちかかっている街角で、俺は啞然とするのであった。

その後、

「シロウ・・・・・・・・それは、恐らくギルガメッシュです・・・・・・・・」

お山に戻ってその話をした俺に、心底呆れた様子でセイバーにそう言われたのだった。

「え、あー・・・・・・・・・・」

成る程、そう言えばなんか今思い出した。

確かにあの独特な語り口とか傲慢不遜な態度とか確かにあの英雄王だ。

完全に現世風の出で立ちだったから全然気が付かなかった・・・。

そんな事を言ったら、セイバーはやれやれと溜息をついて、

「厄介な人物に目を付けられましたねシロウ、次からは気をつけた方がいい」

などと言われてしまったのだった。

うーん、でもなんか意外と面白い奴っぽかったぞ、記憶に残る奴はロクでもない奴だった気がするが・・・違った一面、いや俺の見方が変わったのか？

そう首を捻りながら、きつとまた近いうちに会う事になる、とそういう確信があったのでその時にでも考えよう、と思いながら日課である門番の仕事に就くのであった。

「それにしても、見極めてやる・・・か」

ロクでもないことじゃなけりゃいいのだが。

第九話 二月一日 （後書き）

ギルガメツシュ登場、どう喋らせて良いのかわけわかめです。うー
ーん、この御仁はこういう喋り方だったかなあ・・・果てしなく
首を傾げつつ迷走している予感が、なんか非常に扱い辛い感がひし
ひしと、でも頑張ります。というか文章量増えてない気がするんで
すよ、ごめんなさひ。

第十話

二月二日（1）

零時を過ぎ、今夜もお山にやって来る物好きはなし、平和で結構なことである。

などと思いながら門の上に立ち、いや正確には門の遙か上なのだが
なんとというか即席の物見台？空中に足場が在るので浮いている
ようにしか見えないのだが、キヤスターが作ったものでイマイ
チ原理がわからない。

その上で俺の中の連中と他愛のない会話なぞしながら街並みをぼんやりながめていた。

先日、あの騎士ヤロウからの伝言黒倒のお陰で渴が入ったお陰なのか、俺は中の連中とある程度の会話が可能となっていたのだった。

まあ、俺の心の持ちようだけでこう変わるわけがないだろうしきつとあの魔女が色々頑張ってくれたのだろう。

しかし、ある程度会話が出来るようになったと言っても、俺が自身の内面に集中しないとちゃんとした会話は成立しないし、まだあいつらが持っていたモノは投影不可らしいので不自由なのは変わらないのだが……。

それでも、先日よりも変わったところはある。

なんというか、思考の幅が広がったと言うか、中の連中と一緒に何かを考えているような気分というのだろうか、そんな感じなのだ。思考を分割している、いや 元々の俺の思考はそのまま他の連

中の思考というものが増えているといった感じだろうか？

元々あるモノに加えて膨大な思考を束ねて予測を弾き出せる今なら『過去視』や『未来視』も可能かもねー、未来の人間だけに、などとあの魔女は楽しそうに言うがそんなもの俺が処理できるとでも思っているのだろうか？

そんな疑問を投げかけたら、

『エミヤクンのミニマムなお頭にそんなことできるわけないでしょ。私がちゃんと纏めてから上げてあげるから今までどおり何も考えずに行動すればいいわ』

なんか何時も通りだった、もう抗議するつもりにもならんわ・・・まさに第六識を束ねる私の本領発揮よー、とかなんとか言ってるが、つたが知らない。

セイバーの直感による未来予知すら真つ青の高速思考をこのぼややんがちゃんと使いこなせるか甚だ不安だけど、とかあーあーあー聞こえない、聞こえないぞくそつたれ。

そんなこんなで夜の街を眺めていたのだが、ふと違和感を感じた。

「なんだ、この感じ　学校の方か？」

思わず呟いて視界を強化する。

違和感の先は穂郡原学園、俺が遙か昔に通っていた学び舎・・・まあ、例によって殆ど覚えていないが懐かしい気分になるのでよく眺

めたりしている。

今まで近寄らなかったが、よく考えるとキャスターから渡されたあの物々しい礼装どもがあれば大丈夫なのだろうか？

あの礼装は認識を逸らす効果もあるらしく、例えば俺が「エミヤシロウです」などと言っても、その容姿共々そうは認識されないとか何とか・・・つっても本人と会ったらそうも行かないだろうしなあ、確か異常を感知する能力とかはそれなりにあつた筈だし、何よりマスターだし・・・まだセイバー召喚してないけど。

ん、そう言えばこっちでのセイバーはいつ召喚されるんだろうか、そろそろだと思っただが・・・。

そんな事を考えつつも違和感の正体を探るべく視界を強化したまま学園を見続ける。

居た。

校舎から出てきてグラウンドに降り立つ黒い蛇・・・妖艶な出で立ちの長身の女性、ライダー・・・だったか。

何をやっていたのか　思い出せエミヤシロウ、お前の聖杯戦争で、学校で、ライダーが、何を、したのかを

「　結界、か」

思い出す。

正確に思い出したわけではなく、どのような物かも思い出せないが、結界を張っている、そうだったと思う。

くそ、やっぱり覚えている事柄に斑がありすぎる、あまり当てにしているものでもない・・・が、とにかくよからぬ事を企んでいるのだろう。

今すぐ乗り込んでとっちめてやりたい所なんだが、門番の仕事もあ

るし、さてどうしたものか・・・。

『いっちょからかってあげましょう』

『ここから派手に叩き込めばよかるうが、馬鹿め』

やかましいわ、言われんでもわかつてるから黙ってて欲しい。

魔女だけでも頭が痛いのにこの騎士^{ヤロウ}まで普通に会話が成立するようになってしまつて、気が散つてしょうがない。

というか、学校に向けて派手に叩き込むとか何を考えているんだコイツは、やるんだつたら、

「開眼」

魔剣を顕現させる。

形は弓に、番える矢は、

「喰らいつけ、獵犬」

投影ではなくもう一振りの魔剣、

「フルンディング
赤原獵犬」

引き絞る、魔力を、そして周囲から変換したエネルギーを其れに込める。

標的はライダー、先程からマスターらしき人影が近付いて来ているが、あくまで狙いは彼女だ。

「
」

ギン、という音と共に解き放たれ標的へと向かうそれを見ながら考える。

『フルンデイング
赤原獵犬』、これも『カランドボルグ
偽・螺旋剣』と同様に矢としての改良を加えたものであり『中』の連中に持つていかれていない数少ない武装のうちの一つだ。

故に、投影したそれを放つてもよかった。

いや、確実に仕留めるのなら投影品でなければならなかった。

『ブローケンファンタズム
壊れた幻想』が使えない、それもある。

しかし、魔剣の変化による変化にはもつと大きな弱点とも利点とも言える点が存在する。

『魔剣』とは、その名称とは裏腹に一切の『神秘』を宿さない剣である。

如何にエミヤシロウがその創造の理念を、基本となる骨子を、構成された材質を、製作に及ぶ技術を、成長に至る経験を、蓄積された年月を、あらゆる行程を踏破し、その設計図を『魔剣』に降ろそうとも、『神秘を再現できないもの』に降ろしては本来な

らば形だけ似た『なにか』が出来るだけだ。

そんなもの、本当に何の力も持たない、贋作ですらない模造品だ。イミテーション

しかし、エミヤシロウは本来ならば再現できないはずのものを再現する異端である。

そこには確かに神秘と似た『何か』を宿したものが在ったのだ。

本来ならば再現できないものを別の『何か』で再現する事によって、『魔剣』というフィルターを通過する事によって、歪に歪んだその幻想、

ディストーションファンタズム
『歪んだ幻想』

そう、歪むのだ。

本来のそれとは違った様々な形に神秘を歪め発現する。

複数の効果の中から一つだけを誇張したもの、ある現象が結果こそ同じであれ違った過程で起こるもの、手段と目的が完全に入れ替わってしまふもの、等だ。

例えば、

必ず殺す、という結果を起こすものが、どのような行動を、それこそ相手の攻撃を受け流すなどしても、その軌道がそのまま相手の心臓に向かって放たれる。

必ず防ぐ、という効果を齎すものが、決して相手が攻撃できない、という防ぐ、ではなく封じる方向へと機能する。

あらゆる術式を無効化する、という効果が、あらゆる術式を破壊する、という結果に変化する。

受けた傷と同じものを与える、というものが、受けた傷を相手に移し変えるというものに変化する。

といった風に歪んでしまう。

破壊力、殺傷力も極端に強化されるものもあれば逆に弱まってしまうものもある。

俺の好んで使う千将莫邪など、お互いが引き合う特性が無くなり、その代わりに抗魔力が1ランク、耐久が2ランク上がり、何故か幸運が2ランク下がるのである。

これでLUK値で命中判定の攻撃などされようものなら避けようがない。

なんでさ、そりゃ創った人間も受け継いだ人間も作らせた人間も死んだ伝承がある剣だが・・・あまりにも極端ではなかるうか？

かといって持ち主に栄光と破滅を齎した剣であっても全くそういつた方向に効果を発揮しないものもあり、法則が全くわからないのだ。

で、今放った『フルンディング赤原獵犬』なのだが、これは威力が投影品の5割、速度に至っては3割というお粗末さなのだが

『標的に喰らい付く』という事に特化しているのである。

兎に角しつこい、しかも投影品と違って速度がない分小回りが効き鬱陶しいことこの上なく、しかも威力が落ちていくといっても喰らえばただでは済まない上に『喰らい付いたら離れない』のである。肉を食い破り、決して抜けない、まさに喰らい付いたら離さない、というヤツだ。

で、それは『魔剣』なのである。

当然、そんなもの打ち込まれたら凄い勢いで色々喰われるのである、魔力とか生命力とか、というか肉そのものを変換吸収するのである。

エグイ、我ながらあまりにもエグイぞエミヤシロウ。

とても正義の味方の武装ではない。
まずいな・・・撃ってから後悔が、まさに後悔先に立たずってやつだ。

というより、『殺傷能力がある武装ばかりな時点で正義の味方としてどうなのよ?』とか自分でつつこむ前に自分の中の誰かにつつまれる。

痛い、痛いぞ、いろんな意味で痛々しいわ!そこ、馬鹿がとか言うなちくしょうめ、なんだってんだ。

そんな馬鹿なことを考えている間に獵犬が蛇を追いついて校庭が凄いい事になっている。

マスターらしき人物は突き飛ばされて巻き添えは喰っていない様だが、ライダーは避けたり弾いたり校庭を跳ね回る羽目になっている。

そして辺り構わずエネルギーに変換しながら喰らい付く魔剣、既にグラウンドは無茶苦茶だ。

あれと打ち合うだけでも、掠めるだけでも魔力が多少なりとも喰われるわけで、このままではジリ貧だが、さあどうする。

正直な話、あれを止める方法は幾つか存在する。

バーサーカーのように圧倒的な力を叩きつけ、力を全て消失させてしまふか、力を奪い取るか・・・こっちはキャスターとかなら何かしらの方法で可能だろう。

エネルギーの対消滅かエネルギーを奪うか、他にも幾つか方法があるが兎に角アレが様々なモノを喰って得る力を上回る何かをすればこの距離では俺の方からの力の供給が届かないし、まああったとしても足りないだろうから推進力をなくして止まる。

まあ、バーサーカーが打ち落としたのはアレじゃないが、というか『偽・螺旋剣』は単純に打ち返すのはむしろアレより余程難しいの

だが・・・。

なんてったって魔剣が変化した『偽・螺旋剣』で強調されているのは貫通力、突破力なのだから、魔女の推測だとんでも・・・『螺旋力は突破力ってことじゃない？』とか凄い適当な事を言ってるやがったが、兎にも角にもいくら威力があつたとしても単純にあの打撃で打ち返すのは無理だ。

だというのに、狂化されていて、空中で、尚且つ体勢崩していながらアレを一番良いポイントでミートさせて打ち返すとか、こういう神経しているのだろうか。

兎に角、アレを止めるにはそういった方法が一番なのだが　ライダーには厳しそうだな。

ランサーなら止めれるだろう。

一撃の重さはバーサーカーに及ばなくてもアイツには速さと正確さがある。

あの速さと正確さで何発、何十発もの連撃を叩き込んでアレを止める事が出来るだろう。

セイバーも可能だと思う。

同じくバーサーカーには及ばないまでもかなりの打撃力があるし、一撃とはいかなくとも数合で叩き落すかもしれない。

アーチャーは・・・わからないな、アイツの戦っているところなんて一度しか見ていない、が・・・アイツも何とかするだろう。

だが、ライダーには速さと正確さは在ったとしても圧倒的に火力が足りていない。

得物も他の連中と違って『格』が低いように見受けられるし、あれじゃ下手をすると魔剣にあっさり喰われかねない。

というわけで色々な意味で相性は最悪だろう。

恐らく今回は俺達が居るせいで召喚されていないアサシンのクラスも似たようなものだろう。

そう考えながら様子を見てみると、あちらの動きに変化があった。

マスターを置いて、校庭から離脱を図ったのだ。

「逃げる？ いや、違う」

こっち^{お山}に向かつてきている？

確かにあのままあの場に留まっていたてもジリ貧だし、下手をすればマスターを巻き込みかねないか。

それに、アレが飛来した方角から言つて柳洞寺^{こく}以外には何も無いか、ならここに居るかもしれない射手を仕留めるしか方法は無いと考えるのは当然かもな。

射手^{オレ}が移動している可能性があつたとしてもそれを探し出す時間も余裕もあちらには無いだろうし、だったら何にせよ最初はこちらに向かう以外は無いだろう、どのクラスかまで把握しているかは知らないが、サーヴァントが此処を拠点にしている事ぐらいはあつちも気が付いているんだろうし。

しかし

疾い。

足場から門の前に飛び降りる。

既にライダーはこちらに向かつて長い石段を駆け上がって来ている。魔剣と幾度か交差しながら空へと向かつて駆け上がるかのような、空に向かつて、俺に向かつて堕ちて来る。その姿に、何時かの光景を幻視する。

「」。

視線が交差する。

直後、ライダーが更に加速し飛び掛ってくる。

激突する。

迎え撃った俺の一撃を受けライダーは宙に翻り、そのまま俺の額目掛けて鉄杭が飛来する。

同時に、彼女を追って来た魔剣が俺に向かって

「ハッ！」

もう一振りの魔剣でそれを打ち払い、いや融合させ、そのまま鉄杭を打ち払う。

そんなお約束過ぎる手にかかるわけがない、が　今は見事だった。

ライダーはそのまま俺と距離を取って着地する。

追撃は無い。

俺の両手には既に分離した二振の中華剣。

睨み合う、いや　眼帯のようなものをしていて目元が見えないが、ライダーが俺を睨みつけている。

追撃があるかと思ったんだが、してこない　違うな、出来ないぐらいに消耗しているらしい。

「ここにはキャスターだけだと思っていましたが、まさか貴方のようなモノも居るとは」

ライダーが苦しげに口を開く。
そんなライダーの様子に、

「驚いた、まさかそこまで消耗するとは思わなかった。牽制程度にするつもりだったのに、ごめん やりすぎたみたいだな」

思わずそんな言葉が口から出た。

「。」「

ライダーがそんな俺に閉口した。

予想外の台詞に啞然としたのかもしれないが、俺にはそんな様子もひよっとしたら消耗していてこうしているのも辛いんじゃないかと思えて何故か慌ててしまう。

だからライダーが口を開く前に俺の方から、今回の攻撃は学校の結界に関して使ったら介入するというか使わないで欲しいという牽制であってそこまで消耗するとは思わなかった旨を言い訳がましく語り、そしてこちらは仕掛けてこない限り、無関係の人間を巻き込まない限り敵対はしない、このまま去るならば追わない、などなど足早に説明したのだが、

「　　ちよつと待つて欲しい。」

それを聞いたライダーは何か困惑しているようだった。

「その、いえ、なんといいですか　貴方の存在といい、その行動
といい言動といい・・・その、ああ、何から質問したらいいものか
　　兎に角、貴方は何なんですか一体」

全く何が聞きたいのかわからない。
余程困惑しているらしい。

「あー・・・その、なんだ、説明すると非常に長くなるから後日に
しないか？魔力が切れ掛かって辛いんだろ？まさか魔力の供給がそ
んなに少ない　　ってそう言えば慎二は魔術師じゃないって話だっ
たな、そりゃ少なくて当然か・・・兎に角！日中は街をうろついて
るから声を掛けてくれれば出来る範囲で説明してやるから今日は帰
ったほうがいいぞ」

うん、思い出した。

あのマスターらしき人物は『間桐　慎二』、俺の友人だった男だ。
しっかし・・・なんか、『うわあ、ほんとお人よしねー』とか『馬
鹿が、今なら倒すどころか捕縛することすら容易いだろうに』とか
聞こえるが聞こえない。

弱った女性を倒すとか捕縛とか正義の味方のやる事じゃないだろう

が、俺はサーヴァントだったとしても死ぬのとか嫌なんだよ、わかってるだろうにお前らも。

そんなわけで頼むから今日は退いてくれ、とそういった俺にライダーは暫し考え込むような間を置いて、

「　　っ・・・ほんとうに訳が解からない。いいでしょう、確かに現状では私はすぐにここを離れ魔力を補充しなければ消えてしまいかねない。」

この借りは返します、そして納得の行く説明もして頂きます、とそう言ってライダーは闇に消えていった。

ふう、とりあえず話は出来たし、なんか雰囲気的に悪い奴ってわけでもなさそうだ。

夜が明けたらあっちから目に付きそうな所をうろついて話しかけられるのを待つかな？

と言ってもあの消耗具合だと暫くは外に出てこないかもな・・・。

こっちの話を聞いてもらって戦わずに済むようになればいいのだが・

・・・問題はライダーよりもマスターの慎二かもなあ・・・。

そんな事を考えながら俺はライダーが消えて行った先をぼさっと眺めていた。

で、そのまま夜が明け、穂郡原学園の生徒達が登校を終えた時間を見計らって俺は深山町を人目に付き『辛そう』な場所を中心に散策していたわけだが、いきなり茂みの中から鎖が飛来するのはどういふことか、思わず避けてしまった、というか普通避けれるなら避けるぞコレ。

で、飛来した鎖は先日俺を釣り上げた物ではなく何時間か前に見たものである。

勘弁してくれ、なんでお前までそういう方向で俺を釣ろうとか考えてしまうのか、霊体化した状態でも近付けばわかるんだからわざわざ実体化してそんな事しなくてもいいだろうに、どいつもこいつもまともな接触は図れないのか、というか俺に対してまともに声を掛けてくれる常識人というものに長い事遭遇してないんだがどうよ。

悲しい、流石に悲しくなってきたぞ。

しかし、悲しんでばかりではいられないので、鎖が飛来した茂みの方へ足を進める。

茂みを抜ける瞬間、何か違和感を感じる、人払いの結界か何かだろう。

そして、それを抜けた先には、

「やっぱりお前か、ライダー」

真昼間だと言うのに夜と変わらない格好、閉ざされた目でこちらの様子を監視するライダーの姿があった。

うつむ、山門で対峙した時は魔力が切れ掛かってそう見えるのかと思ったのだが、なんか酷く人間味に欠ける奴だなあ・・・日陰に佇んでるせいかもしれないがこう光を感じさせないというか闇を纏っているというかなんというか。

というか、魔力の方は大丈夫なのだろうか？

「
」

ライダーは何も言わずそこに佇んでいる。

うーん、やっぱりなんか、こう、昼間に見る姿じゃないよなあ・・・。

沈黙しながら暫し経つ、なんか気まずい。
すると、

「
納得の行く説明をして頂きたい。」

唐突にライダーが口を開く。

いや、それはわかるんだが、もう少し前置きとか無いものか、ほんと唐突だぞ。

「敵である貴方に、この様な場所で、この様な問いかけを行う事自体がおかしいのです。何故そのような気を使わなくてはならないのか。そんな事より私の問いに答えてもらいましょうか」

俺の抗議に全く耳を貸さずにライダーはそう言つと矢継ぎ早に質問を並べ始めた。

まず、俺の存在の異様さ、何のクラス　それ以前にサーヴァントなのか、何故先刻の攻撃の意図、何故手を抜いたのか、そもそもその語った意図が意味不明だ、何が目的だ等々……。

そんな事を淡々と、しかし確かな感情を込めて口にするライダー。なんだろう、苛立っているというか怒ってるのか？
と言っわけで、

「えつと、ごめん、なんか俺怒らせるような事したか？」

なんて事を思わず言ってしまった。

いやいや、いきなり狙撃して追い立てられて何か悪い事しましたか？は流石に無いだろう俺。

失言だった、と思っていると案の定、目の前のライダーの表情が引き攣るのがわかる。

「　貴方は、この期に及んでまだそういう事を口にしますか。どうやら本当に私を取るに足らない相手だと侮っているようですね」

怒気が、殺気が膨れ上がる。
って、

「へ？侮ってるって何がさ、俺はただ無関係の人を巻き込んで欲しくないと思ってるだけだし、ほんとにはサーヴァントであっても怪我とかしてほしくないし争いたくないって思ってるだけだぞ」

何か酷く誤解されている気がするので慌てて弁解をする。

するのに、なんか更に気配が殺伐としていくのは何故だ。

こんなに馬鹿にされたのは初めてです、などと言って真昼間なのに今にも飛び掛つてきそうだ。

何故だ、まだ何も説明してないのに、質問に一つも答えないうちからのつぴきならない状況に陥っているぞ。

「待て待て待て、何か誤解があると思うんだ」

こうなると必死だ。

真昼間から戦闘とか御免だ、関係ない人達を巻き込みかねない上にキャスターに何言われるかわかったものではない。
だというのに、

「誤解も何もありません。ええ、ありませんとも　貴方は私を戦うに値しない相手だと、弱者は弱者らしく根城に籠って大人しく震えていると、そう言っているのでしょうか」

何でコイツはそんな事を言うのだろうか、

「確かに貴方ほど異質で強大な何かを秘めている存在からすればそう見えるのかもしれませんが　酷い侮辱です。その認識、その態度、後悔していただきます」

続けざまにそんな事を抜かして地に腰を落とし戦闘態勢に

なんだってんだよちきしょうめ。

なんだってこう人の話を聞かないのか、何時ぞやの馬鹿共を思い出した。

思い出してしまったので、思わず頭にきて、

「だああああ！何だってんだよ一体！！俺はただ、誰も不幸にならない結末が欲しいだけだっての！！」

唐突にそんな事を叫んでしまっていた。
そんな俺にライダーは、

「
は？」

腰を落とし今にも飛び掛つてきそうな体勢のまま固まった。

俺はそんな事には構わずに、勢いのまま捲くし立てる。

俺は皆が幸せな決着が良いだの、サーヴァントだろうがマスターだ

ろうが出来れば傷つかないで欲しいあの、その為にキャスターを説得して街からの生命力の略取をかなり控えめにしてもらって仕掛けてくる奴、無辜の人々に害をなすような奴以外には何も仕掛けていないあの、色々と工夫して願望器としての聖杯を殆ど犠牲無く完成させようとしているだの最早なんの脈絡も無く勢いで喋り続けた。仕舞いには、

「だからさあ！皆で！シアワセになろうってんだよ！！解かれ馬鹿！」

などと、啞然としているライダーに向かって叫び、そして
我
に返ったのだった。

。

「あー、その、なんだ……」

沈黙が痛い。

またやってしまった。

またしても恥ずかしげも無く叫んでしまった。

目の前でライダーは完全に固まって　それこそ石化したかのように固まっている。

俺の中で、

『あははははは、こんな下らないやり取りでその暑苦しい迷台詞を惜しげもなく叫ぶなんてエミヤクンってばやっぱりサイコー！馬鹿なんじゃないかしら』

『何故疑問系だ馬鹿め、言うまでも無く正真正銘の大馬鹿者だ』

とかその他色々と聞こえるが……くそう、駄目だ、全く言い返す言葉も気力も出てこない。

思わず頭を抱える。

ライダーは相変わらず固まったままだ。

なんか目元は全く見えないのに、信じられないものを見るような目をしていると確信できるのが嫌過ぎる。

どうしろって言うんだちくしょう。

ほんとどうしろっていうのさ、とか思っていると、

「本気ですか、貴方は」

いつの間にか戦闘態勢を解いていたライダーに声をかけられた。
その閉じた目は真っ直ぐに俺を見ている。

先程までぐだぐだだった思考が急速に引き締まる。

ライダーの問いかけは信じられないと言った呆れと疑念が混じりつつも真剣だったから

「ああ、本気だ」

俺もその問い、その視線を真っ向から受けてそう返す。

再び場が沈黙する。

先程とは違った沈黙の中、俺とライダーは黙って向かい合う。
暫し経って、ふうとライダーから溜息が漏れる。

「信じられない　正気ですか貴方は」

と言いますか本当に何なんですか貴方は、とか言って更に溜息をつくライダーだった。

またか、本当にこんな事しか言われないなあと思い思わず、

「いや、いい加減そう言われるのに慣れるを通り越して飽きてきた感がだな・・・」

とか言ったら睨まれてしまった。

ううむ、なんか先程より随分と感情表現が豊かになっていませんかライダーさん、さっきまで幽鬼のように佇んでるだけだったのに。

「黙りなさい　ああ、実に腹立たしい。私はこんな人物を相手に勝手にいきり立って一人相撲をしていたということですか」

ぎりり、と実に悔しそうに爪を噛むライダーだった。

そして、

「結局、聞きたいことは何も聞けなかった。マスターに無断で出てきたのですが・・・気付かれてしまったようです。もう行かねばなりません」

そう言つと俺に背中を向けて去っていかうとして、立ち止まる。

「せめて、名を伺っておきましょう。サーヴァントであればクラス名でも構いません」

ふむ、そうだな結局何も質問に答えられなかったのだからこれぐら

いはちゃんと答えておこう。

「『イミテーター』のサーヴァント、エミヤシロウだ」

「模倣者、ですか、真名まで一緒とは……だから模倣者だといえ、考えても詮無き事ですな」

俺の名乗りを聞いて今度こそ立ち去ろうとするライダーだったが、
またしても立ち止まる。
そして、

「イミテーター、貴方の言う『皆が幸せな未来』などと言うのは、
既にそれこそ飽きるほど言われているのでしようが、まず在り得ない」

そう言うと、続けて

でも、何も壊さず、誰も傷つけない未来、そんなものがあつたら本当に素敵ですね。

と、祈るように、夢見るように、届かないモノに憬れるように、そ

う呟いて今度こそ本当に去って行った。

「ライダー……」

その呟きに、その背中に、何か彼女の想いを見た気がした。

で、俺もその場を立ち去ろうと思ったら、背後から気配を感じた。
振り返る。

そこには、

なんか肩をぶるぶるさせて口元を押さえて俯くライダースーツのあの男が、

「くくく・ふふ、ふははははははははは！折角の茶番と思い邪魔をすまいと堪えていたが、貴様何度我を窒息死寸前まで追い込む気だ小僧！」

俯いていた顔をがばつと上げたかと思うと凄いい声量で笑い出しやがった。

気配遮断とかの対極を直走るだろう存在の癖に気付かれずにずっと見てやがったのかこの野郎、何処から？ねえ何処から見てたの？今すぐ忘れる。

「くく・・・まあ待て、さしもの我とて流石に今日はもう入らん、満腹だ。くく、ははは、我ながら、はははは、なんといい様だ。いや、近いうちに褒美を取らそう、貴様のような稀有な道化はこの我とて見たことが無いやもしれん」

無視か、無視なのか、拳句未だに笑いを堪えながらそのまま立ち去っていくというのはどういう事だオイ。

まさかあの場面であのような戯言を臆面も無く言い放つとは、先日
の問答で理解していながらこれとは全く愉しませてくれる、とか言

いながら本当にそのまま去って行きやがった。

ぶち壊した。

結界らしきものも既に術者が去ったせいかわち壊れているがそれ以上には色々つぶち壊した。

くそ、あいつあんな奴だったのか・・・もしかしたら俺達はキャスターが冗談めかして言ったように、本当に似通っているだけの完全な異次元だか異世界だかに来たんじゃないだろうな。

啞然としたまま俺はそんなはてしなくどうでもいいことしか考えられずに立ち尽くすのであった。

そんなこんなで夜になった。

あの後、俺は穂郡原学園に寄り結界の敷設状況と解除が可能かどうかを中に入らずに可能な限り調べたのだが、

「設置はほぼ完了、解除は・・・中に入らないと無理、か」

しかし、中に入ったとしても基点が基本的に人目の付くところに配置されているし昼間は無理か、夜も・・・今は無理だな、門番もあるし。

そう思いながら学園の方に視線を向ける。
すると、

「あれは・・・ランサー？」

青い影がグラウンドを駆けるのが見えた。
そして、その近くに

「あれは・・・遠坂」

とても、とても懐かしい、エミヤシロウにとって忘れられない、常に眩しくて鮮やかだったアイツが居た。

直後、アイツの前に赤い外套の男が現れる。

「アーチャー・・・ってことは、これは・・・!!」

運命の夜、遂に始まったようだ。

第十話 二月二日（１）（後書き）

うーん・・・微妙、実に微妙だけど振り返るな自分、若さとは振り返らないことなのです！もうあまり若くない気がするけれど。

ルビの振り方とか痛々しいけど気にするな私。きつと誰も気にするほどお前の文章を深く考えて読む物好き नाही のだ - - なんだろうこれ、自分で自分のフォローして逆に追い詰められている気分。しかしお話が進まないんですよー。どうしたことでしょう。

第十一話 二月二日(2)

学園のグラウンド、そこで激突する赤と青、この位置からでは如何に視界強化を施した俺でも正確には視認出来ない速度で動く二人の男。

赤い外套の男、アーチャーと青い甲冑の男、ランサー。

俺が最初に見た聖杯戦争、その光景を見ながら考える。

遙か昔、未熟だった頃の俺ならばきつとこの光景を見て啞然としたのだろっ、と薄ぼんやりと浮かび上がる記憶、それを振り返る。しかし、それよりも気になる事がある。

「アイツの手に持っている得物・・・やっぱり干将莫邪、だよな」

ランサーと打ち合うアーチャー、最初は片手に、その後両手に現れた得物、それに目が行く。

先日、アーチャーの背中を見た時から、奴の姿、奴の言葉を思い出しながら、まだ何か思い出していない事があると、そんな気がしていたのだが、どうやらこれだったようだ。

陽剣干将 陰剣莫邪

何時の間にか、俺が最初に投影し愛用した勝利すべき黄金の剣カリバーンよりも好んで使用するようになった二刀一対の中華剣、それが奴の手元

にある。

そして、ランサーの魔槍によって何度手元から弾き落とされようとまた手元に出現する所を見ると　いや、一度見ただけで確信できた、アレは投影だ。

成る程、俺はこの時アイツの干将莫邪を見ていたから固有結界の中にあの双剣が存在したんだな、間違いなく目の前で見ておきながら何時の間にか在った、だなんて・・・我ながらどうかしている。

まあ、この時の俺はまだ自身の魔術特性に全く気が付いていないわけだし、初めて見た想像を超えた殺し合いに気が動転し、それにばかり目が行ったんだろうなあ・・・実際アイツが戦う所を見たのもこの時だけだった筈だし、当然アレを見たのもこの時・・・いや、もう一度ぐらいあったか？

しかし、それよりも重要なのは、アイツが投影を使用する魔術師だったって事か。

投影をあそこまで使用できる奴が俺以外に居るなんてなあ・・・アイツも俺を見て同じ事を思ったのかもな。

ま、これでアイツが俺に何故あそこまでの確かな助言が出来たのかは納得がいった。

同じ投影魔術を使用するんならわかつて不思議じゃないしな。

うん、納得がいった・・・納得がいったというのに、なんだろう、何故かすつきりしない。

『それ、納得行っていないってことよね』

うーん、やっぱりそうなのだろうか、理屈はおかしくない筈なのだが何故かそれだけではない気がする。

そんな事を考えながらも視線は外さず学園のグラウンドへ、思考も先程からの考え事と並列して二人の戦い方を分析する。

うーん、便利だなこの機能、俺に備わって、十二分に活用しているにも関わらず原理がサッパリなのがアレだが実に便利だ。
分割思考の亜種とかなんとか言っていたが、今更こんな能力まで増えてしまつとはほんと長生きとはしてみようものだ。

『長生きした結果が傍から見たら大隊規模の多重人格ってのは凄まじいわよね』

それとも分裂症かしら？とか言う魔女の声に思わずグラウンドが霞んで見える。

・・・ほんと、ながいきつてするものですね。

『漫談はそこまでにしろ、様子が変わった』

そんな俺達に騎士が割って入る。
んなこと言われなくても判っている。

校庭では二人が距離を取って向かい合っている。
ランサーが構えを取る。

恐らくあの場はアイツの放つ殺気と魔力が渦巻いている事だろう。
アイツの槍が辺りの魔力を凄まじい勢いで喰らうのだけは、意識をあちらに集中しているお陰か此処からでも辛うじて判る。

先日対峙した時には出さなかったが、宝具の真名を開放するのか。

そう思ったのだが

「ん？」

なにやら別の何かに気をとられたのか明後日の方向を向いて
つて、

『あら、あららら、あれってエミヤクンじゃない。うわー若い、
全然今と変化が無いわー』

『全く前後の意味が繋がっていないぞ魔女。しかし、確かに全く差
異が見当たらん』

そうだよ、俺が居たんだった。

何故そんな重要な事を見落としているんだ。

四十メートル以上離れた木の陰にそいつは居た。^{オレ}

気付かれた直後、そいつは走って校舎に逃げ込み、それをランサー
が追って同じく校舎に入ってしまった。

暫し後、アーチャーと離れて二人を見ていた遠坂も校舎へと急いで
入っていく。

入れ替わるようにランサーが飛び出して行く。

ああ、死んだな、^{オレ}衛宮士郎。

そんな事を呆然としながら思った。

なんだろう、この時代、この世界のオレを見て不思議な気分になっていたせいかなが死んだというのにあまり深く考えなかった。そもそも生き返るんだし大丈夫だろう　生き返るよな？なんか唐突に不安になってきたぞ、いくらオレの事とはいえこの世界、この時代に生きるオレは厳密には別人かもしれないのだ。

だとすれば見捨てていい筈もないし、確実に生き返る保証がないのなら助けるべきだったのでは、いやいやここで介入して変な方向に持っていったらそもそもセイバーが召喚されないのではないか？

よく考える俺、もしここで何かしら手を出して衛宮士郎が助かったとして、その結果としてセイバーが召喚されず出会う事が出来なくなっただけだろう。

許せるか？

許せるわけない。

もしこの俺、エミヤシロウの過去に誰かが介入して俺とセイバーが出会ったことを無かった事にされたら、絶対に許せない、ああ許せない、どんな事しても報いを　落ち着け。

うん、その、なんだ、きつとこれでいい、良いに決まっている。

鞘の力なのか今飛び込んでいったアイツらのお陰なのかは知らないが・・・いや、鞘はまだ起動して無いだろうな、ってことは遠坂が助けてくれるのか・・・ほんと、アイツには世話になってばかりだな俺は、他に何を世話になったかイマイチ覚えていないのが申し訳ない限りだが・・・。

とにかく、オレはきつと大丈夫だ。

なんてったって俺だし、しぶとさはきつと筋金入りだと信じよう。

とか、色々と考えているとこちらに向かってくる気配がある。

門の上空にある足場から降り立ち下を見下ろすと、青い影が駆け上がって来て、俺の5メートルほど手前で停止する。

ライダーもだが、コイツも疾いな、流石というべきだろうか、

「ランサー」

「よう、坊主　　テメエに一つ、と言わず聞きてえ事がある」

開口一番、目の前にやって来た槍兵はそんな事を、いや当然かその質問は。

ランサーは先日何も聞いてない俺もどうかと思うが、と前置きした上で

「テメエ　何者だ。そしてあのガキはなんだ？いや、どっちかってーとお前のその姿はなんだ、と問うべきか？」

そう聞いてきた。

そこからはここ数日に様々な奴らと行った問答の焼き直しだった。尤も、目の前のコイツには、正確にはコイツのマスターには下手な事を言うわけにはいかない気がするので、他のどの連中にした説明よりも念の入った話し方をした。

「全く要領を得てねえぞ、真面目に説明する気があんのか teme
工」

「『いやー、そんなこと私に言われてもねー』」

「『精々考える事だ、敵に態々自身の事を語るとでも思ったか阿呆
」

時には俺の『中』の連中にも俺が喋っているように声を出させて引
つ掻き回す。

なんかあまりの回りくどさに苛々しだしたのか、仕舞いには質問の
度に槍が奔るようになった。
言葉を交わすたびにぎいん、がきいん、と金属音が、最早会話じゃ
ないよねこれ。

気が付いたら既に先日の焼き直しをするかのように打ち合いになっ

ていた。

「まったく、何だっただ。戦い方がアーチャーの野郎と瓜二つだと思えば、バーサーカーと同じ得物が出てくるわ、拳句に俺の得物まで真似やがる。」

卦体なだけじゃなく節操もねえなオイ！」

「そういうお前は器用だな！これ、だけ、やりながら、よくも、まあ、それ、だけ、喋れるな！」

先日よりも苛烈な攻めを繰り返しながらもベラベラとよく喋る。対するこちらも先日と違って頭は冷静、心は熱く滾らせて

「『ほんとほんと、器用なものねー』」

「『ふん、戦士とはそういう者だ。戦いながら喰い、眠り、語らう、この程度出来て当然だ』」

無理だった。

なんか冷静さと熱さが混じってぬるま湯であつた。

「デメエこそ、腹話術とは余裕だな　オイ！」

ランサーの槍が奔る。

顔、喉、心臓への3連撃を双剣で弾く。

腹話術？腹話術扱いかよコレ。

「ハッ、何がイミテーターだ洒落やがって！

プレイヤーかパフ

オーマーとでも名乗ったらどうだ、坊主！」

更に激しさを増す、次は払い。

「誰が芸人だこの野郎！」

バーサーカーの斧剣で叩き返す。

その後も問答とも罵り合いとも取れる会話と共に剣戟が交わされる。
先日よりも緊張感はないのに熾烈さはその比ではない。

既に山門はその余波で跡形も無い。

このままでは埒が明かない、お互い同時にそう思ったようで、俺たちは一度間合いを開ける。

そして、更なる段階へと入ろうとしたその戦いは、

「 チッ、またか」

またしてもランサーの舌打ちによって終わりを告げた。

「なんだ？また戻って来い、ってか？」

またしても唐突に殺気が霧散したランサーにそう声を掛ける。それに対して、非常に面白くなさそうな様子でランサーは、

「いいや、殺した筈の目撃者が何故だか生きてやがったんで、もう一度殺ってこいだだよ」

そう答え、更に続ける。

「全く、テメエと姿形がまるで同じ癖にあまりにも手ごたえが無かったんで拍子抜けして普通に殺ったんだが、どうやら間違いだっらしいな。どういう絡繰だ？やはりただ似てるっただけじゃねえな」

模造者だから現世の人間の殻を被ったとか何とか言っただけでやがったが、それだったらあのガキの技量があんなザマなのは妙だとか、まさかテメエ未来の英霊 いや、それだと姿形が、まさか吸血鬼の類いか？だったら生き返ったのにも納得が、いやそんな気配はなかったが、とか、まさかアレが聖杯戦争のマスターで聖杯を手に入れ

て不老不死にでもなつて、いやそうでなくても英霊並かそれ以上の力を願つてそれに見合う働きをその後すれば　馬鹿らしい、とか色々言い始めたかと思えば、

「あー、まどろっこしい、こんなのはうちの腰抜けの考える事だ、まわりくどい方針にただでさえ苛々してんのにこんな事まで面倒見切れるかってんだ」

最終的にはそんな投げ遣りな事を言つて　短かつたなあ思考時間、その割に列挙される可能性が結構鋭い所を付いているのももう少しちゃんと考えるべきではないだろうかコイツは・・・とにかく、俺に背を向けて去つていこうとするランサーだった。

うん、出番だ。

「まあ、深く考えずに見た在りのままを受け止めればいいと思うぞ」

その背中にビシリと決まった俺の決め台詞、去つていこうとしたランサーの空気もびしりと固まった。

怒ったか？呆れたか？何時もの如くやつてしまった感があるが、これで今後は問答は無意味だとも思つてくれれば助かるんだが・・・。

コイツ個人になら正直に話しても良いんだけどなあ・・・こいつのマスターにだけは余計な情報を与えてはいけないと俺の中の何かが最大級の警戒サインを発している。

その割には色々余計な事を喋つてしまっているが、まあそれもこれ

で終わりだろう、というか終わりにしよう。
とか、思っていたのだが、

「クツ　この狸が、テメエは気に喰わねえ奴だが、その台詞は気に入った。実にオレ好みだ。　いいぜ、見極めてやるとしようじやねえか」

全く、長々とつまらねえ法螺なんぞ吹かずに最初からそう言えばいいだろうに回りくどいことだ、なんて言って上機嫌で去っていきやがった。

意味がわからない、一体何が気に入ったのだろうか？首をかしげる俺に、

『馬鹿め、あの男が言ったままだ。己が眼で、剣で相手を推し量るべし　言葉なぞ不要、そういうことだろう。最初から真実を述べるつもりがないのならそう言えばいい、それを付けもしない嘘などつきおって　馬鹿め。という事だ』

欲しくも無い奴から解説が入った。

それにつられてか魔女からも合いの手が入る。

『あー、つまり聞きたいことがあるなら拳で聞け！ってことだったのね。うわーエミヤクンのあの言葉にそんな熱い意味があったなんて　正直暑苦しくて引くわ』

違うわ！誰がそんな意図で言うものか、勘弁してくれ。

『ま、そんなことは私達もわかってるわよ。ただ、向こうはそう取ったってことでしょ、大変ねー次からは挨拶もそこそこに槍をぶち込んできそうよあの手の人種は』

回りくどいの嫌いそうだもの彼、^{ランサー}とか楽しそうに言う魔女だった。うわあ、確かにそういう感じだよなアイツ・・・次からは拳ならぬ刃で語る肉体言語か、嫌だなあ　　って、あんまり今までと変わらない気がするんだが。

そんなこんなで、ランサーが去った後、暫くはそうやってのほほんと考え事というか会話とかをしていたのだが、

来る！

突如そんな予感が奔る。

門から飛び上がり足場に飛び乗り、視界を最大限に強化し北東に嘗ての俺の家が在る方を見る。

ギリギリ視えるか視えないか、しかし　　視えなくても判る、感

じる、この気配。

始まったのだ。

「問おう。貴方が、私のマスターか」

今でもはつきりと思い出せる。

決して色あせないその情景。

「これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある。」

ここに、契約は完了した」

視えてはいないが、今あそこで何が起きているかがわかるようだ。

「シロウ」

声と共に俺の傍に降り立つ気配がある。

「セイバー、出てきて大丈夫なのか？」

俺の隣に立ったセイバーにそう声を掛ける。
彼女は俺にいつもと変わらず穏やかな表情で、

「ええ、キャスターの許可は得ています」

そう言う俺が向いていた方角へと視線を向ける。

「始まりましたね」

「ああ、始まった」

二人して俺の屋敷がある方角を見ながら言葉を交わす。

ふと、

「シロウ、こちらを向いてください」

セイバーがそんな事を言ったのでそちらに向き直る。
すると、彼女は俺の手を取って、

「私という剣は貴方と共にあり、貴方という鞘は私と共にある。
未だ変わらぬ誓いを、ここに」

そんな事を微笑みながら囁いた。

「　　っ」

言葉が無い。

なんだか照れますね、なんて言って頬を染めるセイバーを俺は見つめる事しか出来ない。

「ふふ、シロウ　貴方からも何か言ってもらわないと、それとも私一人に恥ずかしい思いをさせるつもりですか？」

そんな俺に、セイバーははにかんだように笑う。
む、感動している場合ではない、俺もちゃんと言っぞ。

「　　うん、いつも抜き身の剣みたいなセイバーが傷つかないよう、俺頑張るから。だから、これからずっと一緒にいてくれ」

むう、セイバーはあんなに良い事を言ってくれたのに、俺から出る言葉のなんと華の無い事……。

というか、セイバーの方が俺なんかよりよっぽど強いってのに相変わらず何を言っているんだろっな、こういう所はきつと遙か昔から変わっていないのだろう。

そんな俺にセイバーは崩れるように微笑んで、

「はい、これからもずっと一緒です、シロウ」

そう言ってくれるのだった。

『 見ていられん、俺は引っ込むとする 』

『 あーあーあー、ほんとやってられないわ。私も戻るわ 』

何か聞こえた気がするが気のせいだろう。

それからずっと、夜が明けるまで俺はセイバーと空を、星を、街を眺めて過ごしていたのだった。

なんか大事な事を忘れている気がするの、は気のせいかな？

第十一話 二月二日(2) (後書き)

気のせいじゃありません。

アンタらが眺めている空の、星の下で、眺めている街の交差点でこの時代の、この世界のアンタらはバーサーカーにボッコボコにされてます。

忘れるなよオイ。

はあ、ほんと思うとおりに書けないものですね。

というか、明日というか今日も仕事なのに何やってるんだかわたしや・・・寝ます。

第十二話 二月三日

「お勤めご苦労様

惚気の貯蔵は十分かしら？」

夜が明けて、キャストの工房に戻った途端掛けられた最初の言葉に思わずセイバーと二人してあらぬ方向を向いてしまう。

そんな俺たちに溜息をつくとき、キャストは、

「で、貴方達が仲睦まじく景色眺めてる間に起こったことをとりあえず教えておこうと思うのだけれど」

そんな事を言って手元の水晶に昨夜の街の様子を映し出しながら語りだした。

キャストの方でもこの世界、この時代の俺達のことには気になるらしく、様子は見ていたらしい。

なんでも、セイバーが召喚された後、この世界の衛宮士郎達は新都

へと向かいそして戻ってきたらしい。

恐らく教会に行ったんだろうな、それで戻る途中にイリヤスフィール率いるバーサーカーの襲撃を受けたようだ。

やばい、普通に忘れてた。

ダラダラと冷や汗を流す俺と不覚、と俯いて難しい顔になるセイバーに構わずキャスターは続ける。

なんでも、襲撃地点は冬木大橋の麓、深山町側にある海浜公園だったらしい。

あれ？そんな所でバーサーカーと戦ったのだろうか？

首を捻る俺とセイバーだが、もつと首を傾げる事をキャスターの口から聞かされる事となる。

アーチャーもその戦闘に参加したらしい。

この時のアイツはセイバーに斬り伏せられて戦線離脱状態だと思っていたのだが、どうもこちらでは色々状況が変化しているらしい。まあ、柳洞寺の門番がアサシンから俺に変わった拳句にもう一人増えているなんてとんでもない変化が起きているんだからそんなこともあって当然か。

そう言えば、俺の時はアサシンのマスターが誰かなんて知らなかったし、キャスターが柳洞寺を拠点にするサーヴァントだという事も知らなかったような気がする。

話は続く。

どうもイリヤは手加減というか、様子見というか、そう言った感じが見受けられ双方共に大した怪我もなく中途半端な所で戦闘は終了したらしい。

イリヤは衛宮士郎と、何故かアーチャーに興味津々で、アイツが放った偽・螺旋剣には大層驚いて

「つて、偽・螺旋剣！」
カラドボルグ

キヤスターの説明と共に水晶に浮かび上がるの映像に俺は思わず声を出してしまう。

セイバーも俺と同じように驚いている。

「バーサーカーのマスターも、当然私も驚いたわ。一体何なのかしらね・・・坊やの投影云々の話を聞いていなかったら直接見ていない私ではこれが投影だとはわからなかったでしょうね。まあ、それはともかくとして、不思議なものね・・・坊やと瓜二つのあの子がこれを行つたのならまだ納得はいくのだけれど、ランサーとの戦いの時といいこれといい、アーチャーは戦い方だけなら坊やと似すぎているわ」

もしかしたら一番注意しなければいけないサーヴァントかも知れないわね、と言うとキヤスターは

「私の方でも色々推測はあるのだけれど、正直まだ語れるほど形にできるものは無いわね。というわけで、貴方達の方でこの件は調べらるなりなんなりして頂戴。直接対峙する機会もそっちにあるだろうし私の方でも調べはするけれど期待しない事ね」

他にやっておく事も多いから、とか言つて俺と同じく考え込むセイ

バーを引つ張つて奥へ引つ込んでいつてしまった。

むう、確かにキャスターは戦闘こそ全くしないが、俺なんかより遙かにやる事が多いしな・・・セイバーの『アレ』とかまだ完成していないし、街に張り巡らせた『眼』のチェックなどもある。

これに関しては俺が考えるべき事だろう。

そう思い、俺は直接的な接触はまだ不味いと思ったので、とりあえず昨夜の現場である海浜公園に行つてみることにしたのだった。

匙加減が難しい、というよりわからない。

非常にどうするべきか判断しかねるんだよなあ、こっちの衛宮士郎^{オレ}周辺の事は・・・馬鹿正直に会いに行つて事情を話してしまうという手もある。

そうしてしまえばほぼ間違いなく衛宮士郎^{オレ}は協力するだろう、なんたつて俺だし、まあ信用してもらわないといけないんだが、そこも大丈夫だろう。

それよりも

そうすると、衛宮士郎^{オレ}はどうなってしまうのか？

セイバーがどうなってしまうのか？

衛宮士郎^{オレ}は恐らく何があつても俺だろうと、そういう予感はあるのだ。

しかし・・・彼女が、セイバーがその間違つた願いに気が付く機会を俺達に関わる事で駄目にしてしまうのではないか？

故に本来ならば早々に片を付けてしまふ、付けてしまわねばいけない事柄の幾つかに手をつけないまま今のところ穴熊を決め込んでいる。

いや、穴熊なのはキャスターなんだが、アイツは最早聖杯戦争ではなく『魔女』という以前の自身の在り方との戦いに突入しているわ

けで、なんでも

「私の方は誰も不幸にせずに幸せを掴む、という以前の己を覆すための戦いなのだから他は知らないわ。尤も、私を元々居た道へと叩き落そうとする不屈き者が仕掛けてくるのであればその限りではないでしょうけれど」

とか、なんとか・・・随分と立派？になったもので、俺としてはあのキャスターからそんな言葉が聞けたという時点で嬉しくて仕方が無いのであった。

なんだか、考えが逸れて来たが、うん、そうだよな、キャスターの力になるって決めたんだよな・・・アイツのたった一つの小さな、ほんとうに小さな願い、それを助けようって思ったんだからまずはそれを全うすべきだ。

なに、こっちの衛宮士郎^{オレ}だってきつとセイバーの力になるうって頑張るはずだ。

何でもかんでも俺一人・・・っと、今は俺達だったな、でやろうとするなんてそれこそ贅沢というものだ。

酸いも甘いも苦いも全て俺達で持っていてしまったら、他の奴等には何も残らない。

そんなもの泥棒も同じ事だ。

危なっかしい時に人知れず助けるなりするぐらいできつと大丈夫だ。というか、今回は既にこの方針で決定してた筈なんだけどなあ、数日前にもセイバーにはそう言っただし・・・。

まあ、その考え方も大概贅沢な気もするんだが、今の『俺達』ならばそのぐらいの贅沢は許されてもいいと思うのだ。

それに、危ないときに人知れず颯爽と、とか凄く『正義の味方』っ

ぽいしな。

で、そんな事を考えながら海浜公園に到着したのだが、

「よう坊主　奇遇だな」

まさか、コイツに会う事になるうとは。

何故冬なのにアロハなんだよ、とかいい加減坊主って呼ぶのは勘弁して欲しいとか色々言いたい事があるんだが、とにかく目の前に居るのは昨夜も会った青の槍兵、ランサー氏その人なのであった。

なんで日中のサーヴァントとの遭遇率エンカウントがこんなに高いのだろう。

「そして、何故俺はこの寒空の下、ベンチで野郎とコーヒーなぞ飲まねばなんのか」

割と深刻に呟く。

そう、何故か遭遇したランサーとベンチに腰掛けて雑談なぞする羽目になっている俺だった。

「それは俺の台詞だ」

嫌そうに、心底嫌そうにそう言う冬なのにアロハのこの男・・・勘弁して欲しい、ライダーとは違った意味で場違いにも程がある。180を超える背丈でその格好、そして煙草を吹かすその姿・・・とても堅気には見えない。

それが外見がこの時代の学生である俺と一緒にベンチに 構図としてどう見ても俺が脅されているようにしか見えないのではないだろうか。
で、

「お前さあ・・・今、冬だぞ？何だよその格好」

「手前こそなんだその格好は、似合わねえにも程がある」

互いに互いの格好を罵りあう。

そして沈黙　お互い、自身の格好に思っているところがあるんだろうな、俺はあるし、特に眼鏡が絶望的に似合っていないのは間違いないと思うんだ。

「あー、なんだ、そんな事よりも、お前も昨日ここでやりあった連中の件で来たのか？」

この遣り取りは不毛だとあっちも思ったのだろう、唐突に話題を変えてくるランサーだった。

「ああ、バーサーカーが派手に暴れたらしいな。お前は見てたのか？」

「見てたら態々ここには来ねえだろ」

「それもそうか・・・何か得るものはあったか？」

「ねえな、まあ最初から大して期待はしてなかったが」

そうやってだらだらと話しながら、話題は互いが交戦したサーバーヴァ
ントの感想などに移っていた。

アイツは面白そうなの、アレは厄介なの、コイツは得体が知れない
だの・・・そういえば、

「なあ、ランサー・・・アーチャーはお前からはどう見えた？」

折角なのでコイツに聞いておこう。

直接戦ったコイツなら俺とはまた違った何かがわかるかも知れない
し。

大分得体が知れないだろアイツ、と付け足しながら聞いてみたのだ
が、

「・・・一番得体が知れねえのは自分だつて自覚は無いのか
ね。お前の方が解かるんじゃないか？『視て』たんだろ？大体、お
前に戦い方が似てるからつって何がわかるってんだ　一番得体が
知れねえのは teme だろうが」

というか、それはこっちがお前に聞いてえよ、とか言われてしまっ
た。

確かにそうなんだよなあ。

「うーん、こっちは未来だか平行世界だかの『人間』だから得体が
知れないのは当然だとしてもなあ・・・」

うーん、と顎に手を当て唸る。
すると、

「
」

なんだかランサーが無言でこつちをじつ、と見ていた。

「む、なんだよ」

思わずそんな事を言ってしまう。

「坊主、今なんつった？」

「いや、未来だか平行世界だかから来た『人間』」

なんか凄い顔で睨んでくる。
一体なんなんだろうか。
ランサーはそんな俺に、

「正気かよテメエ、今まで散々駄法螺吹いといて今更あっさり

と正体を明かすか？普通」

呆れてるんだか怒ってんだか、いや呆れてるなコレは・・・そんな表情で息を吐く。

むう、あつさり信じやがった。

今日までの遣り取りで普通は何言っても信じてもらえなさそうなのに・・・そんなに俺は虚実がわかりやすいのか。

わかっていたけど、ここまで簡単に見分けられると正直どうかと思うんだが・・・。

おかしいなあ、それなりに駆け引き上手だった筈なんだが俺。そんな俺に、

「ケツ、十分に駆け引き上手だよこの阿呆が、お陰でこっちは調子崩されっぱなしだ。言ってる事がホントか嘘かもわからねえ狸かと思えば・・・先日までは本当に『嘘しかついてねえ』とは、裏表が無いんじゃないかってはつきりし過ぎてて結果裏表があって無い様なもんだとは・・・。てことはアレか、俺はずっと裏返ったままのもんを裏か表かと凝視してたってか・・・」

なんたるザマだ、これで英霊とは笑い種だ、なんて言ってやれやれと肩をすくめるランサーだった。

つまりアレか、深読みしたら驚くほど浅かったと、お陰で読み違えましたとそう言うことですか・・・失礼な奴だ。

しかし・・・ライダーには本音ばかり言っただけ誤解されたのに、法螺しか吹いてないコイツには一発で信じてもらえとかあんまりじゃないだろうか・・・どうしろってんだ全く。

そんなことを呟く俺に、知るかと呟くとランサーは、

「で、何故今更俺に正体を明かすような真似をした」

そう言つてまた俺をじつと見据えるのだつた。

さつきから見詰められっぱなしだが、傍から見るとほんと何かの追い込みでも掛けられてるように見えるんじゃないだろうか・・・つていうか、何故とかいわれても、

「いや、だって今お前のマスター『視て』ないだろ？」

それ以外に理由なぞないのである。

「
」

またしても沈黙だつた。

今度は非常に面白くないといった表情で、ランサーは俺を睨んだまま黙り込むと、

「成る程な、つまりアレか、テメエはあれだけ遣り合つておきながら、この俺じゃなく 遙か後方で視てるだけの腰抜けばかり意識してやがった、と」

ギシリ、と歯を剥き出しにして獣のように獰猛な笑みを浮べるのだ
った。

やばい、かなり怒ってるぞコレ・・・気に喰わねえ、なんて呟きな
がら抑えてはいるんだろぅが殺気と怒気が体中から滲み出ている。

「いや、ほんと、悪い。今ならなんでも質問に答えるから勘弁して
くれ」

嘘なんか言わないし、なんならメシも奢るぞ、とか言ってみる。

すると、更にランサーの表情が凄い事に、もうなんか歯が砕けるん
じやないかってぐらい食いしばりながら笑顔とか本気で怖いんです
けど・・・。

とか思っていると、いきなりハッ、と息を吐くと

「この野郎・・・本当にそれが素か 馬鹿馬鹿しい」

いや、馬鹿はオレか、こんな裏も表も在って無いが如き馬鹿に振り
回されやがってざまあない、なんて言うところりと俺に背を向ける。
ん、また唐突に帰るのか？どいつもコイツも忙しい事で、なんて思
ったら

「オイ、何ぼさっとしてやがる。メシに行くんだろ」

全く、オレがその手の誘いを断れない事知っててそんなこと抜かしたんじゃねえだろうな、とか言って、さっさとしろよと続けて歩き出した。

「マジか」

本気とはいえわりかし軽い気持ちで言ったのだが・・・ああ、そう言えば『目下の者に食事を勧められたら断れない』んだっただけアイツは、って

目下なのかよ俺、確かに下手には出たが・・・

「何ぶつぶつ言ってるやがる、さっさと行くぞ」

むう、まあそれなりに金を持たされてはいるんだが・・・こんなことに使ったなどと知れたら文句を言われそうだなあ。そんな事を考えながらランサーの後を追うのだった。

いや、金の問題よりもあの格好の奴とメシ喰うのか俺は。

で、飯を喰ったわけなのだが・・・

「喰いすぎだろお前」

「喰えるときに喰うのは当然だろ。オレは金持ってねえからな」

財布の中身が三分の一になるまで食い散らしやがって、セイバーと
いい勝負ではなかつたかコイツ。

テメエは知ってるようだから言うがうちの腰抜けマスターと来たら、だのな
んだのと愚痴まで聞かされて、聞きたいことを散々聞いて、そして
勘定を全て俺に押し付けて帰っていきやつた。

「くそう、覚えてろよ」

「ハッ、そうしてくれると助かる　ちゃんとその借りは戦いで返
してくれることを願ってるぜ未来の英雄エミヤシロウ」

うちの腰抜けマスターには今日の事は黙つといてやるよ、お前もそのつもり
でアッサリ喋ったんだろうしその位の配慮はメシ代の代わりだなん
て言いながら去っていくアイツの背中　全く、敵だというのにサ
ッパリしたものだ。

というか、英霊って連中はどいつもこいつも俺の荒唐無稽な話を否定はしないの・・・器の大きいことで、というか俺は英雄だなんて大したモノではないのだが、アイツなりに俺の話に思うところでもあったのか、次に見える時が楽しみだなって言うてくれやがってやれやれ、話を信じて俺の事も多少なりとも認めてはくれるが、軽々しくこっちの味方になってくれるわけでもないんだよなあ。

「はあ　精々期待に答えるべく精進するとするよ」

ほんととはあいうサツパリした気質の奴とは敵対したくはないんだが、アイツとは戦わないといけないんだろうな。

それがアイツの望みなんだから・・・拳で語る肉体言語があ、暑苦しいことで。

さて、ランサーを見送って、現在地はマウント深山商店街、時間は午後2時過ぎ、これから何をしたものか、なんて思っていると、

視界の端にひよこ、ひよこ、と白い物体が・・・

いや、気が付いてたんだよずっと視線を感じてたし、ただランサーも居たし声が掛け辛いなあとか思っていたわけで・・・。

ま、既にランサーも去ったし、ってかアイツもコレに気が付いてさつさと帰ったんじゃないだろうか、ああ見えて結構律儀な奴だし気を使ってくれたのかもしれない。

というわけで、

「イリヤスフィール」

声を掛ける事にした。

で、声を掛けたはいいのだが、

「
」

こっちを見て立ち止まったまま動かない。

「おい、どうしたんだイリヤスフィール。俺に用があるからさっきから周りをうるちよろしてたんじゃないのか？」

更に声を掛けるのだが、

「
」

なんかむくれているし、どうしたのだろうか？

「ほんとどうしたんだイリヤスフィール。あ、ひょっとして俺じゃなくてランサーに用があつたのか？」

なんてことだ、アイツの気遣いが裏目に出るとは、今からでも追いかければ間に合うだろうか、とか考えていると、イリヤスフィールはなんかプルプルしだして、

「ちがー！ー！ー！ー！うー！」

うがー、と両手を挙げて吼えた。

「うお？！な、何者」

いきなり妖精が猛獣に？！とかわけのわからない感想が頭を飛び交う。

そして商店街のど真ん中でいきなりちびっ子が叫ぶものだから周囲の視線を集め なかった。

まあ、ちびっ子が騒ぐのとか人通りの多いところでは大して珍しくもないものな、うんうん周りも一瞬何事かとこっちを見たがすぐに微笑ましいものを見る感じでそのままスルーだった。

可愛い妹さんね、とか言つて通り過ぎていくおばさんに笑いながら会釈する。

ふむ、この礼装のお陰で周りに違和感を持たれないってのはやっぱり便利だな、目の前に居るイリヤスフィールが明らかに日本人じゃない容姿であつても俺達が兄妹みたく見えるようだ。

ん、つてことは今の俺は周りには外人さんに見えるのだろうか？

「こらーニヤニヤしないで話を聞きなさい！」

いや、それはいいんだがひよつとしてさっきランサーと一緒に居るときはまさか奴の舎弟みたいに見えていたのだろうか、嫌過ぎる。

「レディを前に」

む、ということはあの格好のライダーとかもし一緒に居る姿でも目撃されたら俺はどんな風に見えてしまうのか、怖い、怖すぎる。

「ニヤニヤしたり嫌そうな顔したりして上の空だなんて」

むう、セイバーと歩いてても恋人って言われなくてもいいかも……もしも従者とかメシ使いとか言われたら俺立ち直れないかも……。

「 くの」

思わず思考の海に埋没した俺に、

「甲斐性ナシ

!!」

イリヤスフィール渾身の、決り込む様なアッパーカットが綺麗に顎の下から突き上げるように入り、俺はどこぞの漫画の必殺技を喰らったみたいに宙を舞った。

廬 昇龍覇だと・・・使役するサーヴァント的にはヘクレス猛襲拳ではないだろうか・・・なんだろうソレ、自分の思考なのに意味がわからない。

一体この小さな身体の何処にこんな力が、というか目の前に居る女の子を放って置いて考え事とか馬鹿か俺は、正義の味方はフェミニストじゃないといけないんだよ、とかいう誰かの台詞を思い出しながら、俺はまたしてもズレっかない眼鏡ごと顔面からアスファルトと熱い接触を図るのだった。

そして、なんかだよくわからない夢を見た。

覚えていないが凄いい懐かしい感じのする道場で

いきなり改造手術とかされて

妖精のなんちゃらストーンとかいう石とか鞘みたいなのを埋め込まれ

聖剣王アヴァロニアサンとかいうわけのわからない怪人にされたものの

脳改造の前にバイク生命体 AMAH・V-MAXを駆り逃亡し

改造した組織の魔手から人類を守る正義の味方に

なにこれ

「ハッ」

一体何が、すごいユメを、なんだあれ、今のはまさか死後の世界・
・?!

むくりと顔を上げて周りを見渡す。

そこには先程と変わらぬ商店街、どうやら今のは一瞬の出来事だったらしい。

ひりひりする顎と顔、びりびりする目尻、そして目の前で膨れっ面でつーんとそっぽを向いているイリヤスフィール。

むう、不覚・・・ちびっ子の攻撃を見事に喰らって吹っ飛んだ自分も不覚だがそれ以上に女の子を前に考え事なんかして怒らせてしまった事が何よりも不覚である。

「ごめん、イリヤスフィ」

「イリヤ」

謝ろうとしたら言い終わる前に遮られてしまった。

「ああ、ほんとごめんなイリヤスフ」

「イ・リ・ヤ！」

またも遮られる。

ふむ、

「うむ、ほんとごめんごめんイリヤ」

「
スフィール」

「解かってる？解かってやってるの？！馬鹿にして　！」

うがー、と再び両手を上げて吼えるイリヤ、うわ・・・楽しいな
んか。

いや、途中から気が付いていたんだけどちょっと楽しくなっ
て・・・いかなあ、どこぞの魔女の病気がうつったの
だろうか。だが流石にそろそろヤバイ、これ以上やっ
てしまうとバーサーカーを呼びかねない。
というわけで、

「ごめんなイリヤ、あんまり可愛かったからついつい意地悪を
しました」

素直に、今度こそ素直にイリヤに謝ることにした。

「
」

でも、なんか斜め通り越して垂直になったご機嫌は直らない
ようであるとか言いそうな感じでこっちを睨みながら威嚇して
くるのだった。

やばい、瞳の色が攻撃色だ、元々赤いけど。

「いや、ほんとごめんって、ほら昔から言うたろ　男の子は好きな女の子には意地悪しちゃうもんなだって」

というわけでご機嫌を直してもらおうと言い訳を重ねる。

「　　っ」

お、表情が睨むような感じから拗ねるように口を尖らせた表情に緩和された。

そうしてイリヤは口を尖がらせたまま、

「　　貴方やっぱり嫌い」

顔を少し赤くしながら僅かに俯き加減でそうぼそつと呟いた。

「むう、嫌われちゃったな、やっぱり馴れ馴れしいのがいけなかったか、やっぱりイリヤスフィールと　ああ、ごめんごめん嘘だつて！」

またしても不機嫌そうになるイリヤに慌ててフォローを入れる。

「もう！いい加減にしないとバーサーカーを呼んで捻り潰しちゃうんだから　！」

「いやほんとごめん、もうしないから許してくれ」

三度うがーと吼えるイリヤの頭を帽子越しにぽんぽんと撫でながら本日何度目かわからない謝罪を口にする。
すると、撫でられることに慣れていないのかびくり、と固まったかと思うとまたしても、むーっと唸りだした。

「　いいわ、許してあげる」

暫くそうしていたらそんな事を言ってくれた。
でも続けて、

「　でも、やっぱり貴方嫌い。なにそのお父さんみたいな顔、遠くからこっちを見守ってますってふうなの。わたしそんな顔きらい」

そんな事も言われてしまった。
思わず苦笑する。

いやあ、妹がいたらこんな感じなのかなあなんて思ってしまったからそういう表情になったのかもな。

「まいったな、また嫌われてしまった。何度も言っけど俺はイリヤみたいな可愛い子は好きだからこれは困ったな」

心底困った、といった風に思わず呟いた台詞にまたもやイリヤは固まって、

「もう、最初会った時もそうだけどなんなのすきすきって何度も！そういうのは軽々しく口にしちゃだめなんだから　！」

くわーと顔を赤くして吼えるのだった。

なんか吼え方が若干グレードダウンしたな、先程よりもかわいらしい感じだ。

しかし、

「なんでさ？好きなヤツを好きっていうのは当然のことたる。何かおかしかったか？」

何故怒られたのかさっぱりなのであった。

そんな俺をまたしてもむーっと睨むと、

「呆れた。本当に裏表が無いんだから、もう、わかった　そんなに言っただったら・・・その、わたしも・・・考えてあげる」

そう言って、ぷいっとそっぱを向くのだった。

「ん、考えるって何を？」

はて、と首を傾げる。
そんな俺に、

「もう、レディにそこまで言わせるの？ 貴方がわたしにふさわしくなれば・・・その、好きになってあげるって言ったの！」

うがぁーと未だ嘗てない咆哮が響き渡る。

「
」

うわそう来たか、成る程、これは頑張らないといけないな。

「 ああ、イリヤに好きになってもらえるよう頑張るよ」

思わず嬉しくなってしまったので自然と顔が緩んでしまふ。

「・・・・・・・・うん。がんばってね」

そんな俺に意表をつかれたのかなんのか両手を上げて咆哮のポーズ？を取ったまま、イリヤは俺をぼーっと見つめてそう言ってくれる。

うん、なんか非常にほんわかした雰囲気だなあ、心が洗われるよう

「いやあああああ！エミヤくんが、エミヤくんが幼女に、幼女にフラグを立てたわー！ー！ー！なんてことなの、セイバー一筋なのにはこう言う訳があつたのね！なんって事なの私の努力は全て無駄だったの？！くっ・・・・・・・・未だ嘗てない衝撃の事実だわ、流石の私もどうしたらいいかわからないっ・・・・・・・・！！！」

「なんということだ、凛々しく美しいセイバー殿ならばまあ理解の範囲内であつたが・・・・・・・・まさかこの様な理由だったとは！己・・・・・・・・そこに直れ我が魔剣の錆に、いやましてそんな事をしては俺の魔剣で喰うことになつてこのペド野郎の菌に汚染されかねん　ええい、ならば疾く腹を切れ！その糞尿の詰まった掃き溜めのような臓物を撒き散らして死ね！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・エミヤ、その、なんだ、死にたくなったら俺を呼んでくれ。きつと俺の銃ならアンタでも死ねると思うん

だ。何、引き金を引けば一瞬で終わるさ、苦しむ事もない』

いきなりなんだお前ら、今まで静かだなーと思ってたら突然なんだってんだよ一体。

そして何故唐突に表層に浮かび上がって来る声が一人増えているんだ、また機能増加か？というかフラグってなんだ、ペド野郎とか掃き溜めとかこの野郎そんなこと思ってたのかっていうかセイバーをそういう風に見てやがったのかぶち殺す！ああ、あとお前の銃は転生すら出来ずに完全に消滅してしまうわ勘弁してくれというか何故そんな代物が俺の中に、在るだけで俺が死にかねないぞ、あああもう意味が解からんわ馬鹿どもが！

とかそんな事を考えつつも表情には出さずに普通にイリヤと会話を続行しようと思ったのだが、

イリヤは何かに呼ばれたように唐突に顔を明後日の方向に向け、

「あ　バーサーカーが起きちゃった。もう、ほんととはちゃんとお話したかったのにランサーと一緒にだったり変な事ばかり言うからちつともお話できなかった」

そう言つとさよならも言わず、あつという間に走り去っていった。また。

その途中、ちらつと振り返るイリヤに、

「またなー」

と手を振ると、今度は軽く微笑んでくれた気がした。

さて、こうして心温まるふれあいを終了したわけだが、俺の中で何故か未だに大混乱と言った感じの奴らを、その、どうしてくれようか……。

表立って声を出さなかった事を感謝するべきなのか、方法が見付からないが懲らしめてやるべきなのか、それとも必死で誤解を解くべきなのか……はあ、とりあえずお山に戻るとしようか。

第十二話 二月三日（後書き）

あーあーあー・・・なんなんだろうコレ。

そして終了した貴重な我が休日、うん、寝よう（現実逃避）

第十三話 二月四日（１）

夜が明ける。

今夜もお勤めが終了した。

したのだが・・・無事に終了、と言うわけにはいかなかった。

昨夜、人が襲われたからだ。

襲われているのを目撃しておきながら助ける事ができなかった。

下手人はライダー、被害者は穂郡原学園の女子生徒、この場から現場を目撃した時には既に事が済んだ後だった。

ライダーの腕の中で糸の切れた人形のように力を失った女生徒を発見し、即座にそれ以上の行為を行えないよう牽制のための矢を、巻き込まないよう威力の低い矢を若干外して撃ち込み、その後女生徒から離れたライダーが近くで見ていた慎二マスターを抱えて逃走するまでそれを行った。

その後、すぐに飛び出そうとした俺はキャスターに止められた。

理由は、街中に設置した『眼』と同様に、と言ってもそれよりも数は遥かに少ないが転移の為の基点をキャスターは幾つか設置していたらしく、現場に最も近いそれに転移させるからそれで行けとの事だった。

暫し後にアイツの転移によって現場近くまで飛ばされ、女生徒を救助した後には再び基点より転移させられお山に戻ってきた。

俺の腕の中、虚ろな目であらぬ方向を見る女生徒の顔は・・・俺が、知っている、『知っていた』奴だった。

思い出せない・・・思い出せないが、なんとか思い出した。

美綴・・・確か美綴、という名前だった筈だ。

その美綴をキャスターに任せ、俺はそのまま門番の仕事に戻る事になったのだ。

本当は俺も傍に居たかったが、そもそも僅かな時間とはいえ守るべき場所を離れる事だけでも危険だった・・・ほんの僅かな時間であったが、またしても俺に行動を阻害されたライダーが前回のようはこちらに向かつていたとしたら間違いなく俺は間に合わなかった。ライダーだけではない、他のサーヴァントがタイミング悪く襲撃してきたも境内への侵入を許したかもしれない。それなのに俺を行かせてくれたキャスターに、これ以上の我俣を言うわけにはいかなかった。

「・・・・・・ごめん、美綴」

門に戻る前にもう一度彼女の目を見てそう呟いた時、虚ろだったそれにほんの僅かに光が戻ったように見えたのはきつと俺の錯覚だろう。

その後は幸い何も無かった。

美綴の方も、大事はなかったらしい。

キャスターによると、生命力をゴツゴツ持っていかれていたがすぐに処置したので問題は無いらしく、数時間後に軽く暗示をかけて人目のつく場所にも放り出せば貧血程度で処理されるだろうとの事だった。

もちろん『眼』による監視が可能な場所に放り出すから安心するよ

うに、と言い含められ余計な事はしないように、と釘までさされてしまった。
拳句に、

「この事に坊やが責任を感じる必要は無い　　と言つても無駄なのでしょうね。精々引き摺らないように・・・これも態々私が言う事ではないわね」

なんて、言われてしまった。

あのキャスターに、ここまでしてもらつて拳句にそんな氣遣いまでさせてしまうなんて、つくづく申し訳なく、そして有り難かった。

だが、それでも考えてしまう。

もう少し俺がキャスター程とはいかないまでも魔力やそういったものの感知に長けていれば、そうでなくてももつと漠然とはなくきちんと街の様子を見ていれば・・・。

それ以前に、ライダーがあのような事を行ったのは元はと言えば先日、俺が魔剣で魔力を大量に消耗させてしまったせいなのではないか？
フルンディング

マスターである慎二が自身での魔力供給を行えないのは知っていただろうに・・・そうだ、そもそもあのような結果を学園に張る時点でそのぐらいの事は行つても不思議ではなかっただろうに。

「くそ・・・全くなつちやいない」

思わず呟く。

そもそも、ライダーがあの結界を張った時点で、あのような手緩い手段ではなく確実に仕留めてしまえばこの様なことにはならなかった。

その後、日中にライダーと会った時にもその機会はあったのだ、多少は回復していたとはいえライダーは一撃で仕留めうるほどに身に纏う魔力が少なかったのだから。

それが最善だったのはわかっている。

けれど、俺はそんな方法は取りたくないし取らなかった。

俺はサーヴァントといえど、切り捨てるような事はしたくない。

いやサーヴァントだからこそ、出来ればその願いを知りたかったし、可能であればその願いを叶えてやりたいと、もしその願いが間違ったものだったら思い直して欲しいと考えているから。

キャスターの願いを知ったから、昔のセイバーの望みを知っているから……。

だからあの夜、ライダーを討つ事はしなかったし、その後に彼女と話したのだ。

誤解されてちゃんと話も出来ないまま、俺の想いを一方的に語る事しか出来なかったが、それを聞いて

『でも、何も壊さず、誰も傷つけない未来、そんなものがあつたら本当に素敵ですね』

アイツはそんな事を言ったのだ。

あの言葉、あの背中に嘘は無かった。

あの時俺は、キャスターが自身の事を語った時の寂しげな何かと同じものをアイツに感じた。

きつとアイツも以前のキャスターと同じなんだ、とそう思ったんだ。

暗がりの中から眩しいものを眺めていて、きっと自分はその行けないと思っている。
だから、俺は……

『殴り倒しても陽の当たる場所に引き釣り込む　というわけだな』

『わーい、につくたいげんごー。魔術なぞ花拳繡腿、身体を張った説得こそ厨二の技よ！ですわかります』

『おお、ロリだけじゃなく、大人のオンナもイケるのかエミヤ』

やつかましいわ馬鹿どもが、俺の考え事の腰をヘシ折るのはいいが、いや全然よくないんだが……せめて感想は一つに絞れ　特に最後、なんだそれは。

真剣に考えている時に迷惑な　いや、こいつ等なりに気を使ってくれたんだろうか。

とにかく、夜が明けるまで俺はそうして『中』のコイツらに時々茶化されながら、時々真面目に助言されながら考え続け　いや、意外とアツサリ結論は出てあとは他愛の無い雑談のような作戦会議のようなものになったが……とにかくそうしていた。

そして夜が明け、門番の仕事から解放されキャスターの工房で数日振りの睡眠　ここ数日は街をぶらついたりして休息を殆ど取っていないかったので、を取り外に出て行こうとする俺に、

「それで、結局どうするつもりなのですか？シロウ」

セイバーがそう声を掛けてきた。

どうするつもりとは？などと馬鹿なことを聞きはしない、セイバーなら昨夜の出来事から俺が何を考えるかぐらいお見通しだろう。だから、

「うん、ちょっと学園の結界を『破戒』してくる」

そうアッサリと告げて出て行こうとしたら、

「あー……シロウ、それは止めて欲しい」

気まずそうにそう言われてしまった。

なんでも、キャスターとしてはこちらの眼の届かない所よりも、柳洞寺に近い学園に結界を張っていられた方が都合が良いのだそうで・・。

下手に解除なぞしてこちらの手の出しにくい新都のと真ん中などに設置されても困るし、それだったらすぐに対処ができ、転移の負担の少ないあそこにある方がまだマシだと言う事らしい。

発動しても即座に駆けつけて対処ができるから、精々完成を遅らせる程度の妨害に留める様に、とのことだった。

成る程、自分のマスターである葛木教諭が毎日通う学園に結界を張られても何もしなかったのはそういう理由だったのか・・。俺達の判断に任せてくれていると言っても流石におかしいと思ってたんだが・・。そういうことなら、

「わかった、それなら出来るかどうかわからないけど妨害程度に留めておく」

そう言って、

「ふふ、やはりそれでも学園に行くのですね。今まで避けていたと
いうのに」

セイバーの笑顔に見送られながら学園に向かうのだった。

そして、学園に侵入したはいいのだが人が多くて結界探しどころではなく、下校時刻が過ぎるまで待つ羽目になり現在に至る。

既に夕暮れ時、校舎には殆ど人がおらず、俺はセイバー経由で渡されたキャスター作製の追加装備、バンダナと耳飾とマフラーをして
いや、学園には衛宮士郎^{オレ}が居るんだから魔術師にすら視認できないほどの装備をとということらしいんだが・・・そこまでやったら魔術師などには顔を塗りつぶしているように見えて即攻撃されるって説明はなんだ、意味が無いんじゃないか？ とにかくそうして結界の妨害に、と思っただが・・・

「何やってんだアイツら」

校舎内で派手にやり合っている二人を発見してそれどころではなくなってしまった。

いや、ほんと、何やってるんだろうか・・・衛宮士郎が遠坂に追い掛け回されている。

何故か知らないが凄い既知感を感じる・・・が、俺の聖杯戦争中にはこんな事は無かった筈だ。

ずつと味方として一緒に戦ってたしなあ、でも既知感感じるのは・・・あー、その後にこんな事があったような気がしてきた。

なんだだ。

戦いが終わった後にそういうことがある方がおかしいだろ。

そう考えるとむしろ目の前の光景が正しい在り方な気がしてくるのが嫌だ。

それはそうと、

『無様だな』

ぐっ・・・

『無様ね、どっちも』

言われたくないが・・・

『そうだなー・・・でも、どっちかってーと衛宮士郎の方が』

無様だった。

恥ずかしい、ぶっちゃけ結構な修羅場っぽいのだがなんか脱力させられる光景だった。

んで、暫くその当人達は真剣なのだろうが傍から見ればなんだかなあ、って気分の追走劇が続いたのだが 遂に終わりが来た。

衛宮士郎が追い詰められたのだ。

『あらら、ピンチっぽいわよー。助けなくていいの？』

う・・・確かに助けなくてはいけないだろうが、なんだろう衛宮士郎のピンチを俺が助けるってのは違う気がするんだが・・・。

だが、ここで衛宮士郎がやられてしまったらセイバーが・・・。

なんだろう、人を助けるのを躊躇するとか、嫌だと思ったの初めてじゃないだろうか・・・？

とか考えつつも、とりあえず助けようと頭が考えるよりも先に体が動こうとした時、

「
!？」

悲鳴?!

即座に聞こえた方に走り出していた。

校舎に飛び込む。

悲鳴が聞こえた場所は一階、廊下には誰もいない。

ただ一つ、女生徒らしき人影が非常口の前に倒れ付している。

「
」

急いで駆け寄って無事を確かめる。
出血も外傷もない、ないのだが

「中身が 無い」

昨夜見た光景を思い出す。

「同じだ、美綴の時と 急いで処置を」

そう思ったのだが、

「
お前は・・・！？」

背後から声がして振り向く。

「
」

衛宮士郎^{オレ}が居た。

「なんだお前・・・その子に何をした？今すぐ離れる・・・！」

俺を睨みつけながらそう叫ぶ衛宮士郎^{オレ}、

「何その顔 アンタ、何者？」

そしてソイツの背後に居る遠坂も俺を睨んでいる。

くそ・・・完全に俺がやったものと誤解されている。

「顔が判らない サーヴァント・・・・・・・・アサシン！」

ちい、誤解が変な方向に いや、アサシンの代わりに呼び出され
たし、あいつらから見たら得体の知れない形^{なり}をしているのだからそ
う取られても仕方ないのか？

しかも遠坂は指をこちらに向けて ガンドか！

誤解を解いている暇は無いし、この子を連れて行くのは色々不味い
ここはコイツらにまかせて退くしかない。

開けっ放しの非常口から外に飛び出す。

開けっ放し ？

まずい、そう思い咄嗟に魔剣を顕現させる。

直後に黒いソレは俺の額めがけて飛来した。

「ちいつ　！」

打ち払う。

これは、ライダーの

ソレが飛来した方向に走り出す。

黒い闇めいた魔力が、ソレを放った場所から移動しているのがわかる。

弓道場の裏の雑木林・・・。

垣根を飛び越え、その中に飛び込む　と。

木々の間に隠れるように、ライダーのマスター、間桐慎二の顔が見えた。

笑っている。

「　」

止まらず慎二の方へ走る。

上方から顔に向かって釘のような短剣が突き出される。

その下を潜り抜けるようにして走り抜ける。

まだだ。

左手の魔剣で、頭上を振り払い脳天へと落ちてきたソレを弾く。

耳障りな鎖の音を無視して両手には変化させた干将莫邪を交差させ走る。

「はっ
」

頭上から再び放たれる一撃を右手の魔剣で打ち払う。

次いで左、地面すれすれに着地したライダーが放った回し蹴りを変化させた盾で受け、直後に再度変化させて反撃する。

「
っ！」

ライダーが後退する。

あと僅か、余裕だった慎二の表情が恐怖に歪む。

これ以上近付かせまいと正面から立て続けに剣戟が放たれるがその悉くを叩き返し、

「っ……っ！」

立ち塞がったライダーを押しのける
！

そして、

「ひっ！」

辿り着いた俺に剣を突きつけられた慎二が腰を抜かす。

投了だ。

「あの子を襲ったのはお前の指示か？」

腰を抜かして動けない慎二に剣を突きつけたままそう問いかける。
ライダーはこの状態では迂闊に動けないのか俺を睨むだけだ。

「なっ　なんなんだよ、お前・・・！」

腰を抜かしたまま慎二が喚くが聞き流す。

「忠告しておくぞ、無関係の人間に手を出すのなら容赦しない。二日前、そして昨夜、そして今回、三度目だ　次は問答無用でぶちのめす」

命までは取らないけどな、とは言わない。

言えばコイツには忠告にならない。

「ふ……ふざけるな！何様のつもりだよ！！」

……言わなくても忠告になってないな、そういえばこういう奴だったのか、覚えてないが。

はあ、気が進まないけどもう少し脅しておくべきか、もしくはその手に大事に抱えている令呪らしき文様の書かれた本　コレがコイツの令呪なんだろうな、コレを奪うぐらいはしないとイケないか……。

とか考えていたら、

「テメエ　何してやがる！」

うわ、意外と早く追いついてきやがったな衛宮士郎^{オレ}。

しかし、両手に持った椅子^{ソレ}の足は……強化してあるのか、武器としてはそれなりなんだろうけど、なんか脱力する見てくれだなあ……あつちは真剣にこつちを睨んできているが……。

こうして脱力して追い込みかける気を削がれた俺と、魔剣を突きつけられて青ざめて……やば、魔剣に生命力徐々に喰われてないかコレ　な慎二、そして俺の隙を伺うライダーと衛宮士郎^{オレ}。

なんなんだろうこの構図、というか魔剣の変換は抑えてるのにどんな慎二の顔色が悪くなってるな……まずいな、ここは退いた方が

いきなり無数の光弾が俺目掛けて飛んできた。

「むっ
」

避けてもよかったんだがそうすると慎二が吹っ飛ぶんで魔剣でそれを弾く。

「
」
「！」
」

それと同時に飛び掛ってくるライダーと衛宮^{オレ}士郎。
なんだろう、流れで共闘しやがって俺一人ワルモノですかそうですか。

それを弾きながら大きく跳び退く。

これ以上ややこしい事になる前に退いた方がいいな。
というわけで、身を翻して逃走する。

「待ちやがれ
」
「！」

待たない。

むう、コレじゃホントに俺が悪党みたいじゃないか・・・こんなこ

とになるうとは。

「
無様ねえ」

自身の工房内、そこで遠見の水晶を覗き込みながら私は溜息をつく。
水晶には先程から穂郡原学園内部で繰り広げられていた騒動が映し
出されている。

事の発端はこっちの時代の衛宮士郎がサーヴァントも連れずにこの
こと人気のない校舎をうろついている所をアーチャーのマスター
に発見された所からだ。

「呆れた　ほんと実力に裏打ちされた余裕なんかじゃなく、元々
あだとは理解したつもりだったけれど………本当に力が無い
時から緊張感が足りないのねあの坊や」

全く、頭が痛くなる。

未だに得体が知れない力を持て余している感のあるうちの陣営の坊や、かなりの実力があるのはここ数日で実感したのだが、それでもあのぼやんとした緊張感が足りないアレですら私には頭が痛いのに・・・その原点と思しき人物と来たら・・・。

「ほんと、あんなのに目の前をうろつろされたらどうかしてしまいそう」

本当に、二重の意味で『どうかしてしまいそう』だわ・・・。

以前の私だったらこの場所からでも術を放って誑かしてしまうでしょうね、なんて考えながら八つ当たりじみた魔術行使をもう一人のボウヤに開始したアーチャーのマスターを見る。

嫌だわ、あの娘の心境に非常に共感してしまいそう。

そういえば私も初対面時には坊やに対して術式を叩き込もうとしてセイバーに止められて　その後、結局最大出力で叩き込んだわね・・・。

「あら嫌だ　同類になっちゃうのかしら、あんな小娘と」

くすり、と苦笑が漏れる。

その間にも事態は着々と進んでいく。

感情的に見えて冷静に事を運んでいるように見えるが、やはり冷静じゃないアーチャーのマスターと、まるでなっていない腕前だが必死に機転を利かせて逃げ回るボウヤ、なんというか

「滑稽ね、凄く」

無様、の方があつてるかしら・・・双方ともだけれど、特にアーチャーのマスターが。

ボウヤの方も無様だけれど、無様なりに良くやっていると言つか、よくあの程度の技量で持ちこたえていること・・・

「腐つても鯛、とでも言うのかしら？」

成る程、あのお粗末に過ぎる腕前でこれだけやれるのならば、相応の力がつけば倍々どころではなく実力は跳ね上がると言う事かしら？あの緊張感の無さはそのままで・・・。

いや、セイバーの話によれば決してあの坊やもぼやつとしたままであなつた訳ではないらしいのだが・・・。

なんでも、長い年月を掛けて磨耗しきつて真っ白になった状態から再び積み上げて来たらあなつたとかなんだとか・・・根本の部分は驚くほど不変不変でしたが、とも言っていたが。

つまり長い時間掛けて360度回つて元に戻つたって事なのかしら？

この時代的に言えば・・・なんていうのかしら、強くてニューゲーム？なんだか私がこう言うのは非常に違和感があるわね。

それにしあって、

「・・・嫌ねえ、せめてアーチャーぐらい緊張感持つて戦えないのかしら？」

呟いてみて成る程、アーチャーとは言い得て妙だと考える。

あの坊やに戦い方こそ似てはいるが、あのサーヴァントの戦い方には緊張感が、容赦の無さが、非常さがある。

バーサーカーとの戦いであの矢を放った時もそうだ。カラトボルグ

結果こそ巻き込まれず難を逃れたが、セイバー諸共巻き込みかねなかつたそれをあのサーヴァントは躊躇無く行つた。

あの坊やであればどうだろう？

同じ事が出来るであろうが、しないだろう。

先日のあの坊やとバーサーカーの戦いでも、あの坊やはそれを使う事はしなかつた。

初撃からアレを打ち込み、バーサーカーのマスター諸共爆破してしまえば即座に片がついただろうに、放った時はバーサーカーは空中、尚且つ爆破が出来ない変化させた魔剣ときたものだ。

戦い方は似ているのに、その内に宿るモノが大きく違うようだ。

全く、あのボウヤが0でこっちの坊やが360度周つて云々というのなら、アーチャーは180度あたりかしら？いえ、90度か270度くらいかしらね、等と実に下らない事を考える。

「まあ、あのボウヤとこっちの坊やの中間にあのアーチャーは居るのかも知れないわね・・・」

ぽやんとしていたボウヤが長い時と共に削られて、最も尖つた位置がアーチャー、そしてその後再び角が取れてぽやんしているのがうちの坊やアレなのかも知れないわね。

「ん？」

はて、何か今私は物凄く重要な事を

「
!?」

突如聞こえた悲鳴に私の思考は中断させられた。
いけない、考え事に夢中になってあっちの方を疎かにするなんて。

水晶に視線を戻すと、先程までの追走劇は悲鳴を合図に終了したらしく、役者の二人は文字通り舞台を降りていた。
降りた場所は校舎の一階、二人の前には倒れ付した女生徒と、

「何をやっているのかしらあの坊や……」

その様子を伺うように屈み込んでいる坊やが居た。

……学園に行くとか言っていたが、何をやっているんだか。
昨夜といいこういう事に対する嗅覚とでも言うのだろうか、よくもまあ立て続けに遭遇するものだ。
しかし、

「なんだお前……その子に何をした？今すぐ離れる……!」

傍から見たら加害者に見えるのよねあの構図、ほんとなにをやって

いるのやら・・・。

その後は誤解されたままライダーとの戦闘に突入し、あの二人には更なる誤解を重ねて撤退、と

「はあ　無様ねえ」

眩きながら坊やが退いた後の雑木林の光景をそのまま見続ける。

間違はなく先程の女生徒を襲った当事者であるライダーのマスターがあのだ二人に在る事無い事吹き込んでいく光景を不愉快ながらも見続ける。

曰く、街中の人間から生命力を奪っている魔女が山に居るのだ。

曰く、昨夜に美綴という女生徒、あの子達の知人のようね・・・を襲い、先程も女生徒を襲ったあのサーヴァントも山から来たのだ。

曰く、学校に結界を張ったのもその連中だの。

曰く、偶然ライダーのマスターになってしまった自分も結界を調べている途中でアレを見つけて倒そうとしたが見ての通りやられかけたのだ。

曰く、

曰く、

曰く・・・

やれやれ、昨日の件も含めて全部こっちに罪を擦り付ける腹ね。
拳句、心あるマスター同士手を組まないか？ですって、ほんと良い
根性しているわ・・・私が最も嫌悪する系統だわ、あの男。

尤も、あのボウヤにすら完全に信じて貰えないようでは話にならない
けれど。

アーチャーのマスターに至っては可能性を考慮する、といった雰囲気
で信用なんて全くしてないわねあれは。

アーチャーのマスターは主従ともにあんな小者の言う事に軽々しく
乗せられはしないでしょうけれど、問題はあのボウヤね。

「正義感はその坊やと同じで一端にあるようですし、馬鹿正直に真
正面から問いただしに来そうだわ・・・サーヴァント連れて」

今夜は一波乱あるかしら？などと溜息をつく私に、

「
キャスター」

背後から声がかかる。

工房の奥に居たセイバーが出てきたのだ。

今日、私達は最近の日課となっている『作業』を行っていない。
それ以外にやる事があったのだ。

「セイバー、どうだったかしら？」

その『やる事』を終えたセイバーに声を掛ける。

パーフェクト キャスター
「完璧ですメイガス」

そう言つて満足そうに顔を綻ばせる少女に私も釣られて顔が緩む。
そんな私に、

「これで私も心置きなく戦場へと赴く事が出来る」

続けてそう言つと手に持った『ソレ』を目の前に掲げる。

「そう 新しい貴女の『剣』 お気に召した様で何よりだわ」

そう、完成したのだ。

ここにやって来る前に失われたと言つそれに代わる新しい『剣』が。

「さて、早速なのですがキャスター」

ようやく一仕事片付いたわ、と感慨に耽る間もなくセイバーから声がかかる。

何かしら、と尋ねると彼女は、

「早速実地といきたい　今夜は私が門に立ちます」

などと先程とは違った笑みを浮かべながら口にした。

「　　気の早い事ね」

「予感がするのです　今夜、試すのに相応しい相手来る、と」

苦笑する私にそう言うと、セイバーも同じく苦笑した。

その表情は文字通り何か苦いモノが混じった笑みに見えた。

あらあら、やっぱりあのボウヤがあっちのセイバー連れて来るのかしら・・・まあ、いいわ。

「そうね、元々あの落ち着きのない坊やにいつまでも門番なんて窮屈な事をさせるつもりは無かったし、それで行きましょう」

そう、元よりセイバーの『剣』が完成したら坊やには昼夜問わず好きにさせようと考えていたのだ。

これからは望むとおりの『セイギノミカタ』とやらを頑張って貰って、散々に引つ掻き回して貰おうではないか。

危なくなったら私とセイバーで助けることもできる。

そう、

「これでようやく布陣が整ったわ。坊やには『ジョーカー』として貴女には常に結果が出せる『クイーン』として頑張って貰いましょうか」

「ふふ、士郎が聞いたら落ち込みそうですね。それにしても私が『クイーン』ですか」

「ええ、期待しているわ『プリテンダー』」

可笑しそうに言うセイバーに新たなクラス名　セイバーが二人では紛らわしい　それを送る。

「『プリテンダー』・・・偽者、という意味ですか。シロウの『イミテーター』といい碌なクラス名ではありませんね」

そう言って更に可笑しそうに笑うセイバーに続けて、

「ああ、その前に『ロイヤル』、と付けるのを忘れていたわ。そう、頑張つて頂戴　ロイヤル・プリテンダー元王侯貴族のサーヴァントさん」

そう言うてにつこりと微笑む、ちゃんと笑えているかが少し不安なのは何故かしら？

「
」

セイバーはそんな私の言葉に、ぽかん、とした表情を浮べると、続けて

「ふふ・・・ふふふつ、これは一本取られました。今の私にこれ以上相応しいクラス名はありませんね」

そう言うのと二人して笑いあった。

なんなのかしらね、これ。

また全ては始まったばかりで、目的の物への道程はまだ先だ。

けれど、欲しいものは全て揃っている。

愛しい人も

頼もしい友人も

頼りない、世話のかかる弟のような子も

今までの私が失くしてしまったモノ、得ることが出来なかったモノ全てがここにある。

そう、これで負けるなんて絶対じゃない。

私は、必ず勝ってみせる。

魔女という今までの私の在り方に、この戦いに。

さて、とりあえずは今夜来るであろうお客様の誤解を解いて、優しく追いつ返す所から始めましょうか。

第十三話 二月四日（1）（後書き）

むう、大まかな道筋は私の中で決まっているんですが、その途中のポイント、ポイントに辿り着くまでが迷走している感が強い今日この頃。そして4時間後には仕事なのに懲りずにこんな事やっているのは何故かしら、早く寝るんだ私ー、さーいえっさー寝ます。なんだろうコレ。

第十四話 二月四日（2）

雲が流れている。

上空で幾重にも重なる雲が流れていく。

「風が、出ていますね」

見え隠れする月、そこから途切れ途切れに降り注ぐ月光を背に受け、
呟く。

遊ばせた髪が風に靡く。

私は空を見上げながら、今宵ここを訪れるであろう人物を待っていた。

背後にある山門、ここを通らずしてこの柳洞寺に入る事は、現世に生を持つ身であれば別であるが、肉持たぬ身であるサーヴァントには不可能だ。

であれば彼女は、必ずここに来る。

単身か、はたまたマスターである少年と共に・・・もしかすると他にも同行者が居る可能性もあるが、それでも構わない。

『剣』を手取る。

今、この『剣』を持つ私であれば、そしてこの複数人で争うには些かならず狭いこの場所であれば、敵が多かるうと少なかるうと関係はない。

風が吹き、肩口までかかる髪が揺れる。

編んでいない髪が乱れそうになるのを手で押さえる。

今、私は髪を編んでいない。

キャスターに、あっちのセイバーのように少年のような凜々しさもい いけれどこちらの方が可愛らしくて私は好きよ、などと言われた

ことを思い出して苦笑する。

私は、自分を女性だと思ったことはありません。

遙か昔、そんな事を言った自分を思い出す。

常に冷静に、剣を執る時には感情を止め、情を捨て、女性である事を。これは最初から勘定に入れていませんでしたね。

そう考えると、私は随分と変わったのだなと実感する。

誰も訪れず、遂には誰にも求められる事も無かった王としての目覚め。

人々の幻想からその姿が消え去り、王としての責務を全うしたあの日。目覚めを迎えたあの日、シロウと再会した私はアルトリアという少女に戻ったのだ。

しかし、

「この出で立ちはあるかならず場違いですね」

今の自身の出で立ちはあまりにも戦う者としてはどうかと思う。

白と青のドレス、かつて甲冑の下に着込んでいたそれと似ていて、けれどそれよりも白を強調し幾分華美になった、とても戦いに赴く格好ではないソレを見て思わず苦笑する。

『剣』を新しくして、戦い方も新しくなったのだから格好も、とキヤスターの趣味を押し付けられてしまったのだが・・・少し可愛らしすぎる。

なにか、こう、ふわっとしていて風に舞うような、非常に落ち着か

ない気分させられる。

だが、これも新たな『剣』とセットの装備になっていて相互に効果を高めあう礼装なのよ、などと言われ、実際にそうなのだから困ってしまう。

まあ、この『剣』の戦い方にこれまでの甲冑が合わないのは確かなので、潔く覚悟を　シロウもこの姿を見て、とても綺麗だ、だなんて相変わらず全く飾り気の無い、彼らしい言葉で最大限の賛辞をくれたので　決めたのだった。

・・・・・・決めたのだった。

私も随分緊張感が無くなったものだ、シロウの事は言えないですね。くすり、と思わず笑ってしまう。

本当に緊張感が無いことで、戦いを前にしてこれとは遙か昔の私が　もうすぐその私が来るのだが　見たらなんと言うことだろう。けれど、これでいいと今の私は思うのだ。

再会したシロウと長い時を共に生きてきた。

長い間、穏やかな日々を過ごした。

人間らしさを仕舞い込んで、磨耗してしまったシロウを、そんなあの人の人間らしさを取り戻す　いや、再び積み上げるために。

時には世界を見て周り、様々なものを救うために戦った。

それでも変わらずに残った尊い願いを、理想を歩むために。

そんな私が、以前のままではいけないと思ったのだ。

戦いにおいても、無機質に、情を捨てて戦うのでは再会によって再び血が巡りだした彼のブリキの心を戻す事は出来ない。

そう考え、私は彼女のことを思い出した。

戦いにおいても甘さを捨てきれなかった、それでいて・・・いや、そうだったからこそ華やかだった彼女の　遠坂凜の事を。

今からの私はそうあるべきだと思った。

そう、例え辛く苦しい戦いであっても、絶望的な状況であっても、貴方の傍には私という剣が、その輝きがあるのだと、あの人に魅せつけるのだと、あの人を引っ張っていくのだと。

その結果は何やら予想外の方向へと行ったようですが……。

ですが、私にとってそれは喜ばしいものだった。

私にしかわからなかった、胸に仕舞い込んでいたその思い、その理想、それをようやく出してくれた。

もうこれで、シロウが人間らしさを仕舞い込むことなどありはしない、その胸の内を私だけしか知ることがない、などということはない。

少し寂しい気もしたけれど、それによって多くの仲間も得ることが出来た。

長い長い時間の中で、ようやく得たその大切なもの。

本当に長いことかかりました……。

ほんとうに、一体どれだけ大事に仕舞い込んでいたのやら……そんなだから私と再会なぞする羽目になるのです。

ほんとうに、そんなだから、私がこんな風になってしまふのです。

ああ、困りましたね……シロウの顔が見たくなってしまう、門前に立つてからまだ数時間しか経っていないというのに。

シロウの理想がいつまでも青臭く、色褪せないものであるのと同じように、私の彼への想いもいつまでもこうして瑞々しさに溢れている。

ああ、早く全てを円満解決に叩き込んで、二人で心置きなく街など見て周りたいものですね　シロウ。

……こほん、とにかく、私は今の私でいいのだ。

騎士の信念を捨てたわけではないし、それを汚すつもりも無い。
ただ、今の私は騎士として、アルトリアという少女として、そして
正義の味方と共に歩むものとして

この甘さを、この想いを、決して捨てはしない。
どんな凄惨な戦場であろうと華やかに舞ってみせましょう。

そう考えていると、石段を蹴る音が耳に入ってくる。
その足音が反響し、木々がざわざわと騒ぎ出す。

来たようですね。

さて、この私を、この決意を、アルトリアという少女の自信を、頑
なな騎士様に魅せつけるとしましょう。

始まった。

俺はキャスターの隣で遠見の水晶を覗き込みながら固唾を飲む。
水晶には門前で向かい合う二人のセイバー！

「
」

石段を駆け上がってきたセイバーは、ふわり、と自然体で目の前に現れたもう一人の自分に驚いている。

「
 こんばんわ、良い夜ですね。セイバー？」

そんな様子にとっても柔らかな微笑を浮かべてそう口にする彼女に、その表情にセイバーは愕然とした顔で後ずさる。

まるでその微笑を恐れるように、信じられないという風に、その表情は怯えているようにも見える。

だが、すぐにその表情を引き締めると、

「貴様
」

その顔に怒りを浮かべ眼前の少女を睨む。
暫しの沈黙、その後

「・・・訊こう、その身は如何なるサーヴァントか。ライダーの話では、門番は我がマスターの姿を模した男だったという話だったが」

次は私の姿を模したのか？と問うセイバーに、微笑を完全な笑みに変え、

「『プリテンダー』のサーヴァント、アルトリア・ペンドラゴン」

そう、^{セイバー}プリテンダーは口にした。

「な」

セイバーは絶句した。
当然だ、目の前の彼女は自分自身と同じ姿で、自分の真名を名乗ったのだから。

「貴様！」

「ふふ、驚きましたか？言ったでしょう？『^{プリテンダー}偽者』だと」

^{セイバー}プリテンダーは、セイバーの狼狽ぶりを楽しむように続ける。

私は貴女の偽者だ、と。

何にそんなに狼狽しているのか、と。

真名を知られた、言い当てられた事に驚いているのか？と。

「違いますね、貴女が驚いているのは　自分がこんな表情かおが出来る、という事でしょう。違いますか？セイバーのサーヴァント」

そう言つて笑みを濃くするプリテンダーセイバーに、

「　　っ！ふざ　けるな！」

セイバーは激昂する。

「その姿、その出で立ち、その物言い、全てが耐え難い侮辱だ・・・
・！挙句、名まで偽るか　『イミテーター』！」

む、そうか・・・門番に俺イミテーターつて言うサーヴァントが居ることを聞いていて、出てきたのがプリテンダーセイバーだからクラス名通りに今度はセイバーを模倣したとでも考えたのか・・・。

流石にイレギュラーで二体召喚されたなんて思わないだろうしなあ。

「まさかここまで計算に入れてプリテンダーセイバーをずっとこの山から出さなかったのか？」

隣に居るキャスターに聞いてみるが、

「まあ、あの子の『剣』が出来るまで姿を見せない、というのが本命でこういうのはおまけ程度に考えてはいたけれど・・・なんだか上手いこと勘違いしているわね。未来の自分だ、なんて言うとうちでもおかしな方へ行きそうだからこのまま勘違いさせていいのじゃないかしら？」

どうせ、貴方を見たらすぐに勘違いに気が付くでしょう、何時になるかは知らないけれど、だなんてわりと適当だった。

いいのかそれで？とか思ったのだが、既に貴方のせいでおかしな方向に勘違いされてるから今更よ、なんて言われてしまうとそれ以上何も言えないのであった。

そんな事をしている間にも門前の二人の会話は進んでいく。

「何やら勘違いしているようですが・・・まあ、その勘違いはいいでしょう。それよりも、今宵はどのような御用向きですか？こちらは争いを好まない。そちらから手を出してこない限りは敵対するつもりもないのですが」

なんて言いながらプリテンダーは今まで俺が他の連中に行ったものと同様にこちらの目的を、俺なんかより上手に丁寧に、セイバーに語った。

しかし、

「戯言を　貴様、姿形だけでなく言葉までも偽りか！」

やはりいきなりそんなこと言われても信じてもらえないか。

それ以前に夕方の学園での事があるし誤解されたままなんだろうな・
・衛宮士郎からどう伝えられたのか知らないが・・・。

って、そう言えば衛宮士郎はどうしたんだ？

「ふう、やはり信じていただけませんか・・・。それでは貴女のマスターに・・・。そう言えば姿が見えませんが　まさかサーヴァント一人に戦わせて遠くで高みの見物でしょうか？」

セイバー
ブリテンダーも同じ事を思ったらしく、そう尋ねる。

いや・・・。きつと最初から気が付いていたなアイツ、というか最初にそれに思い当たらない俺がぼんやりしてるんだろぅなきつと。

「偽りしか口にしない者に私がそれを言うとも思っているのか？」

しかし、セイバーは既に問答をするつもりは無いのか、不可視の剣を深く構え直している。

「まさかとは思いますが、貴女の独断ですか？感心しませんね、騎士ともあろうものが主を蔑ろにするとは」

そんなセイバーに構わずプリテンダー^{セイバー}は呆れたように呟く。

あー・・・そう言えば、俺もそんな感じで置いていかれた事があったような気がする。

その言葉に、

「最早語る事など無い」

それだけ言つと、セイバーは

「さあ、鎧を纏い、剣を抜け 全て不愉快だが、特にその『剣』は極め付けた。今すぐ叩き折ってくれる ！」

その剣をプリテンダー^{セイバー}が持つ『剣』へと向ける。

そう、彼女の持つ鞘に納まったままのそれ・・・勝利^{カリバー}すべき黄金の剣と非常によく似た『剣』へと。

だが、

「抜け とは。ああ、勘違いしないで欲しい」

その言葉にプリテンダー^{セイバー}は苦笑して、

「この『剣』はこれが抜き身なのです」

そんな事を言った。

そう、俺が創り、キヤスターが手を加えた彼女の新しい『剣』
それは鞘に納まった 否、鞘の中身が無い、鞘そのものが『刃』
の剣。

「銘^なは 人斬り包丁に銘など無粋ですね。まあ、名乗らないもな
んですし……『^{フォルスカリバーン}偽・黄金剣』とでも」

そう言つて顔に笑みを浮べたままその剣を、『^{フォルスカリバーン}偽・黄金剣』を掲げ
る。

「
」

その銘を聞き、再び激昂するかに思えたセイバーだったが、既に怒
りを通り越して冷静になつているのか、戦いを前に感情を捨ててい
るためか、無言で剣を構えたままプリテンダー^{セイバー}を睨む。
そんなセイバーに、続けて

「それに、鎧を纏え　と？それも違います。セイバー、私は既に纏っている」

セイバー
プリテンダーはそう言つと、ごう、という音と共に彼女の周囲に風が吹き荒れ、身体から凄まじいまでの魔力が吹き上がる。

「全く・・・いつまでもそんな勘違いばかりしていると　死にますよ？」

くすり、と笑い一歩、石段を降りる。

「　　つ」

その吹き上がる異常なまでの魔力に一瞬怯んだセイバーが一步前に出る。

そして、跳ねる。

セイバーとプリテンダー、全く同じ姿をしながらも、全く違った出で立ちと雰囲気の両者。

その異なる騎士の戦いは、月光の下で口火を切る。

剣戟が振るわれる。

幾重もの太刀筋。

弾け、火花を散らす剣。

数十合を超える立会い。

セイバーが何度目かわからない後退を余儀なくされる。

上段に位置したプリテンダー^{セイバー}は一步も引くことなく、涼しげな笑みを崩す事も無い。

石段を駆け上がりとうとするセイバーは一步も詰め寄る事が出来ず、それどころか幾度となく後退を余儀なくされる。

「は
」

何十回目となるセイバーの踏み込み。

プリテンダー^{セイバー}は、手にした偽^{フォールスカリバーン}・黄金剣をその形状から受けるである

う空気抵抗をまるで感じさせない速度で振るう。

セイバーの剣が火花を散らし、幾度かそれを繰り返し再び押し返される。

再び後退し、セイバーは齒噛みする。

彼女は未だ相手の剣と『打ち合う』事すら出来ていない。

そう、先程から火花を散らすのはセイバーの剣のみ。

セイバー
プリテンダーがその剣を振るう度に現われる、不可視の『何か』によってセイバーの剣はその間合いに相手を捕らえる事すら出来ない。

それどころか、その『何か』を受けるので精一杯で、前進すらままならない。

一撃一撃はそう脅威ではない。

セイバーならばその『何か』を叩き伏せてそのまま前進も可能だろう。

実際に彼女はそうして一撃を叩き伏せ、そのままの勢いで前進したが、プリテンダーは信じられない速度で回転し、舞うように二撃目を、その後も立て続けに剣を振るった。

己が周囲に吹き荒れる風に乗り、舞うようにしなやかに。

身体から莫大な魔力を放出しながら、軋む様に強引に。

信じられない動き、ありえない軌道、そして放たれる見えない『何か』。

何度かは打ち払う事が出来ても、次第に押し込まれ、切り返す剣が間に合わずに後退を余儀なくされる。

「っ

」

それでも更に押し込まれ、更に数段後退する。

「ふむ、やりづらいですね。セイバーのクラスの対魔力は伊達ではないということですか・・・刃が減衰させられる程とは」

セイバー
ブリテンダーは笑みを崩さず、その場から動かない。

「刃・・・だと？貴様のそれは風を刃とする剣だというのか？」

「正確には、私の『力』を変換、増幅し風を操るのですよ。さしずめこの剣は変換機といった所でしょうか？」

セイバー
セイバーの問いにブリテンダーはそう答えると、彼女の身体がふわり、と浮上する。

『フォルスカリバーン
偽・黄金剣』、キャスターが用意した礼装と、エミヤシロウとキャスターで作り上げた設計図、その二つを基にエミヤシロウが投影した剣。

鞘しかない、空洞の剣であり、その内部はキャスターの手により無数の魔術文字が所狭しと彫りこまれている。

最早それは剣というよりも杖と言った方が正しいかもしれない。

セイバー
ブリテンダーの持つ『炉』としての力を増幅し、変換、出力する端

子、風を操るその剣。

それによって今の彼女は、風に乗って自在に軌道を変え、魔力放出によって更にその軌道を加速させ、変化させる事が出来る。
更に風を刃とすることによって見えない大剣を振るう。

「
」

そんなプリテンダーセイバーの説明にセイバーは相手を睨みつけたまま何かを考えるような間を置いた。

「成る程、先程からの不可視の攻撃はそういう事か。プリテンダー、貴様の剣は
」

「そう、貴女の剣・・・その鞘と似たような仕組みです。解かってしまえばどうと言う事はない」

セイバーの問いに隠す事でもない、と飄々と答えるプリテンダーセイバー。

「さあ、種もわかったことですし、次はどう攻めますか？セイバー」

余裕を崩さず、笑みを浮べたままそう続けるプリテンダーセイバーに、

「知れたこと　今までは得体が知れないが故に真っ正直に受けてやったが、その曲芸が私に効果が薄いというなら押し通るまで」

そう答えるセイバーの身体から魔力が吹き上がる。

「貴様のその刃が私の対魔力で減衰するというならば、今まで通り付き合ってやる義理はない」

そう言いながら、剣を大きく、剣先が背後に来るほどに大きく振りかぶる。

「調子に乗って、種を明かした事を後悔させてやろう」

直後　ばん、という大気が爆ぜる音と共に不可視だった黄金の剣がその輝きを顕にし、それと同時にセイバーは音速を越えた速度で、大気突き破りプリテンダーへと突進した。

『インビジブル・エア　風王結界』、大気を圧縮し屈折させその刀身を隠す幻惑の鞘。

その効果を解き、自身の背後でその圧縮した大気を爆ぜる事による突撃の加速、魔力放出による加速に上乘せされたそれによって音速を超えた超高速の突撃。

如何にプリテンダーが不可視の斬撃を高速で、舞うように繰り出したとしても、この速度であれば精々一、二撃、その程度であれば先

程も防いだまま前進することが出来た。

それに、対魔力で減衰されているのならば、更に魔力放出を上乗せしたこの状態であれば更に威力は減衰する。

それならば一、二撃程度耐えられぬ筈がない。

そうして、セイバーの神速の突撃を、

セイバー
プリテンダーは、先程までの斬撃も放たず真正面から迎え撃った。

衝突する両者、その余波だけで山門と周囲の石段は見るも無残に弾け飛ぶ。

「っ
」！

セイバーは驚愕する。

この速度、この威力、受ければ宙に漂う木の葉のような、身の軽さ、俊敏さが取り得であろうこの相手であれば、抵抗する間もなく弾け飛ばし、斬り伏せる筈だった。

避けられる事も考えられたが、それであればそのまま雪崩れをうって敵の本陣に斬り込むだけだと、そう考えていた。

だが受けた。

ならば、その偽物の剣ごと叩き斬ってくれようと、そう考えたのだが、

「驚きましたか？何も軽業師の真似事だけが私とこの剣の取り得ではないのですよ」

セイバー
プリテンダーが相も変わらず涼しげな表情でそう口にする。
彼女は、弾け飛びもしなければ剣ごと叩き斬られるわけでもなく、
宙に浮いたまま、一步も下がることなくセイバーの突撃を受け止めていた。

セイバー
プリテンダーの剣が、服が淡い光を放っている。
彼女の背から凄まじい量の風と魔力が吹き出している。
それはまるで羽根のように吹き上がり、セイバーの推進力と拮抗する。

「その勇敢さ、潔い決断　悪くはないのですが　」

セイバー
プリテンダーは余裕の表情を崩さない。
セイバーはそれに答えずこのまま押し切らんと力を、魔力を更に注ぎ込む。

しかし、微動だにしない。
セイバー
プリテンダーの羽根が更に出力を上げ、大きく羽ばたく。
セイバーは鎧を構成、維持する魔力をも注ぎ込み更に踏み込む足に力を込める。

しかし、

「けれど、この場　いえ、『この私』に対してで言えば、それは失策でしたね。セイバー」

セイバー
そうプリテンダーが口にした瞬間、彼女の纏う雰囲気、力の波動

が、変化していく。

「種を明かした事を後悔　？馬鹿なことを」

セイバー
ブリテンダーの羽根が静かに閉じてゆく。

そうして拮抗していた力が失われれば、当然セイバーが優位になる。
筈なのだが、

「っ　！　うつ、くっ　！」

セイバーの顔が苦痛に歪む。

セイバー
ブリテンダーの羽根が閉じていくのと同じくして、セイバーの推進
力も　推進力だけではない、魔力までもが減衰していく。

「貴女には効果が薄いのが解かったのですから、別の方法を探る事
にしてくださいよ」

セイバー
ブリテンダーの羽根が完全に閉じきり、彼女が身に纏っていた風が
消え、宙に浮いていたその身体が地に降りる。

「言っただけでしょう？」

いつまでもそんな勘違いばかりしていると死ぬ、と」

それと同時に、セイバーは力なく地に膝を着いた。

「　　っ　　あ　　」

地に膝を着き、セイバーは苦しげに息を漏らす。

足に、身体に力が入らず、立つ事もままならない。

剣を地に突き立て、なんとか立ち上がろうとするがままならず、出来る事といえば

「っ・・・何を・・・した・・・」

目の前で微笑を浮べてこちらを見ているプリテンダーセイバーを睨みつつ問うことだけだった。

「呆れました。まだそんな事を問うのですか？解かっているでしょうに」

そんなセイバーにプリテンダーは呆れたように呟くと、

「喰^たべたのですよ、貴女の魔力を」

大した事ではない、という風にそう口にして、語りだした。

セイバー
プリテンダーの身体に在る『器官』 そこに在るだけで様々なモノを取り込み有象無象のエネルギーを生み出す生きた『炉』。
その気になれば周りの物全てをエネルギーに変換し、そしてそれを出力することの出来る端子。

エミヤシロウの『魔剣』とはまた違う、セイバー
プリテンダーに備わったその力。

無機物すら分解し取り込むその力で周囲の全てを食い荒らす。
当然、先程まで纏っていた風や魔力も問答無用で変換してしまうので両立が難しいが、兎に角それによってセイバーの魔力の大部分を奪い取ったのだ、と。

「そんな 馬鹿、な」

セイバーは信じられないと言った面持ちで呟く。
その『器官』の能力もだが、それよりもそんなもので自身の魔力が

こつも簡単に喰われてしまうなど有り得ない。
生物を取り込むなど、ましてやサーヴァントの魔力をこつも簡単に喰うなど出来うる筈がない。

「確かに、空気中にある大源^{マナ}など違い生物や霊体を取り込むのは簡単ではありません」

確かに、大源^{マナ}や空気中の様々な物質、魔力などと違いそれらを変換し取り込むのは簡単ではない。
というより普通は無機物ですら不可能に近い。
だが、それを可能とするのが彼女である。
しかし、それにも限度がある。

特に、サーヴァント 英霊といった『格』が高いものを、いくら魔力で構成されているとはいえそれらを変換し取り込むなど容易な事ではない。

セイバー
プリテンダーであつてもじわじわと削り喰うのが精一杯だろう。
それでも、魔力を供給するマスターがいれば致命傷になりはしない。
戦いながら喰らえば流石にその消耗も激しくなるし、セイバー
から直接傷を付けられればかなりの痛手にはなるだろうが・・・。

「そもそも、そんな事は私と貴女の間では関係ないのですよ。まだ気が付きませんか？セイバー」

全く、そんな事だからこの様なのですよ、とセイバー
プリテンダーは呟いて

「こと貴女に関して言えば 私は水を飲むかのように、息を吸うかのように簡単に魔力を奪うことが出来るのですよ」

そう口にし、

「な
」

絶句するセイバーに構わずに続ける。

「まだ解からないのですか？言っただでしょう、『私は、貴女の、偽物だ』と。貴女を構成する魔力は、私の魔力とほぼ同一なのですよ？自分の血液を輸血するのに拒絶反応の心配をしますか？」

『私自身の魔力を自身の身の内に取り込むのに、何の、抵抗があると思うのです？』

そう言って、最早動くことができないセイバーに歩み寄り、

「結局貴女は 最後まで私を偽物と侮り、勘違いしたままで敗れたのですよ。私の攻撃が減衰したのも、対魔力だけではない。それにも気がつけないとは
」

腕を、握った剣ごと掴み上げる。

「あ
」

からん、とその剣がセイバーの手から滑り落ちた。
最早抵抗するすべがなくなった彼女に、プリテンダー^{セイバー}が続けて声を
掛けようとしたその時、

「やめろおおおおお！」

下段から、声が響いた。

「ようやく、来ましたね」

遙か下段から駆け上がってくるその少年を見て、自分の顔が綻ぶのがわかる。

「っ……シロウ、いけ……ない……」

それとは対照的にセイバーの顔は更に苦渋に歪む。
しかし、そんなセイバーの事を知ってか知らずか少年は一目散に二人の目の前まで駆け上がってきた。

「お前は……!」

少年、衛宮士郎は私の顔を見て、一瞬驚いた表情を見せるが、

「セイバーを……離せ……!!」

すぐにそれを引き締め、意思の籠った表情でこちらを睨みつける。

彼に睨みつけられるのは堪えますね。

「この状況、自分の身も危ないのにサーヴァントの心配ですか？」

笑顔を浮べたまま目の前の少年に問いかける。

独断で飛び出して、拳句敗北し、マスターである貴方までこうして危険に晒している。

そんな者を命を掛けてまで助けようとするのか？と。

「そんなの当たり前だろ　！」

少年はそう叫び手に持った木刀を構える。

とりあえずは強化を施して多少なりとも丈夫になっているだろうが、そんなもので向かってくるつもりだろうか。

「　　ふふっ」

楽しくて仕方がない、嬉しくて仕方がない。

私は自分の^{セイバー}為にこんなに必死になってくれている少年がとてとても好ましく思えたので、

「なら、離しましょう」

そう言つて手を離し少年の士郎の方へ放り投げる。

士郎は慌ててセイバーを受け止めて、そのままバランスを崩して石段を数段転がる。

それでも、受け止めた少女は傷つけないように強く抱きしめて。

「セイバー……無事か!？」

「シロウ……駄目です……早く、逃げ……」

「馬鹿野郎……!こんな状態のお前を置いていけるか!」

目の前で自分を置き去りにして展開される会話に懐かしいものを感じ出し、笑いが込み上げそうになる。

と、いけませんね

「さて、仲が良いのは結構ですが」

ここは一つ、この二人の為に少し厳しくいかねば、と

「このまま帰れるとも思っているのですか?」

そう、声を掛ける。

そして、またも二人で、逃げろ、逃げない、放って置け、放って置けるか、などと問答を繰り返す。そんなことしている間に斬り捨てられるとか考えないのですかね？　今は士郎が木刀を持って私の前に立ち塞がっていた。

「な　　逃げてと言っているのに、どうして……！」

「セイバーを迎えに来たのに一人で帰ることなんて出来ない。逃げるのはお前のほうだろ」

相変わらずそんな事を言い合う二人を見ながら、

「敵を目の前にして余裕ですね　いきますよ?」

そう言つて軽く、本当に軽く、剣を振る。

「　　っっ!」

だが、それだけでも今の士郎には強すぎるのか木刀があっさりと碎け散り、後ずさる。

「次　　行きますよ?」

再び軽く剣を振るう。

次は防ぐものが無い、避けようとするが反応が間に合わずに斬撃をまともに受け、士郎が血を噴出しセイバーのすぐ横に倒れこむ。致命傷ではないもののそれなりに血が出ましたね。

「シロウ……っ!」

セイバーにもその血が降りかかる。

士郎は痛み能耐えながらもゆっくりと立ち上がってくる。その眼はまだ諦めていない。

いや、諦めるものかと、ここで退いてなるものかと必死に力を込めている。

いい眼だ、力こそ圧倒的に不足しているが、やはり目の前の少年はエミヤシロウだ。

そう思いながら、再び剣を振るう。

「　　っ！」

士郎の身体が石段を滑っていき、立ち上がろうと必死に力を込め、だが立ち上がれないセイバーに衝突し、止まる。

「シロウ　　シロウ・・・・・・・・っ！」

セイバーの声が響く、

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・ぐっ・・・・・・・・よか、った。・・・・・・・・セイバー、の・・・・・・・・後ろに転が・・・・・・・・り落ち、て、行っ・・・・・・・・ちまつ・・・・・・・・た、かと・・・・・・・・思っ、たけど・・・・・・・・」

その声に安心したかのように士郎は立ち上がる。

その眼は先程と変わらず、力を宿したまま、こちらをセイバーに近づけないように前に出てくる。

さて、気を引き締めて悪役を続けるとしましょう。

もう幾度目かもわからない。

剣が振るわれ、血を撒き散らし後退する少年を見ながら私は考える。

倒れなくなりましたね。

最初のうちは、斬られるたびに血を撒き散らし後退して行ったその少年は、次第に後ろに下がる距離も減り、斬られても倒れなくなっていた。

「はあ・・・づう・・・ぐっ、あ・・・!!」

袈裟懸けに斬られ、左肩からざっくりと胴まで届く斬り口、だが土

郎はセイバーに衝突する直前で踏み止まる。

「動くな……！頼む、もう動かないでくれ、シロウ……
っ！」

未だ立ち上がれないセイバーが、その士郎の足にしがみ付く様に止めるに入るが、その手には力が入らない。

しかし、再び前に出ようとした士郎はそれに動きを止め、視線を一瞬セイバーに、その後私に固定したまま呟く。

「駄目だ……俺が倒れたら、きっとコイツはセイバーを斬る。俺は、半人前だ、遠坂の言うようにへっぽこだから……出来る事なんて身体を張ることぐらいだ」

そして、再び前に出ようとする士郎。
それを、

「……………どうして。何故、無理だとわかっているのに……！」

セイバーは必死に止めようとする。

「……いらない。貴方の助けなどいらない。プリテンダーが言う通りです。私は貴方の方針に背き、勝手に戦い、敗北した……」

そのようなサーヴァントを、何故自身を犠牲にしてまで助けようとするのですか……！」

その言葉を見殺しして、士郎は再び前に出る。

斬撃が走り、血を撒き散らし再び後退するが、やはり倒れない。

「あ　っ……！止めてくださいシロウ、もう……もうこれ以上は駄目だ……！本当に、本当に死んでしまふ。私の身などどうでもいい。そんな物より、貴方は自身の命を　」

「　断る。俺は……弱い自分を守って、その代わりに傷つく誰かなんて認められない……！」

最早、懇願に近くなったセイバーの声に、そう答えると再びシロウは前が出る。

「　それに、セイバーが今そうなっているのも、元はといえば俺が未熟だからだ。ごめんな、魔力供給も満足に出来ないマスターで……だから、せめてこれぐらいは　」

そう言つと再び士郎の身体が切り裂かれ、血を撒き散らす。だが、今度は後退する事は無い。

「あ
」

セイバーの呆然とした声、それに足を止めることなく、身体を庇うように両腕を前に出し、交差させながら前に出る。

「あ、やめ……やめて……！」

斬撃が走る。

血が飛沫を上げる。

士郎は僅かに後ずさるだけですぐに前に、

「やめて……頼む……やめて、くれ……ッ！」

繰り返される凄惨な光景に、今にも泣き出しそうなセイバーの声だけが響いていた。

ざしゅ

ぎぢぎぢ

ざくり

ぎぢぎぢ

ぎぢり

ざしゅり

ぶしゅり

がちがち

もうどのくらい続けたらろうか。
倒れなくなった、僅かにしか下がらなくなった士郎に立て続けに『刃』を叩き込む。

血が飛沫をあげ、僅かに後退するが歩みを止めない土郎。身体はぎちり、がちりと音を立て、その傷をふさいでいく。

斬撃を叩き込む、徐々に威力を上げていったそれは、既に通常の出方にまで上がっている。

だが、倒れない。

だが、下がらない。

もはや石段は少年の流した血で真っ赤に染まっている。

「やめて……いや……シロウ……っ！」

その流れる血で真っ赤に染まったセイバーが泣きそうな声でそう懇願する。

だが、止まらない。

彼女以上に真っ赤に染まった少年はそれでも止まらず私に向かって歩を進める。

その眼は既に私を見ていない。

ただ前を、その身を切り裂く風を越えてただ前に出る事のみを

更に出力を上げる。

止まらない。

「無理だとわかっているのに止まらないのですね。貴方は」

思わず呟く。

言葉は返ってこない。

わかっている、これは私がただ自分に確認しているだけだ。

「何をして無理だとわかっているのに、ずっと繰り返す。．．．
例えばそれが無駄だとしても、挑む事に意味があるのだと信じるかの
ようだ」

呟きながら、斬撃の威力は上がっていく。
既に出力はセイバーと打ち合っていた時のものと同じ水準まで上が
っているというのに、彼は止まらない。

ああ、やはりこの少年もシロウなのですね。

そう思つて、嬉しいのか悲しいのかよくわからない気持ちにさせら
れた。

長い夢を思い出す。

血塗れて、磨り減り、磨耗して、それでもなおその尊いユメを、自
分自身の道を踏み外す事が出来なかったあの人の背中を
エミヤシロウ

「敬意を表します。セイバーのマスター、ですが」

だから、

「貴方が挑むものは私などではないでしょうに」

少し早いかもしれませんが、私からこの言葉を送る事にしましょう。

「貴方の挑むべきは、常に自分自身　そうでしょう？」

びくり、と少年の身体が反応する。

それでも歩みは止まらず、私も手を緩める事はしない。

「戦いになれば、貴方に勝ち目など無いことはわかるでしょう。貴方の力では、何をやってもサーヴァントに勝つことはできません。ならば、せめてイメージなさい。現実で敵わないのであれば、想像の中で」

アーチャー、申し訳ありませんが貴方の言葉をお借りします。

「自身が勝てないのなら、勝てるモノを幻想しなさい。

それこそが、貴方に出来る・・・いや、貴方にしか出来ない戦いである筈なのだから」

「
」

言い終わると共に、目の前の土郎の雰囲気に変化したのがわかる。
その眼はやはり私を見ていない。

歩みが先程より力強さを増した気がした。

斬撃を振るう。

今度は押し戻されもしない。

踏み越える。

その身を切り裂く風を踏み越えて一歩ずつ前へ。

「お
」

がちり

がちり

がちり

一歩踏み込むごとに、彼の中の何かが噛み合っていくのがわかる。

「お
」

がちり

がちり

がちり

セイバーが必死に何か叫んでいるが聞こえていないようで、ひたすらに前を見て歩みを進める。

「おお

」

がちり

踏み越える

がちり

踏み越える

がちり

その風を、踏み越えて

遂に、彼は私の目の前まで辿り着いた。

左手を振り上げる。

がちん

撃鉄が、落ちる音がする。

「オオオオオオオオオオオオ　　！」

そして、咆哮と共に現われる黄金の剣。

「な　　！？」

セイバーの啞然とした声、それもそうだろう。

彼の手にあるのは、王を選定する岩の剣、永遠に失われた彼女の剣、その銘は『勝利すべき黄金の剣』^{カリバーン}

これでアーチャーやランサーの宝具でも投影されたりどうしようか
とっていたのですが・・・安心しました。

やはり士郎の初めては私でないといけませんよね　　^{セイバー}シロウ？

そんな事を考えた刹那、

「く あああああああ !!!」

士郎は一步踏み込みながらその勝利すべき黄金の剣を私に向かって振り下ろす。

見事です。
ですが、

「ふ つ！」

構成がまだまだですね。
その振り下ろされた剣を、私はガラスでも割るかのように、士郎ごと一撃で叩き斬った。

「が つ……!!」

「シロウーーーーっ!!」

今までで一番深い傷・・・当然だ、私の剣で直接斬られたのだ。
その刃は、士郎の肩口から腹まで達している。
ぐらりと後ろに倒れこむと同時にずるり、とその身体から剣が離れ

る。

そのまま石段を転げ落ち、セイバーの少し手前で止まる。

「シロウ　シロウ・・・！！」

いまだ立ち上がれないセイバーが、這いずるようにして士郎に近付き抱き起こそうとする。

しかし、手に力が入らないのか上手くない。

「あ　　」

士郎の口から声が漏れる。

今までも生きているのが不思議だったぐらいだ、次こそは助からない。

恐らく事情を知っている私でなければそう思うだろう。そのぐらい酷い有様だった。

「嫌だ　シロウ、シロウ・・・っ！死んでは　いや・・・死なないで・・・っ！」

セイバーもそう考えたのだろう、既にその目には涙が浮び、騎士としての面影は何処にも無い。

ふう、士郎はまだ折れていないのに、見ただけだった貴方が先に折れてしまっただけです。

いや、見ていただけだったから　見てることしか出来なかったからこそ何よりもそれが堪えるのですね。

騎士として主を守るところか、その意に反して戦いに赴き、敗北し、主の命を危険に晒してしまった。

しかも、目の前で自分は何も出来ず、マスターである少年はこうして無残に切り刻まれ、それでも自分を守ろうとしている。

そしてその命が目の前で尽きようとしている。

ただ敗北するだけではこうはならなかっただろう。

だが、目の前で何も出来ずにこうして『何時間も』このような光景を見せつけられたら

「ごめん・・・なさい・・・」

セイバーの口から嗚咽と共に謝罪の言葉が紡がれる。

「・・・ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・私が、私
なんか・・・っ・・・。私なんか・・・貴方のサーヴァ
ントになつたせいで・・・っ・・・!」

こんな自分は貴方の剣になどなるべきではなかった。

そう言いながら涙を流すセイバー。

その姿を見ながら、思い出す。

『私は 王になどなるべきではなかった』

あの血塗られた丘を、あの日抱いた慟哭を。

胸が痛む。

胸が軋む。

きっと、目の前の私はその光景も思い出しているのだろう。
悲嘆に暮れて詫び続けるその少女、その言葉を掛けられた少年は、

「ふぎ、けんな……！」

まだ、折れてはいなかった。

がちん

音がする。

ぎぎぎぎぎぎ

最早どうあっても助からないと思われた傷が、分かれた体が、無数の剣によって、剣の刀身のようなものによって繋ぎ合わされていく。

「シロウ……！！！」

「ふざけんな 俺の、サーヴァントが・・・お前、以外・・・誰がいるっていうんだ・・・!」

立ち上がる。

ブリキのような音を立て、ぎりぎりときこちなく。それでも眼は真っ直ぐに前を見て、

「俺は、セイバーを迎えに来たんだ。泣かせるためとか、そんな事を言わせるために来たんじゃない・・・!!」

そう言って、再び私と対峙する。
左手を掲げ、勝利す^{カリバーン}べき黄金の剣を投影し、今にもこちらに向かつてこようとする士郎に、

「ふむ、でしたら帰ったらどうです？二人で」

私は微笑を崩さないままそう言い放った。

「
は？」

私の言葉に哑然とする士郎、後ろのセイバーもぼかん、としている。

「何を呆けているのですか？そちらから仕掛けてこなければ、私は何もしないからさっさと帰りなさい。そう言っているのですよ。全く、最初にそのセイバーには言ったのですがね……。『こちらには争いを好まない。そちらから手を出してこない限りは敵対するつもりはない』と。昼間の事も何か誤解しているようなので説明を行ったのですが」

そう言って士郎に数時間前にセイバーに行ったのと同様の説明を行

った。

「
」

最初は信用ならないと胡散臭げに聞いていた士郎だったが、

「
　　ってことはあれか・・・俺は勝手に勘違いして前に出てな
　　ます斬りにされた、と・・・」

そう言っで心底うんざりしたようにその場に座り込んだ。
あっさりと信じるのですね・・・流石です。

「ふふっ、色々な誤解が解けてよかったですね」

「冗談じゃない・・・最初から言えはいいだろ、散々切り刻んでお
いてそれかよ。普通・・・いや、普通じゃなくても死ぬぞ。どん
だサドいんだよお前」

笑う私に無然とそう言う士郎。

ふふ、やはり彼のこういう表情は微笑ましいですね。
しかし、

「ああ、勘違いしないで欲しい。確かに先日までの誤解は言葉で正せましたが、衛宮士郎、『貴方自身の事に関する勘違い』はこうでもない無理だったでしょう?」

私に加虐趣味などありませんから、それは訂正しておかないと。

「
な」

そんな私に士郎は驚いたように固まって、暫し後

「そっか、その、なんだ、ありがとうって言えばいいのか?この場合」

なんて複雑な表情で口にして、

「それにしたって、お前ほんとに何者だよ・・・なんで俺の事を俺以上にわかってるんだ?魔術だけじゃない、他の事も全部わかってるって感じた」

そんな事を問うてきた。

ふむ、まあ当然の疑問ですが、

「その質問に答えるのは後日、という事にしておきましょう。盗み聞きされているというのは不快だ」

そう言つて剣を振る。

「
」

士郎が咄嗟に身構えるが、その見えない斬撃は明後日の方向　木々が生い茂る山中へと吸い込まれ、ぎいんという音と共に黒い影をそこから叩き出した。

その影はすぐさま木々の中に消え、その気配が遠ざかっていく。

「あれは・・・ライダー？」

士郎が呆然と呟く。

「まあ、そういうわけで今宵はここまでと致しましょう」

それだけ言つと私は、二人に背を向けて門前へと戻っていく。
随分と前へ出て来てしまったようですね。
背後で二人の、

「ふう、酷い目にあつたけど・・・帰るか、セイバー」

「・・・・あ・・・・シロウ・・・・・・私は・・・・私のような者は、貴方の剣に相応しくない・・・・。私のせいでシロウをあのような目にあわせてしまった。私は、貴方の剣となる資格は・・・・もう・・・・」

「それ以上言つと本当に怒るぞ」

「・・・・・・つ・・・・あ・・・・・・シロウ」

そんな会話を聞きながら門前まで辿り着く。

そして、振り返ると遙か下段にセイバーを抱きかかえて山を下りていく士郎の姿が見えた。

「お姫様抱っこ・・・・というのでしょうか？あれは・・・・良いですね、私もシロウにしてもらいましょうか？」

ただ、あの構図は中々に照れるものがありますね、などと思いながら二人の姿が見えなくなるまでそれを見送った。

「ふう・・・些かならず、疲れました」

自分の手を見る。

僅かながら震えているのがわかるが、自分では止められない。

やはり、シロウと同じ姿形の士郎を斬るのは堪えた。

それが彼の投影魔術師としての自覚を、覚醒を促す為とはいえ、鞘の力で死なない範囲で、こちらから鞘に働きかけまで行っているとはいえ、それでもやはりこの感触は実に堪えました。ですが、

「ふふ・・・これで私はあの士郎に、忘れられない言葉を刻み込んだことでしょう」

そう思うと少なからず嬉しさがあった。

シロウにとつてのアーチャーの役割を私が奪ってしまったようで申し訳ないですが、早い段階でこれに気が付いておくのは決して悪い事ではない。

特に、この時点でセイバーを戦闘不能になるまで追い詰めてしまったのですから、士郎には多少なりとも強くなっておいてもらわなくては。

「あ・・・」

そこで、気が付く。

セイバーの魔力回復をあちらの士郎はどうするのだろうか？

その点に関して助言を行うのを失念していた。

昔の自分を見てついつい八つ当たりみたいなのを行ってしまい、必要以上に魔力を奪った事といい、全く私としたことが・・・。

「・・・・・・・・まあ、なんとかなるでしょう。」

いざとなればライダーの相手を私がすればいいだろう。

そんな事を考えながら、私は震えが止まらない手を誤魔化すべく、剣でも振ろうと考えるのだった。

第十四話 二月四日(2) (後書き)

あーあーあー、上手くないかない、上手くないですよ色々と。

随分と時間を使ってこの様とは情けない。

そして既存のものを継ぎ接ぎするばかりの戦闘シーンといい全く
どうしたものでしょうね、ホント・・・。

けれど、振り向かない、若さとは(以下略

第十五話

二月五日（1）（前書き）

今回短いです。

第十五話

二月五日（1）

昨夜もまた、色々あった。

俺は薄っすらと明るくなりだした境内を、門へと歩きながら考える。

襲来したセイバーと、それを連れ戻しに来た衛宮士郎^{オレ}。

セイバー^{セイバー}に撃退され、消滅寸前まで魔力を奪われたセイバー。

セイバー^{セイバー}に切り刻まれ、長時間の極限状態により力を覚醒^{めざまし}させられた衛宮士郎^{オレ}。

今頃、あの二人はどうしているだろうか？

衛宮士郎^{オレ}の方は間違いなく初めての限界を超えた投影の影響で苦しんでいる頃だろう。

まあ、ここを去る時点でそれは出ていたのだろうけれど、傷が完全に癒えて再度思い知る事だろう。

あの頃の俺はまだ魔術回路の切り替えすら満足に出来ていなかった筈だし、色々酷い事になっていそつだ。

・・・まあ、衛宮士郎^{オレ}の事なんてどうでもいいか。

それよりも問題はセイバーだな、あれだけ消耗させられてはマスターからの魔力供給がない現状では戦う事もままならないだろう。

・・・むう、随分と手厳しいよなプリテンダー、やっぱり自分には厳しくなってしまうのだろうか？

俺も衛宮士郎オレに対しては結構、その、アレだしな・・・。

そういった事を考えながら門を抜ける、目の前には

「シロウ」

「お疲れ、セイバー」

僅かに憂いを帯びた表情で佇むプリテンダー・・・『俺の』セイバーが居るのだった。

「ふう……昨夜も色々あったわね」

そんな事を言いながら私は溜息をついた。
長い夜だった。

セイバーの襲来とその撃退。

そのマスターである衛宮士郎ホウヤの投影魔術師としての覚醒めいご。

……メインである筈のセイバーの撃退は以外に早く片がついたのに、その後が随分長かったわね。

なんだか、ものすごくスプラッターな光景が長時間に渡り繰り広げられ、見ているこっちが気が滅入りそうになった。
けれど、一番気が滅入ったのは……

「それを見て、飛び出して行こうとするあの坊やを引き止める事だなんて……」

全く、ほんとうに想定外の事で疲労させてくれる。

セイバー
プリテンダーがあホウヤの衛宮士郎を数度斬りつけた辺りからいきなり、

「セイバーにあんな事をさせるわけには行かない……！今からでも俺が代わりに……！！！」

とか、言って飛び出していこうとするエミヤシロウを拘束し、宥め
賺すのに私がどれだけ苦労したか……。

「　　いつそ、豚にでも変えてやればよかったかしら」

げんなりとそう呟く。

まあ、そんな術式が効果があるか甚だ疑問ではあるが……色々な
意味で予想を裏切る結果になりそうだ。

……ふう、緊張感が足りていない。

あの坊やといると常に緊張感が一定数値を下回ってしまう気がして
ならない。

ひよっとしてそういった呪いの類いなのかしら？

能力？クラススキル？精神汚染とかそんな感じがしら？しかも自身
にじゃなく相手に作用するタイプの……嫌だわ、病原菌みたい。

それだったらランクはEXかしら？それとも相手によって効果がま
ちまちだからこあたりかしら？

割と真剣にそんな事を考えてしまう私だった。

本当に馬鹿らしい。

それはそうと、夜が明けたのでその坊やにセイバーを呼びに行かせ
たのだが随分と時間が掛かっている。

どうせまた何時もの如く……ああ、考えるのも馬鹿らしいので直
接呼びに行くでしょう。

セイバーにはあの『剣』を実際に戦闘で使用した上で何か問題点が
なかったかなど色々聞きたいことがあるのだし、待っていたら今に
も昇ろうとしている日が再び暮れるまで待たされる、などというこ
とも冗談ではなく有り得る。

ああ、本当に忌々しいったらありやしない。

で、態々、私が、自ら、門前まで、出向いて、あげたら、

「ごめんなさい、シロウ」

「いいよ、気にしないでくれセイバー」

なんか、予想通りと言えば予想通りなのだけれど・・・抱き合ったまま言葉を交わす馬鹿が二人。

ごめんなさい、いやいいよ、などと延々と同じやりとりを繰り返しているのは一体なんなのか・・・。

脳味噌が蕩けた連中の思考回路は理解不能だわ

けれど、そんな思考を放棄してしまいたくなる自分とは別に冷静に考察してしまう私がいる。

セイバーが延々と謝罪を述べているのは・・・つまり、昨夜のあの衛宮士郎との血みどろの触れ合いに関して坊やを通して謝っボウヤていて、その度に坊やがそれを許す、という構図なのかしら・・・なるほど、

どう行き着いても惚気る方向にしか行かないのかこやつらは。

全く、馬鹿らしいにも程がある・・・程があるのだが、

「気持ちにはわからなくてもいいのよね……」

そうなのだ。

私だって本人じゃないにしろ、宗一郎と、あの人と瓜二つの人間が居たとして、それを傷つけてしまったら……。

それが、瓜二つどころか、別次元だか別世界とはいえ当人なのだから……しかも、それを長時間かけて痛めつけてしまえばかなり堪えるだろう。

「はあ……仕方ないわね」

溜息と共に小さく、あの二人に聞こえないくらい小さく呟いて、私はその馬鹿二人がその儀式を終えるのを待つことにした。

暫くすれば終わるだろう、なんて考えながら、まあ少しならこの光景を眺めているのも微笑ましいかもしれない、などと思いつつながら。

真の馬鹿は私だった。

まさか一時間も待たされるなんて……いえ、解かっていた筈なのよコイツらはこういう生き物だっていうことは……！

「さて、それじゃ次は私にごめんなさいしてもらえるかしら？」

「「ごめんなさい」」

で、きっかり一時間後、我慢の限界に達した私はこうして二人を工房で正座させて溜息をついたのだった。

喧嘩じゃなくても犬も食わないわ、本気でどうしてくれようかしら・
・。

「ふう、酷い目にあつた・・・」

思わずそんな言葉が口から零れる。

あれから半刻でセイバーは開放されたというのに何故か俺だけ二時間も正座を継続させられるとは・・・。

思わず溜息をつく。

現在、俺はキャスターから解放されて深山町をゆっくりと歩いている。

衛宮邸へ、向かつて。

今まで避けていたにも関わらず、なぜ今更になつてそこへと向かつているのか。

理由は様々だが、第一に昨夜遂に俺達 正確にはセイバーだけなのだが が、あの二人と対面したからだ。

だが、対面した程度では理由にはならない。そんなことで今更出向くのなら最初から出向いている事だろう。

問題はその対面の内容だ。

セイバー
ブリテンダーは最初はやって来たセイバーを適当にあしらつてから衛宮士郎に引き渡してさつさとお引取り願うつもりだったらしい。だが、色々と思うところがあつてセイバーを限界近くまで『絞つてしまった』らしい。

そう、当人曰く『絞ってしまった』そうだ様々な面で。

魔力を収奪したのもそうだが、無力化して何も出来なくなったセイバーの目の前で、衛宮士郎を血みどろに・・・いや、『鞘』への働きかけも気が付かれない様にやったらしいから死ぬような事はあるえなかったらしいのだが、とにかくこう限界を引き出すかのようにズタボロにしたのだ。

当人としては『多少お灸を据える』程度のつもりで、ある程度のところまで切り上げるつもりだったらしい。
実際、

「私としても、士郎^{シロウ}を傷つけるのは嫌でしたし」

とも言っていたのだが・・・予想外に、本当に予想を大きく上回り衛宮士郎はその攻撃に耐えてしまった。

幾度となく斬られ、血を流してもその歩みを止めず、ただ只管に、途中からはプリテンダー^{セイバー}の事が眼に入ってすらいなかったらしい。

ただ前へ

ただ前へ

風を越えて前へ

そう、俺も見えていた。

最初は、プリテンダー^{セイバー}にあんな事をさせたくない、と止めに行こうとしてキャスターに止められていたのに、それを忘れて見入ってしまった。

古い鏡を見せられている そんな感じがした。

出来るか出来ないかではなく、ただ挑み続ける事に そんな風に
ただひたすらに前に出ようと、足を踏み出すアイツの姿に、思い出
したので。

夕焼けに染まるグラウンド 一人でいつまでも走っていた、何が
したいんだか自分でもわかっていない馬鹿なガキを。

そいつは、結局いつまでも立ち止まらず、前に出続けた。
何時間にも及ぶ、間違いなく死に至るその流血と傷を受けながら。

セイバー
プリテンダーは、そいつにどこかの馬鹿^{オレ}を見たのだろう。

俺が今でも覚えている、あの赤い背中 その言葉を衛宮士郎に送
った。

その言葉は劇的な変化をそいつにもたらした。
がちり、と歯車が噛み合った。

そいつはそれまでとはまるで別物のような力強さで、セイバープリテンダーが繰り出す斬撃を　その風を越えて

そして、その『剣』を、その手に掲げ上げたのだ。

本来ならば、まだ先に起こったであろうその覚醒を、予期せぬ形で起こしてしまった。

だが、それはまあ問題はない。そこは俺もセイバープリテンダーも共通して思っていたことだ。

何があろうと、どのような手順を踏もうとも、きっとオレ衛宮士郎は俺でしかないのだろう、と確信しているのだ。

だから、問題はその光景を、何も出来ないまま見せ付けられたセイバーの方なのである。

セイバープリテンダー曰く、『追い込みを掛け過ぎた』らしい。

その光景だけならば決して自分が折れることなどありえませんが、と強調しながら　なんか凄く強調しながらセイバープリテンダーが説明するには、

「ただ、戦闘の結果としてそういう状況に陥ったのなら、きっとセイバー私もああはならなかった筈なのです。むしろ士郎の強さなり、歪さなりをはつきりと理解し、彼を認める方向へと考えが向かった筈です」

だが、そうはならなかった。

「まず始めに、士郎の意思に反して戦いに赴き、敗北した」

「そして、自分を連れ戻しに来た事によって、敗北した事によって彼を危機に陥れた」

「そして、彼は自分を守ろうとして延々と死地に留まり・・・いえ、向かい続け、何度となく死を確信させる傷を負い続けた」

「そして　　自分は、それをただ見ている事しか出来なかった」

どうも、余計な傷^{トラウマ}を思いきり切開してしまったようです、と苦々しげに語るプリテンダー^{セイバー}だった。

何でも、自分が王になったせいで滅び去ってしまった全てのモノと目の前の　自分が衛宮士郎のサーヴァントとなったせいで、今にも消え去ってしまう　その状況が何かしら被って見えたのかもしれない、との事で・・・。

衛宮士郎が勝利^{カリバーン}すべき黄金の剣を投影したのもそれに拍車を掛けたのかもしれない、とも言っていた。

王を選定する岩の剣、彼女が王になる事を決定付けた、永遠に失われたその剣。

彼女ではない人物が掲げたその剣を見たとき、あの状況で何を思ったのか。

「とにかく、士郎があそこまで耐えた事、そして彼の魔術特性をあの時点で引き出せた事は嬉しい誤算でした。ですが」

その誤算のせいで、私の方は・・・と、苦悶する彼女にむしろ俺のほうが忸怩たる思いだった。

衛宮士郎のせいではセイバーを苦しめてしまったのだし、全く昔から俺はろくな事しないな、などと考えてしまう。

とにかく、このままでは何かとんでもなくおかしい方向へと事態が流れてしまうのでは、と危惧した俺は、今までは近付かないように心がけてきた衛宮邸へと、せめて遠くからでも様子を伺うべく、向かっているのだった。

ちなみに、プリテンダーからは、

「私の事はとりあえず置いておいて、士郎の方の心配をしてください。彼女は精神的なものですが、士郎の方は下手をすれば命に関わりますので・・・」

と、言われてしまった。

そう、セイバーもなんだが衛宮士郎オレの方も状況的には拙かったりする。

昨夜の戦い・・・と言っても一方的なものだったが、とにかくその戦いでアイツが見せた回復力、耐久力は『鞘』の力ではない。

命を繋ぎ止めたのは間違いなく『鞘』の力なのだが、その力よりも強く顕現していたものがあつた。

ぎりぎり、ぎりりと身体を食い破り出現する無数の剣、固有結界の暴走だ。

あの時は身体を繋ぎ合わせる、斬撃に耐える、などの効果を發揮していたが、一歩間違えばあれによって死んでいてもおかしくはない。拳句に勝利すカリバーンべき黄金の剣をいきなり投影なんてして、セイバーを抱きかかえて帰ったから『鞘』の力が強まって抑制されていたのかもしれないが・・・何の気なしにぽけーっとしながら帰って行っちゃってまあ・・・少しでもセイバーから離れたら、制御できないで荒れるだろうからきつと今頃地獄だぞアイツ。

嬉しい誤算と言いつつも、必ずしも嬉しい事ばかりではないのであった。

というか、色々な工程をすっ飛ばしていきなり過ぎるもの・・・魔術回路のオン、オフもろくすっぽ出来てないし、今どんな状況なのか俺も見てもないと予想がつかない。

まあ、俺だし結局なんとなかなる気がしないでもないんだが・・・。

そこらへん、エミヤシロウの生き汚さというかしづときは折り紙つきだ。

だが、先日遠坂と争っていたし、下手をすると助言をくれる人間がないで酷い事になっている可能性もある。

セイバーの魔力供給がどうなっているかも気になるところなので安否の確認ぐらいは最低でもしておかなければならない。

いざとなったら直接関わってしまうのも止む無し・・・かな？

そうこう考えているうちに視界強化した俺の眼に懐かしの我が家というにはもう懐かしすぎるのだが　　が見えてきた。

あ　　やばい、なんか、なんかわからないけど目眩が、色々と何かが込み上げてくるような、何を考えていいかわからなくなってくる。

まずいな、少し、落ち着くまではこれ以上近付かない方がいいかもしれない。

そう思い、俺は目立たないように物陰に引っ込んだ。

そして、落ち着いたなーと思い出て行こうとしたら、視界に凄く懐かしいヤツが入って来て、再び落ち着かない気分になってしまった。

ああ　　遠くから見ただけでもかなり思うところがあつたのに、この距離で見ると本当に、色々と込み上げてきてしまうもんだな・・・『遠坂』・・・。

そう、衛宮邸に入っていく『遠坂凜』、彼女が見えたのだった。

で、衛宮邸へと入っていく遠坂をぽけーっと、見送った俺だったのだが、

「いかにいかに、とりあえず遠くからでも邸内が見える場所に……」

そう考え、それに適した場所へと移動を開始しようと思ったのだが、

『何を言っているのエミヤクン。スニーキングミッションよ、突撃よ、気配遮断で潜入するのよ』

なんかいきなり無茶な事を言われていた。

いきなりなのはいつもの事だが……正気か？俺にそんな技能はな

いぞ。

そりや多少はそういつた心得がないでもないが、あそこにはセイバーと恐らく遠坂と共に霊体化したアーチャーも居るんだぞ。

キャスターに貰った礼装でも誤魔化すのは限界があるだろう。

そんな事を思っ俺に、

『安心なさい。こんなこともあるのかと・・・いいわねこの台詞。』

こんなこともあるーかとっ！新しい機能を追加しました。ほら拍手、あと賞賛の言葉を、このぽややんじゃなくて私に』

『更に化物ぶりに磨きが掛かるな、結構な事だ』

『ほんと人間じゃねーよな、出会った時からそうだったけど。あと魔女ーお前そんなキャラだったか？』

この魔女はそんなことを・・・というか、お前らも・・・乗るなよ・・・。ほんと、面白いぐらい機能が増えていくのね。

自分のことじゃなきゃ楽しいかもしれないが、というか今度は何の機能だ？というか四元ポケットか何か俺は・・・。

正直な話、次から次へと能力増やされても俺には使いきれないんだが・・・。なんかまだまだ増えそうだし。

そんな俺の嘆きをいつもの如くスルーして、魔女は楽しげに、なんか眼鏡と教鞭とか欲しいわよね、とか言いながら解説を始めた。

『まあ、さつくりと説明してしまえば、エミヤクンの中に居る私たちの中から適した技能を持つ誰かを選んで、ソイツと同調するのよ。エミヤクンお得意の投影による憑依経験とかの共感だったかしら？』

それと似たような、それをもっと深くしたようなものだと思えばいいわ』

専科百般よー、とか言う魔女だった。つまり俺の中にいるお前らの中からその都度、状況に適したヤツを降ろしてその技量を再現するということが。

まあ、誰を降ろすかは魔女の方で俺の要望から最適な奴を検索して繋げてくれるとか言う事なのだが・・・。

『ま、エミヤクンの身体を通してだから、魔法とか無理だけどね。背伸びしても何しても絶対に届かない領域のモノだけは流石にね・・・』

とか使わないし・・・体からビーム出すのはお前だけで十分だ。

いや、ビームってか光学兵器とかは、ジャバラとかに負けず劣らず男の子の浪漫ではあるのだが・・・。

『あら、悔しがる必要はなくてよ。そのうち撃てる様にするから、私が』エミヤクンの『中から』こうズギヤーンと』

結果的にエミヤクンがビームを撃つ事になるわよー、って・・・怖いわ！俺の中からビーム撃つってどういうことだよ。
俺の中から飛び出るのは剣だけで沢山だ。

同調、開始。

かちり、と音がする。

『 生と死を別つは白蓮より伸びたる銀の糸』

「 生と死はその糾える糸の如し」

聞こえた声に、答える様に呟く。

かちん、と歯車が噛み合う音がする。

見えない誰かと、同じ方向を向いたような奇妙な同期を覚える。

同一、終了。

とりあえず、そんなこんなで魔女に言われた通りの手順でその人物と共鳴だか共感だかで気配遮断のスキルを得た俺は現在、幾星霜の時を越え懐かしの我が家へと戻ってきた。
込み上げてくる懐かしさ、思い出せないが心温かくさせられる雰囲気、胸が一杯で涙が零れそうになる。

逆さまにだが。

零れ落ちるではなく、零れ上がるとでも言っのだろうか、涙が頬じやなくて額に流れそうになる。

何で俺は天井裏に蜘蛛のように張り付いているんだろうか。
色々な意味で泣きたい気分なのだった。

何故こんな形で大切な、本当に大切なモノが様々に詰まった懐かしの我が家へと侵入せねばなんのか・・・色々な意味で泣かずにはいられないのだが、泣くと絵面的にもその他諸々の意味でも色々アレなので泣く事も出来やしない。

どうしろっていうんだよちくしょう。

『エミヤ 気持ちはわからんでもないが、その独白はちとこちらも傷つくんだが』

声が聞こえる。

今までの三馬鹿とは別の落ち着いた、怜悯な女性の声　これが現在の能力の持ち主である。

俺の中の仲間の一人、『ヤソメ』さん。

亜麗百種のうちの『悪魔』だったか『死神』だったか・・・ん？『蜘蛛』だったかもしれない。

どれだったっけか・・・どうも二つ名とか別名とか種とかがごちゃごちゃと色々ある人だから紛らわしいが、とにかく『悪魔』だか『蜘蛛』だかの種の一人で『死神』みたいだからそう言われてるのか、それとも逆だったのか、それとも全然別の何かだったのか・・・まあ、兎に角そういう人なのだ。

俺もなんだかわからなくなってきた。

何故『さん』付けなのかもそういう人だと言う事で納得して欲しい、皆そう呼ぶし。

能力は気配遮断と文字通り蜘蛛のような動き、天井裏にもこうして張り付けるし壁も走れる不思議っぷりである。

あと、こういう原理なのか影に潜ったり、その中を移動することもあるらしいのだが、これは俺には再現できないようだ。

ちなみに穴もほれる。今回の侵入はその穴を掘って・・・どうもこれをやると魔剣までその相手の得物に強制的に変わるらしいのだが、それでアスファルトだろうがなんだろうがお構いナシにさくさくと掘って侵入を果たしたのだった。

ついでにいうと不可視の糸を出しそれを飛ばしたり、風に乗せて遠方へ飛来、付着させる事によってそれを伝っての移動等も可能なまさしく蜘蛛のような人なのであった。

あれ・・・やっぱ『蜘蛛』だっただろうか？亜麗百種はごちゃごちゃしてて分類がわかり辛いんだよなあ、あの『天使』ぐらいこれでもかって外見ならわかりやす・・・って最初会ったとき『鳥？』と

か言っ**て**ぶっ飛ばされたな俺……。

それはそうと、そんなこんなで邸内に侵入を果たした俺は、非常に複雑な気分で懐かしの我が家を文字通り『這い回**っ**て』いるのであった。

こう、なんていうかカサカサと、蠢動と言**っ**てもいいかもしれない・
・本当に、こんな事なら変な躊躇なんてしないで最初から堂々と接触しておけばよかった。

俺は後悔しながら、それでもばれない様に細心の注意を払**い**つつ衛宮士郎とセイバーの姿を探してこそそと動き回るのであった。
オレそんな俺を尻目に、

『魔女ーシンクロ率は依然として問題ない数値で推移しているぞー、むしろ上昇傾向だ』

『よろしい、引き続き状況の報告を』

『貴様らは何をやっているんだ』

『動いた、コイツ……エネルギーゲインが通常の数百倍もあるぞ』

『……大隊規模で中にいるのだから当たり前だろうが、馬鹿か』

『ふっ・・・勝ったわね』

『付き合いきれん』

楽しそうだなお前ら。

何時も通りの寸劇を繰り広げるコイツらに辟易しながらも、動きも思考も淀みなく、気配がする道場の方へと慎重に向かっていく。

『エミヤ、コイツらは表層に出てきている時はいつもこうなのか・・・？』

一人、ヤソメさんだけは呆れてものが言えないと言った様子で呟く。どうもあの三人以外の面々は俺を通して見ているものは同じく共有しているようだが、表層に出てきているコイツらの様子は奥に空間はわからないそうで・・・。

出来ればもっとまともな人員を表層に出してくれ、とお願いする俺に、

『そうしてやりたいのは山々だが・・・お前との結び付きが一番深いのはなんだかんだ言ってもコイツらだからな。恐らくこうして同一化でもしなければ私も含め他の連中は上がってこれないだろう悔しいがそういう事だ』

そんな風に、少し寂しそうに言うのだった。

ちょっと待つて欲しい。コイツらとの結び付きとか言われるとなんか背筋に凄いものが奔るんですが、勘弁して欲しい。割と必死でそんな事はない、と言ったのだが、

『ふう　　だつたらず最初に、もう少し敏感になることだ。例えば私の　　いや、なんでもない、忘れてくれ』

これは私の押しの強さが足りないせいだろう、魔女のようにもう少し我俣になるべきなのか・・・とかぶつぶつ言い出してそれ以上何も言ってくれなくなってしまった。

むう、なんなのだろうか・・・。

そんな事をしながらも道場へと近付いていく。
何やら非常に徒ならぬ雰囲気だ。殺伐としていると言つべきか、緊張感が高まってきている、というのだろうか。

そして、ようやく道場に辿り着いた俺の耳に、

「　　もう一度言つわ衛宮君、貴方はこの聖杯戦争から降りなさい」
　　リタイア

そんな遠坂の冷たい声が、飛び込んできたのだった。

どういう状況だ？これ。

第十五話

二月五日（１）（後書き）

ちと仕事が忙しいので更新が遅くなる恐れがあるので短いけどとりあえずさくつと投稿してみます。

次がわりかしトンデモ展開になる可能性もあるのでその前置きみたいな感じ、というのもあります。

現状で十分しつちやかめつちやかな展開具合でございますが・・・。
ほんと、死に設定やら変な設定ばかりつけて何がしたいんやら私は・・・。「ぼくのかんがえたさいきょうの～」ってやつでしようか？
うわあ、壁に頭打ちついたらなくなってきましたよ。

第十六話 二月五日(2) (前書き)

今回、いつも以上に無茶苦茶です。

第十六話 二月五日（2）

「もう一度言うわ衛宮君、貴方はこの聖杯戦争から降りなさい」
リタイア

慎重に慎重を期して、ようやく道場の様子を伺える位置に辿り着いた俺の耳に入ってきた第一声。
それは驚くほど冷たい遠坂凜の声だった。

「な」

中の光景をて驚く。

そこには倒れて蹲る衛宮士郎と無数の剣によってその場に縫い付けられ身動きが取れなくなつたセイバー。

そしてそれを成したと思われるアーチャーとそのマスターである遠坂凜が佇んでいた。

なんだこの状況は、先程まで曲がりなりにも戦闘があつたのだろうと思われるが、その気配を察知できなかったのはあまりにも一方的に勝負がついたからなのか、道場に張られた結界らしきもののせいなのか、両方なのか。

とにかく、何故遠坂がオレとセイバーをこんな目にあわせているのだろうか。

事情が飲み込めず啞然とする俺だったが、そこで遠坂が倒れ臥しながらも立ち上がるうとしている衛宮士郎に対して再度言葉を掛ける。

「いいかげん貴方も分かったでしょう？ 昨夜何があつたのかは慎二の奴が聞いてもいないのに楽しそうに話してくれたわ。セイバーは敗れ、魔力も根こそぎ奪われ、私のアーチャーに難なく無力化される程に弱っている。そして衛宮君はそのセイバーに魔力を供給することが出来ない」

もう詰んでるのよ貴方　そう言いながら遠坂は続ける。

恐らく俺がここに来る前にも同じ事を説明したのだろうが、遠坂は繰り返すように丁寧に、言い聞かせるように語っていく。

それは奇しくもここに来たばかりの俺に、状況を説明しているかのようだ。

慎二から聞かされたライダーが見てきたであろう昨夜の顛末。

門番であるセイバーと瓜二つの正体不明のサーヴァントに敗北したセイバーと、そのサーヴァントの攻撃に長時間晒されながら生き延び、見逃されて帰ってきた衛宮士郎。

しかし、その戦いでセイバーは通常の戦闘すら満足にこなせない程に魔力を奪い取られ、衛宮士郎は長時間の攻撃と分を弁えない魔術行使によって身体は限界に達した。

「それにしても驚いたわ、衛宮君がまさか宝具の投影が可能な魔術

師だったなんて　でもセイバーの剣・・・なのかしら？とにかく、そんな出鱈目をやって、無事でいられるとも思っているの？セイバーから流れてるのかなんのか原理はわからないけど、その耐久力と回復力でも補いきれるものではない。というか、そんな不確かなモノに頼って、拳句そんな無茶までして　死にたいの？それ以前に、貴方ではサーヴァント相手に戦いにならない事は、昨夜と今そうなっている事でわかったでしょう？だから、令呪を破棄してこの戦いから降りなさい。これ以上は本当に手遅れになるわよ、色々」と

そう語る遠坂に、

「　断る。さっきから言ってるだろう遠坂。俺は、戦いを止めるために戦うって決めたんだ。それに、セイバーに協力するって決めたんだから」

衛宮士郎は立ち上がり、真っ直ぐに前を見てそう言い放つ。
それに対して遠坂は、

「呆れた・・・そんな様になってもまだそういうこと言っただ。それに　」

そう言って、今だ槍袢　剣だから剣袢とでも言っただろうか、に
囚われ身動きが取れないセイバーに目をやり、

「セイバー、貴女もこの状況はわかっているでしょう?」

こんな状況で戦い抜けるとでも本気で思っているのかと、コイツをこのまま戦いに駆り立てるのかと。

このまま座して死を待つのかと、コイツを勝ち目の無い戦いに道連れにするぐらいなら潔く消えるべきではないのかと。

そう問う遠坂に、

「そんなことは……言われずとも分かっている……!!
貴女がここに来るまでにどれだけの時間があつたと思っているのです……。その間に、私がそれを言わないとでも思つたのか……!!」

セイバーは搾り出すように、苦しげにそう言葉にする。

私は既に貴方の剣たる資格は無いと、このままでは二人とも先は無いと。

魔力が尽きた私では貴方を守れないと、このままでは座して死を待つのみだと。

そんなことに貴方を巻き込むわけにはいかないと、契約を破棄して戦いから降りて欲しいと。

私はまだ次の機会があるからと、ここで聖杯に拘って貴方を犠牲にする事はできないと。

「それでも……それでもシロウは……」

決して降りるとは言わない。

セイバーが自分の下を去るのであればそれを止める事は自分にはできないと。

だが、戦いからは決して降りないと。

「そんなシロウに対して私が出来た事とはなんだ……！？私が居なくなっても戦い続けると言うこの人を置いて、背を向けて、おめおめと逃げ帰る事か？一度誓った主従の誓いを捨てて、主に背を向ける事が……！それが騎士のすることなのか……！？」

真つ直ぐに遠坂を見て、セイバーは続ける。

確かに、魔力の供給も満足に出来ないというのはマスター失格だ。だが、それを知っても私は彼の剣となると、最初の誓いを守ると決めたのだと。

何より、現状を招いたのは彼の指示に反して戦いを挑んだ私の落ち度なのだ。

そのせいで戦えなくなったからと言って、戦い続けると決めた彼を残して自分一人が逃げ帰る事など出来る筈が無いと。

昨夜は、確かに私のせいで、私などと契約したせいで彼を戦いに引きずり込んでしまったと、間違いなく死に至る道へと引きずり込んでしまったと後悔したが、未だに後悔しているが、

「それでも……私は、戦うと決めた」

いや、最初から決めていたことだった。

言葉と共にその視線は力強さを増していく。

まるで、今までの逡巡を振り切るかのように、言葉に力が籠る。魔力が今にも尽きそうだから、戦う事が出来ないなどと、何故あても弱気になったのかと。

そんなものは二の次だった筈ではないのか、私の武器は胸の内にあるこの騎士としての誇りなのだと。
だから、

「最後まで戦い抜くとシロウが決めた以上の剣となって戦い抜いてみせる……！」
私も最後まで、彼

そう、彼女は言い切った。

セイバーの決意に、その言葉に、場が沈黙する。

「っっっ・・・！！アンタ・・・！！！」

遠坂は一瞬言葉に詰まったようだが、それでも何かを言おうとして、

「
凜」

今まで黙っていた、赤い外套の男によって遮られた。

黙って成り行きを見守っていたその男、アーチャーは双剣をだらりと下げたままの姿勢で、

「その二人には、最早なにを言っても無駄だ」

そう口にした。

何を言ってもこの二人は、否　この男は止まらないし、そうである以上はセイバーも止まる事はない、と。

最初は巻き込まれただけで、結果マスターとして参加する事になったとしても。

聖杯に望むことなどなくとも、サーヴァントであるセイバーがそれが必要だというから聖杯を求めたのだとしても。

例えセイバーが戦う事が出来なくなり、自分の下から去るとしても、セイバーが先程言ったとおり、衛宮士郎が戦いを止める事はない、と。

「そうだろう？ 衛宮士郎 貴様は戦いを、犠牲を止めるために戦うと決めたのだから」

そう言つて、アーチャーは目の前の衛宮士郎を見据える。
衛宮士郎は無言でその視線を受け止める。

「凜、最早この段階で問答など無用だ さつさと楽にしてやるのがせめてもの情けだと思ふのだが？」

最初からそうしておけばいいものを、余計な苦勞をしているぞ君は、と先程から黙っている遠坂に溜息混じりに言うアーチャーだった。

「 うっさいわね、わかってるわよそんなことは」

遠坂は、アーチャーの言葉にふん、と鼻を鳴らしてそう言つと、

「ええ、わかつたわよ。いいわ、それなら無理やりその令呪を剥ぎ

取ってからその頭を洗淨してやるわ。アーチャー、やって
」

令呪を奪って記憶を改竄するから無力化しろ、とアーチャーに命じるのだった。

その命を受けたアーチャーは、

「やれやれ、この期に及んでもまだそのような事を……」

さっさと殺してしまえば済む話だろうに甘い事だ。

大体、セイバーからの治癒能力で回復するのだから彼女から倒してしまえばいいだろうに、態々その小僧の心情を慮って無駄な時間と労力を使うとは。

つくづくいらぬ苦勞が好きだな君は、などと零しながらもその命を実行すべく、前へ出る。

「さて、小僧　そういうわけだ、貴様にその奇妙な回復力と耐久力がある以上、僅かならず手荒くなる。苦しみを長続きさせたくなくば、意地など張らぬ事だ」

そう言って、駆け出す。

「
」

衛宮士郎も、即座に応戦すべく投影を行おうとするが、

「　　っ・・・・・・・・！！があっ・・・・・・・・・・・・・・・・！！」

その創りかけの剣を叩き折られ、そのまま斬りつけられる。

そのまま次の投影を行う暇を与えずアーチャーの斬撃が衛宮士郎の身体を切り裂く。

そこからは、昨夜の焼き直しだった。

その分を弁えない投影で、中身が壊れてしまうような真似はさせない。

そう言った遠坂の言葉の通り、何も出来ないまま切り裂かれていく
衛宮士郎。

ざしゅ

ぎちぎち

ざくり

ぎちぎち

ぎちり

ざしゅり

ぶしゅり

がちがち

だが、斬られても斬られても奴は倒れない。

本来なら一合と持たないであろうその斬撃を、腕で頭を庇いながら耐え続ける。

ざしゅ

ぎちぎち

ざくり

ぎちぎち

ぎちり

ざしゅり

ぶしゅり

がちがち

アーチャーの猛攻に晒されながら、昨夜のように血塗れになりながら倒れない。

その傷を、無数の剣で繋ぎ合わせながら立ち続ける。

その昨夜と変わらない光景を見ながら、俺は昨夜とは違う違和感を

感じ始めていた。

何故アーチャーはああも試すように、しかし時折明らかに殺しに掛かっていると思えない斬撃を繰り返しているのか。

加減しているのは遠坂の指示があったからだろう、それによって攻めきれていないのはわかる。

だが、時折明らかにあいつ自身の意思で殺しにかかっている、と思える斬撃が混じっている。

そして、それも防ぐ衛宮士郎 アイツの状態が明らかにおかしい。

ざしゅ

ぎちぎち

ざくり

ぎちぎち

ぎちり

ざしゅり

ぶしゅり

がちがち

斬られても斬られても倒れない。

無駄だとわかっているのに退こうとしない。

倒れてしまえば、負けを認めてしまえば楽になるのに。

倒れない限り、その痛みは更なる痛みを呼ぶだけだというのに。

アーチャーの攻撃は激しさを増して行く。

死なない一歩手前まで絞つても、その一歩が遠のいていくのなら、上限は上がり続ける。

そう、上限は上がり続けている。

ざしゅ

がちり

ざらり

がちり

がちり

がちり

がちり

がちり

鞘の力とは違う。

固有結界の暴走、身体から無数の剣が生えることによって耐久力と回復力が上がっているのは確かだ。

だが、何かがおかしい。

ざしゅり

止まらない、何度斬られようと衛宮士郎は止まらない。

がちり

まるで壊れた機械のように、負けないと、諦めないと、挑み続けると、繰り返し返す。

ざくり

「
なんで」

その光景を見ながら、遠坂が呟く。

「
なんでアンタは、こんな時まであの時と変わらないのよ」

事の成否はわかりきっている。

どう足掻いても勝てはしないのに、なんでそんな事を考えずに前に出続けるのかと。

そう言いながら、気まずそうに俯く。

『あの時』とはなんだろう。

そう思った瞬間、あの赤いグラウンドを、いつまでも走っていた、

跳び続けていた馬鹿を再び思い出した。

まさか、あんなものの当人ですら覚えていないし、まして見ている人間なんてきつとしない。

その後、遠坂はアーチャーに新たに指示を出すでもなく、ただひたすらにその光景を睨みつけていた。

アーチャーも何も問わず、ただ最初の命を実行すべく更に力を込めて剣を振るうだけだ。

ざり

がちり

ざりゅ

がちり

「シロウっ・・・・・・・・!!」

セイバーは今だに剣の檻から抜け出せない。

もう、目を逸らすまいとその光景を凝視しながら、抜け出そうとしている……いや、抜け出す機を待っている。

現状の彼女ではあの拘束から抜ける事は叶わない。

下手に動けば剣によって傷を負い、今の彼女はそれだけで致命傷になりかねない。

だから、何か、その為の何かが来る事を信じ、今は己がマスターの戦いを目に焼き付けている。

ざりゆ

がちん

ぎゃり

がちん

いつまでも止まらない。
眼には今だ力がこもり、
衛宮士郎は耐え続ける。

どのくらい経ったか、昨夜の焼き直しだと思ったからなのか、いつまでもそれは終わらない。

おかしい。

俺は今日何度目かのその疑問、その違和感を自身の中で口にする。

いや、最初からおかしいといえはおかしいのだ。

この状況　遠坂と衛宮士郎がこうして相対しているのは昨日の一件を見れば別におかしなことではない。

こうやってアイツがアーチャーに痛めつけられている状況もまあ、あいつなりの気遣い・・・なん、だよ、なあ？うん。

だが、この状況をこうまで益体もなく延々と続けるのがおかしい。いや、遠坂は何故だかこの惨憺たる状況で何故か衛宮士郎を夢でも見るように、睨みつけるなどという奇妙で器用な事をやったまま固まってるからいいとしても・・・。

流石にここまできたらアーチャーが何か苦言の一つでも、それこそ不毛だのいい加減にその甘さに見切りをつけて殺りに行くだの言ってもいいだろうに。

いや、既に序盤からさりげなく必殺と言ってもいい一撃をその連撃の中に紛れ込ませているのだが、それでもだ。

セイバーは既に昨夜の弱気に蹴りをつけたのだろっ。

その光景から目を逸らさず、自身に出来る反撃の機会を、来ないかも知れないその機会を諦めずに窺っているのがわかる。

これには俺も少しほっとした。むしろ衛宮士郎^{オレ}なんぞのことより余

程心配だったのだから。

で、何よりもおかしいのが奴 衛宮士郎だ。

繰り返す度に上がっていく回復力と耐久力。

ぎり、ぎりりと音を立てるその剣の群れ。

その固有結界から零れた自身を傷つける諸刃の刃。

そもそも、固有結界の暴走というのは、ああも都合よく身体を丈夫にしたり、繋ぎ合わせる方向ばかりに働きはしない。

自身を喰い破って出てくる、まさに諸刃の剣 それがあは無数の剣である筈だ。

なのに何故、何故ああも

傷を受けることに都合よく身体の修復を行っていくのか。

傷を受けるたびにその修復速度が速まっていつているのか。

傷を癒すと共に傷を与える、それがあの剣郡であるはずなのに、

何故ああも身体と一体化しているかのような

「 身体と一体化……だと……?」

自分の辿り着いた答えに愕然とする。

そして視界を、今まで気配を消す事に、存在を隠す事に重点を置いて最低限状況を把握できるだけに留めていたそれを最大限に強化し、奴を見る。

「マジ、か……」

固有結界と身体が一体化している。

自身の心象世界、その『あらゆる剣を構成する要素』が、本来なら自身をも傷つけるそれが、完全に身体と一体化しようとしている。

世界ではなく、自身の身体を塗りつぶし　いや、塗り替えていつている……!?

まさか、そんな馬鹿な、あり得ない、そんなことは俺にだって不可能だ。

手順を何をどう間違ったらそういうことになるって言うんだ。

魔術回路のオンオフもできない状況でいきなり身の程を弁えない投影なんてしたからか？神経と魔術回路が癒着して同一化しているような異端だからとでもいうのか？全て間違えた状態でいきなり固有結界の暴走などしたからか？いやだがあんな風に一体化するなんて有り得ないだろ、普通身体を傷つけて回復量よりもダメージがでかくなって放っておくと死に至る猛毒であってそれ以前に自分の心象世界で自分を塗りつぶすってなんだって・・・あれ？それって実は違和感ないんじゃないかってまでまで、おかしいって絶対、あの剣の丘を身体の中に普通に出したらそれだけで破裂するだろ、そも

そもなんで傷つかずに身体に収まるんだ？……収まる？鞘？まさか……鞘の力がそっちに働いて、ってそれはもっとおかしいだろ。

ああくそ、混乱してきた。

とにかく、見ているだけの俺ではわからない。

ここからでは、とにかくアイツの身体の中がおかしなことになり始めているということぐらいしかわからない。

既に中身が異常を通り越してるお前がそれ言うか？とか『中』から聞こえてくるけど知ったこっちゃない。

そして、ああでもないこうでもないと考えている間にも状況は進んでいく。

アーチャーも異常に気が付いている、と言うより真っ先に異常に気が付くのは他でもないアイツだろう。

その顔は斬りつける度に陰しくなり、既に現在は鬼気迫る表情と言っても過言ではない。

それでも、まだアーチャーは本気を出していない、が……その気配だけは、既に何か得体の知れないモノへの警戒に満ちている。

遠坂とセイバーも先程からその更なる異常に気が付いているのだろう、啞然としてそれを見ている。

ざりゅ

ぎちぎち

ざしゅり

ぎぢぎぢ

がしゅり

ざしゅり

がぎゃり

がちがち

音が、変化していく。

衛宮士郎が、変化していく。

血が、流れなくなっていく。

血が、鉄になっていく。

そして、遂に

がきん

と言う音がして、アーチャーの双剣が、衛宮士郎の腕に『喰い付か

れた
』

「
貴様、何者だ」

この段階に来て、アーチャーは目を見開き、そう口にした。

何者　と、その剣を、腕に食い込ませて止めた、目の前の男にそう問いかけた。

ばきん、とその剣が衛宮士郎の腕にまるでプレス機で押しつぶすかのように喰い折られた。

次の瞬間、衛宮士郎がもう片方の腕を、何時の間にか振り上げていたその腕を振り下ろした。

アーチャーはもう片方の剣で、それを『打ち払った』

「な　？」

誰かの驚愕する声が聞こえる。

そう、その腕は、斬られるのではなく、『打ち払われた』のだ。

ぎいん、という音と共に打ち払われたその腕を衛宮士郎は瞬時に、強引に、もう一度打ち下ろした。

光が走る。

「な　」

咄嗟にアーチャーは双剣で、新たに投影したもう片方の剣と共にそ

の一撃を受ける。

だがそれは、その手刀によって打ち碎かれ、

「に？」

アーチャーは後退させられる。

今の一撃は・・・まさか、

「勝利すべき黄金の剣　　だと？」
カリバーン

アーチャーが啞然と呟く。

そう、アイツは、衛宮士郎は、確かに今、『腕』であの黄金の剣の『斬撃』を放ったのだ。

「馬鹿な　貴様、一体」

アーチャーが啞然と呟くが、先程から既にまともに意識が無いと思われる衛宮士郎は無言でその腕を振りぬく。

アーチャーは再び取り出した双剣でそれを受ける。

ぎいん、とやはりその腕は血も流さず、傷も受けることなく、アーチャーの剣と打ち合った。

続けざまに振るわれる腕、またも鉄と鉄がぶつかる音を響かせる。

身体は、剣で、出来ている

俺にも馴染みのある、有り過ぎる、だが何処か違う、その言葉が聞こえた。

剣戟が振るわれる。

幾重もの太刀筋。

弾け、火花を散らす剣と

腕。

異常な光景だった。

剣と腕が、拳が、手刀が『打ち合い』、金属音が響く。

この段階に来てまで否定する事はできない。

アイツは、文字通り身体が剣になっている。

アイツは、身体で宝具を、その斬撃を繰り出している。

剣のように斬り、槍のように突く。

時にセイバーの剣のように、アーチャーの双剣のように、ランサーの槍のように、バーサーカーの斧剣のように。

そして、最初はぎこちなかったその剣撃が、その技量が、打ち合うたびに目に見えて上がっている。

もう否定できない、アレは、アイツは、『衛宮士郎』は『俺』^{エミヤシロウ}とは完全に違うモノになった。

愕然とする。

道場内が驚愕の声やら剣戟の音やらで騒がしくなっているが、既にそんなものは耳に入ってこない。

アイツの身体の中に、『あらゆる剣を形成する要素』が満ちているのがわかる。

固有結界が、身体の中で常時展開されている。

確かに『持つて生まれた肉体と外界との遮断』は概念的に最も無理がないことを利用し、結界の範囲を自らの体内に限定するという手法をとることで、長時間の展開も可能だというのは聞いたことがある。

それを実際に行っていた化物の話も遭遇した事など無かったが、何度も聞いた覚えがある。

だが、それをよりにもよってアイツが、この短期間に、この状態で、
こうも唐突に ！？

そんな事を考えている間にも剣戟は加速していく。

「 凜、最早手加減などではいられない。令呪を腕ごと斬り
落とす ！」

それでも止まらないなら首を落とす、とそう言いながら遠坂の制止

が入る間もなくアーチャーが剣を振り上げた。
振り上げた中華剣は既に先程までの形ではなく、刃渡りが倍に肥大化している。

干将莫耶オーバーエッジ

それを衛宮士郎は、よりにもよって令呪を宿す左腕で打ち上げるように迎撃し　いや、そうせざる得ないようアーチャーに誘導され、

「　　っ、があっ　　！」

先程までは斬り合えていた腕を切断される。

断たれながらも振りぬいたその腕から鮮血が飛び散り、アーチャーへと降り注ぐ。

そのまま畳み掛けるかに思えたアーチャーは、

「な　　っ」

しかし、その降り注ぐ血を避けるように大きく後退する。

瞬間、床へと撒き散らされた血は、無数の剣へと変化しその場を槍衾へと変貌させた。

だが、驚愕する間はない。

腕が切断された事にも、その血が剣に変化したことにも構わず、衛宮士郎は残った右腕を握り込み、振りかぶっていた。

「
ゲイ
、
」

奴は何かを呟く。

まるで助走の無い槍投げのように振りかぶるその腕に、禍々しい魔力が宿る。

千を制し機を制し先の先を制し間合いを制し、さらにその先を制して戦を制する。

放たれるは

「
ボルグ
!!
」

必中必殺の一の突き……!!

風を爆ぜる轟音と共に、真紅の軌道が真っ直ぐに伸びる。

腕では絶対に届かない間合いを奔るその刺突は、飛びのいたアーチャーを刺し貫かんと一直線に。

だが、

「熾天覆う」

「

腕を振り上げアーチャーは紡ぐ。

幾ら予想外的能力が、唐突に、出鱈目に、飛び出そうとも、半人前の小僧が届くほど

「
ファイアス
七つの円環！！」

英霊というものは甘くは無い……！！

アーチャーが振り下ろしたその腕から展開される七枚羽の盾。

それは正面からその刺突を受け止め、

「ちっ　　！」

瞬時にその六枚を貫かれた。

だが、最後の一枚は一切揺らぐことなく、傷一つ付かずそれを受け止め、防ぎきった。

だが、その威力にアーチャーは大きく後退し、それを放った衛宮士郎も同じように後方へと下がっている。

両者の距離が大きく開く、既に道場は先程の激突で見るも無残に破壊されつくし、見る影も無い。

「　　」

アーチャーと衛宮士郎は睨み合ったまま、場が沈黙する。

「　　チツ、これ以上は無理か」

先に沈黙を破ったのはアーチャーだった。

「凜、これ以上の戦闘は結界が持たん」

そう言つて、マスターである彼女に指示を仰いだ。

そう、結界は既に限界　いや、既に戦闘を隠蔽できるだけの力は失われている。

これ以上やるなら再度結界を張りなおせと、そうでないならそうではないとさっさと言えとそう言うアイツに、

「・・・・・・・・・・・・・・・・わかったわよ、これだけやられたらもう文句も言いようが無いわ」

これ以上の戦闘は望まないと、衛宮士郎に戦いから降りろとは言わないと。

遠坂は憮然としてそう言った。

そして、

「はあ、降りさせるつもりだったのに結果として思いっきり背中をリタイア押す事になるなんてね。とんだ道化よ」

そうついてふん、と鼻を鳴らすのであった。

・・・・・・・・・・とりあえず、無事に収まったようめでたし、
なのだろうか。

「・・・・・・・・めでたし、なわけあるか。問題点だらけだろ」

今だやり取りが続く道場内、それを見ながらも俺は安心とは程遠い
心持ちで呟く。
考える事が多すぎる。

目の前の騒動がきちんと収まるのを見届けたらすぐにお山に戻って
セイバー
ブリテンダーとキャスターに相談せねばと、そう考える俺だった。

第十六話 二月五日（2）（後書き）

ひゃっはーやっちまいましたよおー。なんだろうこれ、なんなんでしょうこれ。

最早言い訳不要、潔く腹を切らねば。

とかいうのはおいておいて、おかしなものに目覚めた士郎クンなわけです。

個人的イメージとしてはONE PIECEのMr.1とかターミネーター2のアレとか、月姫の教授とか遠野^{ハルオ}四季とか、あやかしびとの一乃谷刀子ルートの如月双七とか色々混ざりすぎてわけわからぬ、ですわ。

最後の一撃のイメージは天上天下の某八艘槍の人の一の突き、ってそのまんまですね・・・。

次回、キャスター先生の解説回の予定（嘘）

あと、流石に今回は後日清書（？）するかも・・・

第十七話 二月五日(3)

「何故私はこんな事をしているのかしら……………」

あの坊やがお山を下りていった暫し後、私は作業の手を止めないまま無然と呟いた。

「キャスター……気持ちわかりますがもう少しですから」

そう言いながらプリテンダー^{セイバー}も力チャカチャと手を休めず仕上げに入った調整を
ちなみに、術式とかそういう魔術的なものではない。

そう、何の冗談なのか、この『神代^{キャスター}の魔術師』であるこの私が、『機械の調整』をしているのだった。

ほんとうに何の冗談よコレ。

それはいきなりだった。

昨日、夜が明けて門番の勤めが終了して少し寝てから外に出てくる、
と言って坊やが裏に引っ込んで、私はプリンターに完成した『剣』
を試してもらおうべく最終調整を行っていた。

会心の出来、渾身の作品、故に調整も完璧に、と思い没頭していた
のは確かだった。

けれど、だからといってあんなものが目の前に現われるまで気が付
かないなんて・・・いや、いつも慣れ親しんだ『だれかさんの
と似通っていたから無意識に無視していた可能性もあるのだけれど・
・・・』

とにかくそれは唐突に現われた。

ふと、妙な感じがして顔を上げた私の前に、

なんか橙色のクラゲみたいな影が居た。

「 !? 」

思わず何か叫びそうになるがなんとか堪えて後ずさる。

なにアレ、なんなの？なんか等身大のおかしな『影』がひらひらふわふわとなんか立体感皆無な感じでそこに在る。

恐ろしく存在感が軽いのに異様なそれに思わず術式を叩き込もうとしたその瞬間、

『しーきゅーしーきゅーびーびーきゅー、アローアロー、声、届いているかしら？』

いきなりその影から緊張感の無い声が聞こえた。

そしてなんか無数の触手のような影が足元から生えてそれをひらひらとこつちに振る。

脱力した。

瞬時に理解してしまった、アレは『あの坊や^{ぼやん}』と同系統のクリーチヤーだと。

で、その影は『審判』と名乗った後、脱力した私に説明を始めたわけだが……。

『いえね、中に居るだけというのもアレだから外に影響力を行使できないか色々試してみたのよ。まあ、悉く失敗したのだけれど。でも……どうもエミヤクンが寝ている間は少し状況が変わるつばいのよね』

とか言いながら手……なのかしら……。？をひらひらさせるその愉快不愉快軟体物体。
ゆかい ふゆかい なんだいぶつたい

とにかく、なんでもあの坊やが寝ている間のみ顕現できる外部端子のようなものだとか何とか……。で、何故そんなびっくりどつきりなナリをしているのかと言えば、なんでも

『いえね……。中の私たちの方で色々入り用だからそういうのをゲットできるモノがいいなあ、と思って色々試したら、何故かこんな形になっちゃったのよね』

外に何か影響力のあるものを出そうとすると反発のようなもの恐らく修正力かなにかなのでしょうけれど それを受けてしまう

ので、それに抵触しないように試行錯誤を重ねたら何故かこんな形になってしまったと。

遠隔操作と物質の取り込みという属性だけを求めたのにこんなものが出来るなんて、素敵！とか抜かすこの神経・・・流石あの坊やの中に居るだけあって理解不能な構造しているわ。

しかし、世界からの修正を避けてこんなものが出来るとは・・・まさかこの街にコレと似たような存在が現出するとも言うのかしら？何も知らない一般人からしてみれば聖杯戦争やらサーヴァントですらとんでもないというのに、こんなモノまで・・・。

碌な街じゃないわね、受肉したら引越した方がいいかしら？

ああ、ほんとうに最近は無敵なことしか考えられなくなっているのかしら私も・・・毒されたわね。

そんな風に頭を抱える私に構わずに、その目の前のモノは、

『というわけで、欲しいものがあるので用意して頂けないかしら？用意してさえもらえればこっちで『取り込む』から』

なんて言いながら一方的に欲しいものを列挙し始めたのだった。

で、その列挙したものというのが・・・

「多い、そして脈絡とか節操とかない上に魔術師である私に頼むものじゃないわよそれ・・・」

とにかく多かった、そして全部魔術など全く関係ない機械だの趣向品だの家畜だの農作物の種だの家財道具だの……意味がわからない。

何処か開拓でもするつもりなのかしら？町でも作るつもり？と呆れて言う私に、こともあるうに目の前のソレは、

『正解。私たちの世界を開拓するのよ。興すの、耕すの、建てるの、造るの、生産するの』

とか平然と言い放った。

もう好きにして頂戴、突っ込むのも馬鹿らしいわ。

最早あの坊やに関して真面目な考察を入れるのは色々と無駄だと見切りをつけることに……。今までも何度かそう思ったのだけれど今度こそはそうすることにした。

あの坊やの中は正真の異世界だということだけで全ての思考に蓋をする私だった。

で、その後、私がすぐに用意できるものだけを必死にかき集め、それこそ可能な限り街からかき集めさせられ……。それをあの仰天物体が影で丸呑みするという悪夢のような光景が展開された後、

何故かとある機材一式のみが飲み込まれずに残っていた。

疑問に思う私に一方的にその理由を告げると、

『あ、そろそろエミヤクンが起きそうだから戻るわ』

残りは後日取りに来るからちゃんと用意しておいてねー、と言ってひらひらふわふわと手？を振りながら去っていった。

悪夢のような数時間だったわ・・・ソレが去っていった方を見ながら、私は非常になんともいえない表情をしたプリテンダーセイバーが入ってくるまで呆然としていた。

プリテンダーセイバーもアレと遭遇したみたいね、表情から察するに。

しかし、ほんと非常識なモノに耐性が付いたと思ったたら次から次へとおかしなモノを出してくるわねあの坊やも・・・と、ぼやきながら私は作業に戻ったのだった。

で、それが何故に現在私がこんな事をしているのかに繋がるかと言
うと、その時アレが残っていた機材　モニターやらの放送機材

それを組み立てているからだ。

なんでも、あの坊やの中から外の様子を実況生中継、これで魔術師
などのそっち側の人間には全く感知されずに偵察などもお手のもの
とかなんとか・・・。

確かに、魔術師に対してはこういった科学に寄った方法というものは
死角に成り得る。

というわけで、私としては釈然としないものがないわけではないが、
とりあえず試してみる事にしたのだった。

そして、組み立てが完了し、

「キャスター、こちらは設置終了です」

「ええ、ご苦労様　こっちも終わったわ」

さて、あとは電源を・・・何故に魔術師の工房に電気なんて通さないといけないのか、私のアイデンティティは崩壊寸前だが、工房で機械の組み立てなぞやっている時点で今更なので気にしない事にした。

そうよ・・・・・・・・気にしない・・・・・・・・ことに・・・・・・・・

「キャスター・・・・・・・・気持ちわかりますが・・・・・・・・む、電源はどれですか？」

「・・・・・・・・はあ、そっちじゃないわセイバー。そこよ、ああそれそれ」

ここまで魔術師としての矜持を捨てて折角組み立てたのだから、とりあえずは起動させてみようと言う事で電源を入れてみる。

ヴウンと言う音と共に画面がゆっくりと明るくなっていく、そして映像と音が・・・

『over count 1999の奇跡を見た！！襲い掛かる無間の槍衾！！秘境、剣の荒野にエミヤシロウは数千年前の姿そのままに実在した！！』

ぶちん

電源を即切った。

「あらやだ、故障かしら？組み立て方が悪かったのかしらね。専門外だからわからないわ」

そう嘯いてプリテンダー^{セイバー}を見る。

別に今の行動を彼女が咎めるなどとは欠片も思っていない、むしろ

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふっ」

なんか、その、こっちが思わず気の毒に思っぐらい失望したような溜息をついている。

「時間の無駄だったわね」

「時間の無駄でしたね」

二人して溜息を付き、さて今日も日課としている作業を行いましょうか、などと言いながらその場を後にしようとした。すると、突如聞きなれない電子音が、

「む……これは、携帯電話ですか。キャスター」

「ああ……そういえばあの橙水母びっけんすいぼに持つてるように言われたんだったわ。すっかり忘れて放置していたわ。使い方がわからないからセイバー、貴女に任せます」

「……キャスター、渡した相手からいつて掛けて来たのは誰かわかっていて私に押し付けようとしていますね……」

まあ、それはそうだ。恨みがましい視線をプリテンダーセイバーに向けられるが、正直私はアレの相手は面倒なので御免蒙りたい。

「貴女の方が圧倒的に付き合い長いのだから扱いも分かっているでしょう？私は一回会っただけなのよ？しかも姿はアレで」

そう、アレだ。アレが初対面だったのだ、あんな仮想大会もびつくりの驚き桃の木クラゲの木だ。

恐らく今後どのような姿で私の前に出てこようと、あの声を聞きたびにあの絶妙理不尽意味不明のあの軟体物体が頭をよぎるのは間違いない。

つまり、私にとってその『審判』とかいう『魔女』……自分が言われるのが嫌なのに人をこう呼ぶのはどうかと思うが、ともかくその女は『あの姿』なのだ。

そんなイキモノとまともに話とか、いや、その、勘弁してもらいたい。

「・・・・・・・・・・ふう」

セイバー
プリテンダーは私の説明に本日三度目の深い溜息をつくとその放置してある携帯電話をその手に取った。
そして何やらボタンを押してそれを耳に当てて会話を　ふうん、知識としては知っているけれど実際見ると不思議なものね。

「　　ええ、はい。わかりました、次は真面目にお願いしますよ『審判』」

どうやら話は終わったようで、それを耳から離れたセイバー
プリテンダーは、

「ふう、キャスター・・・電源を」

私に再びこの忌まわしい機材の電源を入れるように要求してきた。

「　　えー・・・・・・・・私、次あんなふざけた登場だったら機材ごと吹き飛ばすわよ、きつと」

その要求に、思わずそんな事を言ってしまう私だった。

まあ、そう言いながらもちゃんと電源は入れて、アレも今度は真面目に、と言っにはちよつとどうかと思うが危惧したような事態にはならず、私とプリテンダーはその試験放送を視聴することとなったのだった。

まさか、昨夜の光景のようなスプラッターものだとはい正直思わなかったけれど……。

モニターに映る映像は昨夜の焼き直しの如き血みどろの光景だった。道場らしきものの中で対峙する衛宮士郎とアーチャー。あっちのボウヤ

それに至るまでの経緯を説明するあの女の声がスピーカーから聞こえ、こちらはマイクで質問を行っていく。

『中』からの実況と言うものがどういう原理かは不明だが、便利なものだ。

しかし、欠点もある。

この映像からでは、魔力の流れやどういった術式が使用されたかが『視えない』のだ。

よって、その場で視ていてそれを認識できるであろうあちらへ、こちらから質問をしながらそれを見ることとなる。

目の前で流れる映像は、昨夜と同じく戦いと呼ぶのはどうかと思うような一方的なものだった。

随分と長い時間それが続いたような気がするが、違和感を感じ始めた時には口を開くのを忘れて見入っていた。

何時の間にか小うるさく喋っていたあの女の解説も無くなっている。

衛宮士郎の身体の変化、打ち据えられる度に硬度を増す鉄のようなその変質。

それ自体は昨夜と同じような形で推移していたのだが、最後でどんなでもない変化になって現われた。

アーチャーの双剣を身体で受け止めて砕き割り、生身で斬撃を放ち、更に宝具と思しき力の行使を見せたのだ。

拳句、身体から吹き出た血が剣になるなどという出鱈目ぶり、直後に放つ自身の身体を宝具とした真名開放。

アーチャーにはあの盾で上手いこと衝撃を逃して受け止められたけ

れど……。

しかしあの威力、完全ではなかったようだから数枚あれば止められたように見受けられるのに……わざと抜かせて周りへの被害を抑えたのかしら？

無理に押し留めれば双方の力であんな道場吹き飛んでいたでしょうし、六枚は衝撃吸収に使って最後の本命で受けきつたと見るべきね。血が剣に変化するなんて異常で意表を突かれただろうに刹那での判断力、あんな盾まで投影できる技量、やはり油断ならないわねあの男。^{イチヤ}

それはそうと、

「あのボウヤの身体の異常、貴女からはどう見たのかしら？」

直接見ていたこの女の意見を聞いて、あの衛宮士郎^{ボウヤ}に何が起ったのか、少しぐらいは推測を立てておくべきだろう。

『ふう、御免なさいね。ちょっと色々立て込んでいて反応できなかったわ』

そんな事をいいながらあの女は直接見た道場での衛宮士郎の様子を、うちの坊やの見立ても含めて説明し始めた。

何でも、最初のうちは昨夜と同じく、固有結界の暴走かと思っていたが、どうやら違ったようで、

「固有結界との一体化・・・？いえ、自身の身の内を展開する事によって世界からの修正力から逃れた、と言っべきなのかしら？」

どうも、あのボウヤの中身そのものが固有結界と化してしまったらしい。

また唐突におかしなことになっているわね。

セイバー
プリテンダーもなんだか難しい顔をして考え込んでいる。

『あら・・・意外と驚かないのね。エミヤクンなんて結構びっくりしてお陰で『付け込まれちゃって』こっちは色々大変だったのに』

私達の反応が意外だったのか、この女はそんな事を言う。
非常に引つかかる事を言うが今はまだそれを指摘はしない。
それを言うなら先程から色々引つかかっているのだ。
その引つ掛かりを全て整理し、考えを纏めてから言葉にしたい。
そう思い、考えを纏めている私を余所に、

「審判、一つ問いたいのですが　シロウと貴女から見て、私の『
鞘』は彼の中でどうなっているように見受けられますか？」

セイバー
ブリテンダーが口を開く。

あの『鞘』は身体と同化しているとはいえ全ての理を遮断するモノ
であり、如何な固有結界とはいえ『鞘』ごと身体を塗りつぶす事な
ど不可能な筈だ。

そうであれば、一体『鞘』はどうなってしまったのか、と問う彼女
に、

『ん、私は魔術的なものにあまり造詣がないから微妙なのだけれ
ど・・・エミヤクンの見立てではどうも衛宮士郎という『鞘』に、
固有結界という『剣』が納まった形がどうこう、とかなんとか考え
ているみたいね』

そう答えた。

つまり、今までは衛宮士郎の中に溶け込んでいた『鞘』が、固有結
界という『中身』を内包する事によって、中は中でもその外郭を成
す殻のようなものに　文字通り『鞘』になったと言う事だろうか？

それを聞いたプリテンダー^{セイバー}は、むうと唸ると、

「有り得ない　　と言いたいところですが・・・彼もまたシロウで
すし、いや、しかし・・・」

シロウの固有結界は『外』に展開するものであつてそれが色々あ
つたとはいえあのような形になるなど、そもそも身体を固有結界で
塗りつぶしなどして生きていられるものなのか？とかなんとかぶつ
ぶつと言いながら再び考え込んでしまった。

まあ、言いたい事はわかるわね・・・というより、体の中身を固有
結界にして、剣を形成する物質で満たすだなんて事をしてそもそも
生きていられる方が異常だ、それを肯定してもそれは既に人間とし
ての生とは言い難い。

しかし、私としてはそれ以上に気に掛かる事がある。

。

。

よし、纏まった。

「　審判、だったかしら？私からも一ついいかしら？」

この引つ掛かり、この疑問、私の推測が正しければ一応の納得が出
来る。

故に問う。

「貴女が言っていた、『付け込まれた』云々　それと同じ力はあのボウヤに同じような方向性で働いていたかしら？」

私の問いに、暫しの沈黙が訪れる。
そして、

『　　流石ね。非常に良い御質問なこと』

モニターの中のこの女は今までの軽薄さが嘘のように凜とした佇まいでそう呟いた。
どうやら私の推測は間違っていないようだ。

世界の修正力

以前はたればかりで話にならないと言ったが、どうやら数日前、ランサーの襲撃時の考察は間違いではなかったらしい。

エミヤシロウあの坊やには事あるごとに外界から何かしらの力が介入してきている、とその女は語った。

ランサーの最初の襲撃時然り、バーサーカーとそのマスターの襲撃時然り、昨夜のセイバーの襲撃時然り。

それ以外の時でもエミヤシロウの内面が多少なりとも揺れ動けば、そこに付け込んでその『世界』に揺さ振りを掛けてきているのだそうだ。

『だからこそ私達も色々やってそれに対応なり対抗なりしているのだけれど』

なんでも、先日のあの様々な機材やら何やらの取り込みもその一環で、この世界の物を取り込むことによって抵抗力・・・免疫をつけ、完全に異物しかないこちらの『世界』の状態を緩和して少しでも世界との齟齬を埋めて修正を逃れるだとかなんだとか・・・。

尚且つまだ完全に安定していないこちらの『世界』を確たる力タチにしようとしているのだとか。

成る程、適当な事をやっているように見えて意外と色々考えているものだ。

だが、今はそちらの話は置いておくとしよう。

「それで？結局あのボウヤの方はどうなってるのかしら？」

そう、現在の話題はエミヤシロウの事ではなく、衛宮士郎の事なのだから。

『そうね、私が見た限りあっちのエミヤくんには私達にあるような力の介入は見受けられなかったわね』

エミヤシロウ

私達にあるような力の介入はないと言い、続けて、

『けれど、あっちの子は、なんていうのかしら、私達みたいに『中』への介入はないけれど・・・『外』から圧力を掛けられているように見えたわね』

そんな事を言った。

自分達、もといエミヤシロウには内側から引つ掻き回そうとする力が働くが、あの衛宮士郎にはそれがない。

『それどころか、『中』に関してはかなりの矛盾が許容されている
そんな感じがするのよね。だから中身があんな事になっても死んだりしない』

ただし、外で投影などの力を行使するとその強度がかなり劣化する、との事だった。
つまり、

「固有結界やそれに付随する能力を外に出せないように修正力が掛かっているように見える、と？」

『そう言うこと、なんていうか、自己で完結するものならある程度なんでも有りだけど外に影響を及ぼすのはかなりの制限がかかる感じね。血が剣になってしまうのも一瞬ですぐ消えたようだし』

成る程ね・・・よくわかった。

粗方の話を聞き終わった私は、現状で出せる推測を述べる事にした。

「世界は、あつちのボウヤには固有結界を外界を侵食させる形で展開させないつもりみたいね」

そう、エミヤシロウの固有結界・無限の剣製、そしてその先にあるその『世界』、それを警戒するこの世界は同じ存在である衛宮士郎の固有結界を同じ方法で顕現させる事を阻止したかったのだろう。まあ、放っておいてもあの坊やのような出鱈目になる確率はまず有り得ないのでしょうけれど、実際にその有り得ないのが存在してい

るわけだし。

『だから、圧力を掛けてその身の内だけに留めようとした、と？既に出来上がってしまった私達にしたような、内部から引つ掻き回して崩そうとする方法ではなく、その形を歪めようと、封じ込めようとしたと』

面白くなさそうにそういう声に、そうだと答える。

その存在を明確に理解してしまう前に、違った方向に誘導してしまえばいい。
だが、

「それだけでは、その圧力を撥ね退けてより強固に、強引に力を発動させる可能性もありますが・・・なんといってもシロウですし」

セイバー
ブリテンダーが疑問を口にする。

鉄は打ち据えるほどに強固に、頑丈に、鋭くなる。

エミヤシロウ
衛宮士郎という存在はそういうモノだと言っ彼女に、

「そうかもしれないわね、だから逃げ道を用意したのよ」

私は続けて説明を行う。

「その女が言ったでしょう？『中』に関してはかなりの矛盾が許容されているようだ、と」

そう、外側からは圧力を掛けていながら、中には修正が働いていないようだとするならば、

「あのボウヤ自身の身体の中に関する限り、世界は一切干渉を行っていない。それどころか、治外法権化させたと私は考えているの。それによって外に向かう反発を逃がしたのではないかしら？」

逃げ道を作ったのではないか？

ただ押さえつけるだけでは反発を受けてより強固にその力を顕現させかねない。

ならば、その身体の中だけはフリーパスを与えてしまえば、そちらに力が集中するのではないか。

「水は、低きに流れる　　とでも言えいいのかしら？とにかく、それによってあのボウヤの持つ固有結界の能力をその身体だけに限定して押し込めた」

『持つて生まれた肉体と外界との遮断』という概念的に無理のない状況、更にそれを世界に後押しされて『無理のない』という後ろ向きな状態から『完全に可能』な状態にした。

尚且つ、セイバーの『鞘』の力で更にそれを補強して、完全に身体を『剣』として機能させうる事を可能としたのではないか。

簡単に言つと、

「自分の身体はどうとでもしていいから世界には迷惑掛けるな、
つてことよねコレ」

そこまで語り終えると場は沈黙した。

私も含め三人ともが暫く考え込むような間を置いて、

「いやはや、違った意味で化物になつたわね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・凄まじいことになりましたね」

『でも、正直な話・・・エミヤクンと同じ存在なんだし、あんまり驚きがない事がなんともよね』

そう呟いて、なんだかなあといった雰囲気になるのだった。

ふと、モニターに視線を移す。

そんな事をしている間に、その現場となった道場から場所は居間へと移っているようだ。

どうやらアーチャーのマスターとは手打ちになるようで、その様子があの坊やの視点から映し出されている。

正直、もうどうでもいいような気分させられる。

「ふう、審判・・・あとはそっちに任せるわ。こっちは日課に戻るから、何かあったらまた連絡して頂戴」

『うわー投げやりね。ま、いいわ・・・こっちもいつまでもエミヤクン放置しててもアレだし』

「審判、シロウの事をお願いします」

そう言葉を交わして、私はプリンテ^{セイバー}ンダーといつもの作業に戻るべく工房の奥へと引ッ込むのだった。

携帯電話はプリンテ^{セイバー}ンダーに持たせて。

「とりあえず、坊やにはあまり深入りせずに戻ってくるように伝えて頂戴」

『りょーかい、適度なところで切り上げるように言っておくわ』

ああ、全く、無駄に頭を使って疲れた。

あとはあの坊やに任せてしまおう。

精々、先日の学園での出来事のように発見されてその後こちらに襲撃をかけられる、などと言うへまをやらかさないことを祈るばかりだ。

そうなったら今度はアーチャーとそのマスターまで付いてきかねない。

「ま、それぐらいならばなんとかなるでしょうけれど・・・」

セイバーは現在ほぼ無力化されているし、などと考えて私はそれ以上無駄な事を考えるのをやめた。

その見立てが甘かった事を軽く後悔する事になるとは今は考えずに。

第十七話 二月五日（3）（後書き）

あーあーあー・・・活動報告でも書きましたが、職場が異動になつて労働時間が増えて死にそうです。

それに伴い、更新ペースがガタ落ち、気分もなんだか乗らないという悪循環。

奮い立て、私、寝たら死んでしまうぞー、どこの冬山ですかソレ、ああばとらっしゅもう疲れたよ・・・休んでもいいよね、とか何を言っているんだろつかワタクシめは・・・。

現状そんな感じですが、頑張ります。

第十八話 二月五日（4）

「・・・・・・・・むう」

歩きながら思わず唸る。

「・・・・・・・・うつむ」

考える事が多くて思わず唸る。

「うつ~~~~~~~~む・・・・・・・・」

今日はいつも以上に色々あった。

まさか懐かしの我が家に不法侵入した拳句、道場で衛宮士郎が遠坂に、いや正確にはアーチャーになんだが・・・・ボコボコにされていて拳句あのような事になろうとは・・・・。

「むむむむむむ………」

結果的に予想外の、本当に予想外もいい所なんだが、衛宮士郎の異様にも程がある能力の覚醒というか変質というか、それをもってアーチャーの攻撃を跳ね除けた事により、遠坂達とは手打ちになったとはいえ、直後に衛宮士郎はぶっ倒れてそれ以上の話が出来る状況ではなくなった。

この時点で俺は衛宮邸を出て帰路に付く事にしたのだが、

「うーん……結局、当初の目的を果たせたのか果たせなかったのか、一体どうしたらいいんだろうなコレ」

いや、様子見に来たのだから目的は果たしたと言えるんだが、まさかあんな想像の遙か斜め、もうこれでもかかってぐらい見当違いな方向に事態が動いてしまっていると色々困惑してしまっただけのものか……。

「うーーーーん………」

というわけでお山に向かって足を進めながらも延々と唸っている俺だった。

結局、見ていただけで何もしなかったし、というより出来なかったんだが……下手に関わると先日の子の二の舞になる可能性だってある

し、

「というより、もう下手に関わらずに肅々とこっちの目的を完遂する事だけを考えるべきだろうか・・・」

あそこまで変質した以上、俺と同じだとかいう考えは捨てた方がいい。

そうなるに妙に肩入れしてもややこしい事態を引き起こすだけかもしれないし、今後はアレは別の『衛宮』という個人と捉えて他のサーヴァントやマスターと同じように相對していくべきなのだろう。

・・・なんだろう、むしろそうすると今まで自分の事だから、とか結構おざなりだった扱いがむしろランクアップしそうな気がするんだが。

なんか、凄く抵抗があるぞ、うん。

「なんか見てると苛々するんだよなあ衛宮士郎^{アイツ}」

うーん、線引きとして他の面々と同一に考えるのには非常に抵抗がある。

かと言って俺とはかなり違うモノになっているし、なんかこうもやもやするなあ、なんだろうこの気持ち。

まあ、それは置くとして、

「結局セイバーの状態は何も改善してないんだよなあ」

これが一番の問題なんだよなあ。

魔力切れの問題が解消されている様子が無い。

アーチャーに一方的に無力化されるほどに弱っている状態で、少しでも無理をすれば消えてしまいかねない。

まあ、遠坂と協力関係になればそうだからここら辺はあいつがなんとかしてくれるだろうとおも・・・

唐突に、遙か昔、ある廃墟での一夜の事を思い出した。

「　　つつつ！！」

やば、うわ、なんで唐突にあの夜の事を思い出すかな、うわ、顔が熱い。

思わず顔を抑えて唸る。

そういえば、俺の時も魔力供給が出来なくて、その、なんだ・・・して・・・それで、

あははは、抱いてから好きになるなんてサイテー

「うがあああああ！！！」

またしても唐突に、唐突に昔の情景が！遠坂の心決るあの一言が！！何故よりにもよって甘酸っぱいあの記憶の次に思い出すのがそれなんだよ！

というか、完全に忘却していた筈の物事まで最近はずきりと思い出して、いや思い出すも何も既に記憶の中からして失われているのだから思い出すというのすら適切でないんだが、それが何故『思い出せてしまう』のか、嫌だ、是非ともさっきの台詞は、その時のあかいあくまの心底楽しそうな笑顔もだが、失ったまままでいたかった。

……落ち着こう俺、なんだか思考が物凄くおかしい方向へ流れていつている。

すう……と、深呼吸をして、心を落ち着ける。
何時の間にか立ち止まっていたようだ。

『で、ようやく落ち着いたみたいだけど、いい加減こっちの声に……』

『耳を傾げんかこの戯けが』

『エミヤー、下、したー、足元』

「む……」

どうやら考え込んでいて自身の『中』から聞こえるコイツらの呼び

掛けすら聞こえてなかったらしい。

というか、なんだその『志村、後ろ、後ろー』みたいなノリは・・・
・下？

下を見た。

なんか、

金色の鎖と目（？）が合った。

「
は？」

瞬間、

じやらああああああっ、という音と共に鎖が襲い掛かり全身に絡みついた。

「う、うおおおっ!?!」

そして、そのまま引き摺られそうになるのを堪えようとして、
びたーん

「ぶぐお
」

堪えきれず

ぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃりっ

「いびきいびきいびきいびき」

引き摺られつつも地面に齧りつく。

『うわあ、無様ねー』

ずりずり

『・・・しかし、この程度の鎖なら本来の力を出せば簡単に振りほどくなり引きちぎるなりできそうだが』

びたん

『わかってねーな騎士サマ、エミヤはなんていうかこう、自分の事だとあんまり力発揮しないじゃん。本気でヤバイ！って時つつーの？『死の予感』？みたいなのがない』

ぎゃぎゃぎゃぎゃ

『そうねー、他人の事だといつも全力全開フルスロットルなのに自分に対するものには須らく鈍感だし力発揮しないわよねー』

びちん

『……そうだったな、確かにこの鎖からは殺気などは感じられん』

がつん

『そーいうこと、こーいう場合のエミヤは実力の半分も出ないからなー。むしろなんで無駄な抵抗してるのかが俺的に激しく謎』

がりがり

『馬鹿ねー、こーいうサービス精神がエミヤクンのエミヤクンたるところじゃない』

「お、お前ら……」

ぎぎぎぎぎぎぎ

『ああ、つまり』

『『芸人、と』』

「ふざ……けんなああああ!!」

うがー、と思わず叫ぶ。

今なら俺にも虎が出せるんじゃないかってぐらいに。

もうなんだっていうんだこのセメント野郎ども、俺の硝子の心は粉々ですよ。

で、そんな余計な突っ込みに全力を傾けた結果、

「あ、」

『いやー、ほんと期待を裏切らない芸人魂』

『今回も楽しませてもらったわー』

『・・・・・・・・』

またしても俺は天高く舞い上がった。

・・・・・・・・くそ、もう何もいう気になれない。

落下予想地点に目を向けると、予想通り金ぴかのあの野郎が居る。
視線が交わるが、文句を言う気も失せたので、今回は滞空時間も長
めなのでキチンと着地を取ろうと思ったら、

「ほお、天に仰ぎ見るべきこの我を見下ろすとは随分な態度
いや、私の拝謁の誉れに授かろうと矢も盾もたまらず飛び出してきた
のであればこの程度の無礼は許してやるが王というものよ。はっ

はっは、それに、なんだ、宙を舞いながらも逆さであるからして、『仰ぎ見ている』しな！いやいや、位置として上に居るからといって見下ろすとは限らないのであったな、この我としたことがとんだ失言であつた。先の言を取り消そう　忠勤、大儀である。・・・ククツ、それにしても器用な」

なんて、一息でそんな王様発言をしつつ朗らかに笑ってやがるもんだから、

「釣り上げたのはデメエだろうがあ　　！！」

思わず指差して突っ込んでしまった。

貴重な体勢を整える時間を犠牲にして。

結果、

「　　あ、」

気が付いたら目の前に地面があつた。

蘇る先日の眼鏡が目じりに食い込んだ記憶、　思わず顔面から落ちるのを避けようと顔を背ける。

結果として、間違いに気が付く間もなく、

ごりゅっ
ごぎゃっ

嫌な擬音を二つ同時に発して、首を捻ったまま頭から地面に激突し、

「はぎゅ つゝつゝぐ・・・・・・・・ふう」

どしゃり

そのまま崩れ落ちた。

首が、首が捻れてブロークンでネックで、とにかくネックブロークン、我が椎間関節は捻れ狂う　要約すると死ぬほど痛くて言葉も無い。

痛すぎて思考が乱れ立ち上がることも出来ず打ち揚げられた魚のようにはびくびくと痙攣しながらひゅーひゅーと途切れ途切れに呼吸している、

「ふむ、なんだ、先日もだが今回もなんと言うか・・・アレだな、この我をして言葉が浮ばん面妖な着地法だ。前回は無様と切り捨てたが、よもや未来の平行世界とやらでの目上の者に対する礼の執り方なのか？それは」

とか真面目に聞いてきやがった。

「・・・そんな・・・な、奇抜・・・に過・・・ぎる礼の、執り方が・・・ある・・・か・・・」

なんとか声を絞り出して立ち上がる。

復活早いなーとか無責任な声が聞こえるが無視する。

目の前には先日あった時と同じく、黒いライダースーツを纏った金色の男が腕を組んで俺を見下ろしている。

二度目なのになんだらうこの『またか』って気分、

「はあ・・・今日は何の用だギルガメッシュ」

思いつく限りの文句なり罵詈雑言を1ダースぐらいくれてやりたい所だが、さつさとお山に帰りたいので用件を済ませてお帰り願おう・
・首が痛いし。

そう思つて用件だけ尋ねたんだが、

「気安くこの我の名を呼ぶか 名乗つた覚えも無いのだが・・・
まあ先日の未来云々の話からして知つていても不思議は無い、か
ふん、まあよかろう」

なんか妙な線に触れたのか笑みが少し禍まがつたぞ。

「それと、何の用か だと？戯け、我の先日下した決定を忘れたか。言つたであらう、見極めると」

あー、そんな事も言っていたなあ・・・。

「その在り様、果たしてここでも貰けるのか だつたっけか？」

「そうだ。先日貴様と別れた直後に面白いモノを見かけてな、丁度良いのでまずはそれで試してやろうと考えてな」

面白いもの？それで試す？一体俺に何をやらせるつもりなんだコイツは・・・嫌な予感しかないぞ。

いざとなったら逃げ出そう、全力で。

そんな事を考えている俺に、ギルガメッシュは、

「そら、来たぞ。あそこだ」

そう言うのにやにやと笑いながら俺の後方を指差した。

振り向く。

そこには、穂郡原学園の制服を着た女生徒が、俺の良く知っている、知っていた、『知っているつもりだった』、その娘が居た。

間桐桜が衛宮邸へと向かい歩いている姿があった。

その姿を見た瞬間、

俺は、

懐かしさではない、別の感情で、凍りついた。

「。」「

「ほう、一目で気が付いたか。一緒に居た貴様と瓜二つの雑種は欠片も気が付いていなかったようだ」

背後から愉しそうな声が聞こえるが耳に入らない。

俺の目は先程から桜に向いたまま。

間桐桜、当時の俺にとっての日常の象徴。
魔術師という日陰者、聖杯戦争という闇、それに関わった俺にとっての日常の、陽だまりの象徴。
だというのに、

「いや、我も目にしたときは驚いたものだ。あのような『^{まが}禍いモノ』が存在し、息をし、何食わぬ顔で目の前を歩いていた時は 思わずその場で『処分』してしまうところであつた」

何故、

「だがな、あのような汚らしいモノに我自らが手を下すのはあまりに釣り合いがとれんとは思わんか？我が財の一つで事足りるが、それすら惜しい」

何故、あんなにも禍々しい澱んだモノを身の内に宿しているんだ。

はつきりとはわからないが、体中に何かが、おぞましい何かが巢食っているのが今の俺にはわかる。

「故にな、こう忠告してやったのだ 『いまのうちに死んでおけよ娘。馴染んでしまえば死ぬこともできなくなるぞ？』とな」

遠い日の、桜の姿を『思い出した』。

「しかし、我の忠告を聞かずに今だに道化芝居を続けているらしいな。あの雑種の傍で あれは過去の貴様なのだろう？」

俺の時もあだったのか？

「いやしかし、滑稽よな。人形以下の蟲の苗床の分際でまだ己が人であると思いたいらしい」

あんな、身体があんな事になっているのに、それを隠して、俺達の前で、笑っていたって言うのか・・・！

「あの雑種への縋り付くような視線、あまりのおぞましさに晒いを堪えるのに苦労したわ」

辛かったはずなのに、俺達の前ではそんな素振りも見せずに、日常を廻し続けたっていうのかよ・・・！！

「で、いつまで呆けているつもりだ？『正義の味方』とやら？」

「っ」

「今は必死に押さえ込んでいるようだが、少しでも切欠があればアレは人を喰らう魔性となろう」

うるさい

「アレを人とは我は考えんが、貴様は違ふのだらう?」

うるさい

「人が人を屠らばつまらぬ罪罰で迷おう。そうなる前に樂にしてやるべきだとは思わんか?」

うるさい

「その様子では『貴様の時』にはアレがその本性を現すことはなかったのだらう。もしくはあのような様にはなっていないかったのかもしれん」

黙れ

「だが、果たして此度もそうなると思うのか?そうやって事が起くるまで静観するつもりではあるまいな?」

黙れ

「それは最も愚かしい選択だ。貴様もそのぐらいは弁えているだろう？」

黙れ

「ではどうする？」

だまれだまれだまれ

「さあ、どうするのだ正義の味方^{エミヤシロウ}!!」

なんだってんだ

なんだってんだよちくしょうめ

どうするか、だと？

「こつ、するに決まってるだろうが！」

駆け出す。

胸のうちがざわわして収まりが付かない。

なんだか視界が歪んで罅が入りそうだ。

吐き気がする。

だが、それを抑えて駆け出した。

桜の方へ。

既に大分離れていってしまっているが、一瞬で追いつく。

すれ違う。

その瞬間に、

「え……？」

意識を刈り取る。

そして、ぐらりと崩れ落ちるその身体を、

「
『ノリ・メ・タンゲレ私に触れぬ』」

拘束する。

『マグダラの聖骸布』 相手を、特に男であれば捕らえられたが
最後、能力を含め全ての動きを封じることのできる拘束に特化した
魔術礼装。

桜は男ではないが、その身の内に巢食うモノからは理由はわからな
い、いやわかりたくないが、生々しくもおぞましい『男』の気配が
感じられた。

故に、これで拘束すれば、どのような術式、どのような方法であれ、
桜の身の内にあるモノが何かしらの干渉を、操ったり、殺傷したり
などの真似は、きっとできなくなる。

自信は無いが……そうでなければ困る、そうあって欲しい。

そして俺は、意識を失い全身を赤い布に覆われた桜を抱え、

お山へと向けて全力で、こちらに来て初めて、本気の本気、全力全開で駆け出した。

一瞬で先程まで居た場所が遠ざかる。
背後から、

「くっ・・・ふははははははははは！！なんだそれは！？正義の味方とやらは人攫いも生業としているのか？」

とか、哄笑が聞こえて来たが無視した。

聖骸布の効果に自信が持てない以上、一刻を争う。

本来ならば、いきなりこんな博打をうったりはしなかった。

桜がどんな状態かも、これを行ったヤツがどんな仕掛けを施しているか、そういった事を慎重に調べて行動に移すべきところを全てすっ飛ばして、一歩間違えばどうなるかわからない賭けをうつなど。

とにかく、この時の俺は冷静さを失っていたのは間違いない。
そんな事を考えもせず、俺はひたすらにお山へと走ったのだった。

「ふう、今日はこのぐらいにしておきましょうか。お疲れ様、^プリ
テンダー^イ」

「おや、もういいのですか？いつも通りの時間ではありますが、今日は審判が持ち込んだアレのせいでいつもよりも開始が遅かった筈ですが」

「いいのよ、そろそろ現状で溜め込める魔力が限界に近くなっているから、あとは器が完成しないと危険よ」

「成る程、そういえばまだ器が完成していませんでしたね・・・で

は、切り上げるとしますか」

工房での日課である作業を終え、私とプリテンダー^{セイバー}はこれまた日課となつているお茶を楽しんでいた。
そろそろ坊やも帰ってくるかしらね、なんて二人で話しながら寛いでいたのだが・・・

ごおうん

いきなりの振動、

「な
」

「ああ！私の羊羹が！」

動揺する私達二人・・・ってプリテンダー^{セイバー}、貴女ね・・・。

直後に坊やが凄い勢いで工房の戸をぶち破って入ってきた。

何事？なんか凄い勢いで気が付いたら私の前にまで移動してきて・・・

・空間転移かと思つたわよ一瞬。

直後、坊やの背後から、

思わず叫んで零距离で術式をお見舞いしてしまった。

第十八話 二月五日（4）（後書き）

お久しぶりです。長らくお待たせいたしました。

相も変わらず職場が修羅場（仕事、人間関係両方で）です。

暫く書いてなかったせいでなんか文章の温度というかノリというかが違ってしまっている気がしてなりません・・・気のせいだといいのだけ。

ああ、時間が欲しい、でも仕事は来月も人が減って更に忙しくなるんだろうなあ・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8706m/>

剣と鋼と黄金の大地

2010年10月21日02時08分発行